

第Ⅱ部 2012-2013 年度における各研究室等の活動

01 言語学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

言語学は、世界の言語を実証的かつ理論的に研究する学問である。本研究室では、特定の理論・言語に偏ることなく、過去の文献資料も含めた世界の多種多様な言語を自分の手で調査・研究し、その一次資料から一般化を図るという基本姿勢を貫いている。

言語を教科書から学ぶのと、自分で未知の言語を調査し分析するのは全く別のことである。後者の方法を身につけるには、学部段階から教育・訓練が不可欠である。当専修課程は、言語学の基礎的な考え方を学ぶだけでなく、音声学を修得し、言語の調査・分析を行なう能力も身につけることのできる国内でも数少ない課程の一つである。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2013 年度末現在の教員数は、教授 3 名、准教授 1 名、助教 1 名である。この他、学部・大学院の共通講義として毎年異なる非常勤講師を他大学から迎えている。加えて大学院教育では、韓国朝鮮文化研究室、中国語中国文学研究の教員をはじめ、本学の日本語教育センター、および工学系研究科（音響音声学）の教員による講義も開講している。

教養学部からの言語学専修課程への進学者数は最近では 10 名前後で、大学院修士課程へは、本専修課程卒業者のほか、他大学出身者や外国人留学生も入学している。博士課程はそのうちの約半数が進学するが、外部にも門戸を開いている。

教養学部前期課程には、毎年総合科目を出講することにより協力している。また、2012 年度からは、方法基礎にも出講している。

(3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

教員と大学院生の研究発表の場として、1979 年以降『東京大学言語学論集』を毎年刊行している。同誌は東京大学レポジトリにより全文がワールド・ワイド・ウェブ上で公開されている。最も関係の深い学会は日本言語学会であり、教員全員が常任委員会、評議員会、編集委員会のいずれかの委員を務めている。学会大会では、博士課程の大学院生が大会で活発に研究発表をしている。その他、研究テーマによっては日本語学会や日本音声学会などで発表することもある。

また、1998 年度以来、京都大学の言語学研究室と交流演習を実施して成果をあげている。院生が毎年 1 人ずつ相手校で発表をし、教員・院生の批評を受けるというものである。

当研究室では、1998 年以来、ホームページを立ち上げ、これらの研究室活動の情報を提供している。その URL は次のとおり：<http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp>

(4) 国際交流の状況

本研究室は外国人留学生が多く、アメリカ、インドネシア、韓国、中国、ポーランド、キルギスタン、米国などの学生が日本語や自分の母語の研究を進めている。日本人学生にとっても良い刺激となっている。

逆に、日本人の大学院生が、現地調査ないし留学のために長期に渡って海外に出ているケースも少なくない。研究室としてもこれを積極的に勧めている。

また、外国人研究員も随時迎え入れている。さらに、科学研究費などで海外の研究者を招待した時には、院生・学生に向けての講演会も開催している。

2011 年から発足した香港中文大学との部局間交流協定においては、担当研究室として交流事業に貢献している。この交流協定の枠組みで、2011 年 5 月 22 日に “Sign Language Research in Asia” を開催し、150 名を超える参加者があった。また、同時に締結された学生交流の覚え書きに従い、2012 年に大学院生 1 名が 1 学期間香港中文大学に留学した。2013 年にも、夏期講座に大学院生 1 名が参加している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

熊本 裕 (教授)	: イラン語学	1989 年 4 月～2013 年 3 月
林 徹 (教授)	: チュルク語学	1997 年 4 月～現在
西村 義樹 (教授)	: 認知言語学	2004 年 4 月～現在
小林 正人 (准教授)	: 歴史言語学	2010 年 4 月～現在

木村 英樹 (教授)	: 中国語学	2013 年 4 月～2014 年 3 月
永澤 済 (助教)	: 日本語史	2011 年 4 月～2014 年 3 月

(2) 助教の活動

永澤 済 (ながさわ いつき)

在職期間: 2011 年 4 月～2014 年 3 月

研究領域: 日本語史

論 文: 「複合語からみる「自分」の意味変化—なぜ「自分用事」「自分家」「自分髪」という言い方ができたか—」、『東京大学言語学論集』、第 29 号 (上野善道先生退職記念号)、pp.195-220、2010.3
「変化パターンからみる近現代漢語の品詞用法」、『東京大学言語学論集』、第 30 号、pp.115-168、2010.9
「文法的機能からみた漢語」、『国文学解釈と鑑賞』、第 76 巻 1 号 (特集「いま、漢語は」)、pp.153-162、2011.1
「漢語「-な」型形容詞の伸張—日本語への同化—」、『東京大学言語学論集』、31、pp.135-164、2011.9

学会発表: 「日本語との接触における漢語の異質性と受容」、第 4 回東京移民言語フォーラム、2011.11.26

(3) 外国人研究員・内地研究員

	2012 年度	2013 年度
内地研究員	0 名	1 名
外国人研究員	0 名	0 名
大学院人文社会系研究科研究員	1 名	0 名

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「日本人の個人名に関する研究」

「センタリング理論を用いた日本語のゼロ代名詞の分析について」

2013 年度

「独話における「ケレドモ」の用法の分析—ラジオ番組の独話と対話の比較を通して—」

「トルコ語の非人称受身における属性叙述の影響」

「インドネシア語における話題化について」

「サンタル語における自動性分裂の意味的動機」

「Subject Ellipsis and Person Tracking Systems in Japanese (日本語における主語省略と人称追跡システム)」

「福井平野北部・東部地域のアクセント分布」

「ハンガリー語における VA 分詞の受動的意味について」

(2) 修士論文執筆・題目一覧

2012 年度

山田望「超分節の側面におけるフランス語の通時的変化」〈指導教員〉熊本裕

安藤聡士「日本語における副詞の認知言語学的分析—「普通」を中心に—」〈指導教員〉西村義樹

佐々木充文「R-marking: Referential Person Affixes in Classical Nahuatl Nouns」〈指導教員〉熊本裕

津田悠一朗「イタリア語における語形成と音韻構造の関係—省略による語形成を中心に—」〈指導教員〉熊本裕

HONKASALO SAMI PETTERI 「Negation in Shang Chinese: A Corpus-based Approach」

〈指導教員〉西村義樹

王瓊「中国語語気詞〔啊(a)〕の用法についての考察—コーパスに基づく分析」〈指導教員〉西村義樹

2013 年度

相川真毅「日本語の比較表現」〈指導教員〉菊地康人

大槻知世「津軽方言の文末詞」〈指導教員〉小林正人

佐藤藤生「日独無声摩擦子音知覚・同定に関わる周波数帯について」〈指導教員〉小林正人

鷲澤拓也「16-17 世紀のベトナム語における「解音」の意義—『傳奇漫録解音』の翻訳文における虚詞の研究」

〈指導教員〉小林正人

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

江畑冬生「サハ語名詞類の研究―接辞法と統語機能を中心に―」

〈主査〉林徹〈副査〉熊本裕・西村義樹・藤代節・渡辺己

許永新 XUYONGXIN 「日本語の構文と自・他動詞のプロトタイプ」

〈主査〉西村義樹〈副査〉林徹・木村英樹・上野善道・早津恵美子

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

児倉徳和「シベ語のアスペクト・モダリティの研究―知識状態の変化にもとづく体系化―」

〈主査〉林徹〈副査〉木村英樹・西村義樹・小林正人・久保智之

(乙)

なし

02 考古学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

東大考古学研究室は、伝統的に東アジアの中の日本という視点を重視してきた。同時に、研究科内の常呂実習施設や韓国朝鮮文化研究室、あるいは学内の総合研究博物館、新領域創成科学研究科、埋蔵文化財調査室等に所属する、日本近世、朝鮮半島、北アジア、西アジア等の考古学分野ないし生態系史や年代測定学等の関連分野の教員と協力して、幅広く教育研究活動を展開している。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

50年以上にも及ぶ北海道における調査では、常呂実習施設との共同調査として大島2遺跡の調査を2009年よりおこなっている。

大貫を代表として2007年度より開始した科研費課題である東京大学とロシア・ハバロフスク郷土博物館との国際共同調査では、2012年度はウディリ湖遺跡群を調査し、2013年度はダリジャ湖遺跡群の調査をした。また、同じ研究課題でのサハリン国立大学との国際共同調査では、スラブナヤ5遺跡の調査をした。

佐藤を代表として2009年度より開始した更新世黒曜石の流通と消費を課題とする科研費研究では、北海道北見市吉井沢遺跡の調査を2012、2013年度に実施した。

設楽を代表として2013年度より開始したレプリカ法による土器圧痕調査を踏まえた先史時代の植物利用の研究では、熊本県ワクド石遺跡をはじめとする国内数遺跡の調査をおこなった。また、2011年度より開始した総合研究博物館所蔵の大洞貝塚出土遺物の整理作業を2012、2013年度で行った。

(3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

2011年12月日本中国考古学会大会開催、2012年2月北アジア調査研究報告会開催

『東京大学考古学研究室紀要』は、2012年度27号、2013年度28号と順調に刊行された。すべて下記の研究室HP上にて公開している。

研究室のホームページのURLは<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/archaeology/>

(4) 国際交流の状況

ロシア・ハバロフスク郷土博物館、同国立極東大学博物館、同サハリン総合大学博物館との間に結んでいる研究交流協定に基づき、科研費課題を遂行した。13年度の学振二国間共同研究課題にもとづき、ロシアとの共同研究を実施した。

2012、2013年度の北見市大島遺跡の調査に中国・北京大学考古系の教員1名、大学院生5名が参加した。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

大貫静夫	東北アジア考古学（現在に至る）
佐藤宏之	旧石器考古学・民族考古学（現在に至る）
設楽博己	縄文・弥生時代考古学（現在に至る）

(2) 外国人研究員・内地研究員

2012年度

外国人研究員 金 尚泰

2013年度

外国人研究員 李 相均

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012年度

「日本における掩体壕の考古学的研究」

「日本列島における更新世遺跡の分布と立地—最終氷期最寒冷期を画期とした変遷—」

「日本における犬食文化の歴史」

「酒造に関する地域比較」
「19世紀英国における考古学の大衆化―大英博物館を中心に―」
「弥生時代の土器製塩について」
「擦文時代消失住居の研究」
「新聞報道から見る考古学と社会」
「香川県域における前方後円墳の主軸方向について」
「鎖国期長崎を通した陶磁器輸入」

2013年度

「甕棺の穿孔について」
「考古学におけるコンピュータ・シミュレーション利用の展望と課題」
「中部山地における石棒祭祀に関する研究」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012年度

守屋亮「レプリカ法を用いた東京湾西岸地域における弥生時代の栽培植物利用に関する研究」〈指導教員〉
設楽博己
山本亮「長江中流域における殷代社会動態に関する考察―湖北省盤龍城遺跡及び江西省呉城遺跡の検討を中心に―」〈指導教員〉大貫静夫

2013年度

杉浦章一郎「オホーツク文化の展開過程に関する研究―和田式期を中心に―」〈指導教員〉熊木俊朗
西村広経「東関東における縄文時代後期・晩期竪穴住居儀礼の研究」〈指導教員〉設楽博己

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012年度

(甲)
角道亮介「西周時代青銅器の研究」
〈主査〉大貫静夫 〈副査〉佐藤宏之・設楽博己・飯島武次・西江清高
(乙)
なし

2013年度

(甲)
榊田朋広「擦文土器の編年的研究」
〈主査〉熊木俊朗 〈副査〉佐藤宏之・設楽博己・宇田川洋・菊池徹夫
小寺智津子「弥生時代及び併行期の東アジアにおけるガラス製品の考古学的研究」
〈主査〉大貫静夫 〈副査〉設楽博己・早乙女雅博・後藤直・岡内三眞
(乙)
なし

03 美術史学

1. 研究室活動の概要

1910 年、「美学」の講座が創設されて以来、その主要研究分野のひとつが美術史であったため、1917 年、「美学美術史」と改められた。1963 年、組織拡充に伴い「美術史学」として独立し、第一類（文化学）に属することになった。5 年後に、第二類（史学）へと移る。1994 年、文学部の改組によって、歴史文化学科の専修課程となる。1995 年、大学院重点化に伴う改組により、美術史学の大学院課程は、ディシプリンの独立は保持しながらも、最近の専門研究の動向とインターディシプリナリーな要求に応えるため、考古学とともに人文社会系研究科基礎文化研究専攻の中で形象文化コースを形成することになった。

研究の対象は、あらゆる美術作品や形象表現である。時代は原始から現代まで、地域もまったく限定されない。もとより、教員の専攻分野にしたがって、現在のところ、日本、中国、西洋、イスラームの美術、特に二次元芸術である絵画が主たる研究対象になっているが、決してこれに局限されるものでない。

現在の教員は、教授 2 名、准教授 1 名である（2008 年 3 月までは助教 1 名が在職）。それぞれ自己の専門分野を中心に研究および教育に最大の努力を重ねているが、上述のような美術史学専修および大学院課程の基本的性格から充分であると言ひ難い。そこで、東洋文化研究所および総合文化研究科から教員 3 名のほか、多くの非常勤講師に出講を依頼し、さらに次世代人文学開発センター先端構想部門（2005 年 3 月まで文化交流研究施設基礎理論部門）の協力を得て、可能な限り完璧なカリキュラムが編成できるよう努めている。

教養学部からの進学はこのところ定員枠ほぼ一杯に近い。修士および博士課程進学者は、学内外から受験者が多いものの、ここ数年合格者が定員枠に満たない。この他、学士入学者の採用も行ない、優秀な学生の発掘にも心掛けている。

研究室の活動としては、この期間も教授 2 名、准教授 1 名が美術史学会の常任委員を務め、学会活動を主導した。2013 年 3 月、2014 年 3 月には美術史学会東支部例会を担当した。このほか 1985 年以来、研究室紀要『美術史論叢』を毎年 1 冊発行し、既に 30 号（2014 年）に至っている。教育活動として毎年実施される古美術見学旅行（演習）があり、学生にとって美術作品調査研究の最初の訓練の役割を果たしている。

国際交流も盛んである。2013 年 3 月の時点で、外国人留学生の博士課程在籍者 1 名、修士課程在籍者 2 名、外国人大学院研究生 3 名がいた。2012 年 7 月 15-20 日にわたり開催された国際美術史学会第 33 回世界大会『The Challenge of the Object』（於ドイツ、ニュルンベルク）に、教授 2 名、准教授 1 名が参加。教授 1 名は日本委員会代表として運営委員会に、教授 1 名が第三セッション『On Religions and their Objectifications as seen from Intercultural』（7 月 16、17 日）に座長として参加した。また 2013 年 1 月 15-18 日には国際美術史学会鳴門コロキウム『Between East and West: Reproductions in Art』を大塚国際美術館にて開催、ジェイニー・アンダーソン CIHA 前会長、ウルリヒ・グロスマン会長、ティエリー・デュフレンヌ事務局長をはじめ 30 名を超える海外からの参加者を得たが、研究室が企画・運営に関わり、准教授 1 名が発表を行なった。2013 年 9 月 19-21 日には在フィレンツェ、ドイツ美術史研究所（マックス・プランク研究財団）およびウフィッツィ版画素描美術館との共催により国際シンポジウム『SEN: On Lines and Non-Lines』を企画・運営、海外からゲアハルト・ヴォルフ、マルチア・ファイエット、アレッサンドロ・ノーヴァ、イングリット・バウムゲルトナー、ジュビレ・クレマー各氏をはじめとして 17 名の発表者を迎えるとともに、教授 1 名が発表を行なった。同年 11 月 24-26 日にはチューリヒ大学東洋美術史研究所（ハンス・トムセン教授）およびフリブール大学中世美術史研究所（ミケーレ・バッチ教授）において、科学研究費課題である「美術と宝物の相関性」についてのシンポジウムやセミナーを行なった。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 佐藤康宏教授（日本美術史）
- 秋山聡教授（西洋美術史）
- 高岸輝准教授（日本美術史）

(2) 助教の活動

当該期間は助教不在のため特記事項なし。

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「パトロネージシステムがイタリア・ルネサンスに与えた影響」
「聖母子像ビザンティンからルネサンスへの変化」
「アルノルト・ベックリーンの象徴海外についての考察」
「中国霊璧石」
「聖衆来迎寺六道絵 人道不浄相について」
「ジャクソン・ポロック ブラックポーリングについて」
「吉備大臣入唐絵巻研究」
「エドガー・ドガ研究—《中世の戦争場面》を中心として—」
「フェリーチェ・ベアトの写真表現形式」
「日露戦争における風刺画」
「ジャクソン・ポロックを中心とした、アメリカン・モダンアートと「作品の完成」の問題」
「マン・レイ「レイヨグラフ」に見る実験的芸術活動とその主題」
「ジョン・マーティンと大洪水以前の世界」
「ジョン・エヴァレット・ミレイ「ファンシー・ピクチャー」について」
「オーブリー・ビアズリーの《父の亡霊を追うハムレット》における自己表象という側面について」
「ラファエロのローマにおける制作」
「印象派絵画の魅力（光と時間の演出を中心に）」
「彦火々出見尊絵巻」の絵画表現と制作背景」
「『聖三位一体』イコンの図像変遷」

2013 年度

「山脇道子とその時代」
「ロマネスクの美術における竜＝ドラゴンをはじめとした「怪獣」の存在について」
「蔦屋重三郎を通じて考える喜多川歌麿の画業」
「カミーユ・コローの絵画における主題の変容について」
「下村観山と琳派」
「ロバート・メイプルソープの死と永遠」
「レンブラント《ガニメデスの略奪》における桜桃の図像学」
「片輪車蒔絵螺鈿手箱の意匠についての考察」
「アルフォンス・ミュシャに象徴主義が与えた影響～ギュスターヴ・モローと比較して～」
「19～20 世紀における鉄道の描写とその作者の近代化（産業革命）への態度」
「素材から考えるベルニーニの美術への意識」
「狩野山雪「長恨歌画卷」について」
「英国画家としてのビアトリクス・ポターについて」
「アンリ・マティスの室内画と装飾—特に《赤いアトリエ》について」
「パプアニューギニア彫刻・ビスポールについて～ニューヨーク・メトロポリタン美術館マイケルロックフェラーコレクションにおける諸問題～」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

遠田春菜「日本近代における少女の表現—世紀末美術と 1970 年代の少女マンガの関係を中心に—」〈指導教員〉小佐野重利
太田泉フロランス「中世フランス王家コレクションにおける工芸作品—フィレンツェ大聖堂博物館蔵「リブレット」を中心に—」〈指導教員〉秋山聡
野崎美美子「16 世紀初頭アルプス以北の宮廷における美術コレクション—オーストリアのマルガレーテを中心に—」〈指導教員〉秋山聡
藤原啓「ギュスターヴ・モローの作品制作における父レイ・モローの果たした役割とその影響について」〈指導教員〉小佐野重利

2013 年度

中谷有里「狩野芳崖筆「仁王捉鬼図」の主題と鑑賞の場—美術展覧会黎明期における主題の模索—」〈指導教員〉佐藤康宏

渡邊麻里「曾我蕭白筆「美人図」に関する一考察—しぐさを中心に—」〈指導教員〉佐藤康宏

久保佑馬「北方のティツィアネスキー工房画家が南北交流に果たした役割—」〈指導教員〉小佐野重利

倉地伸枝「J.B.グルーズによる表情描写を特徴とする頭部像群の革新性」〈指導教員〉小佐野重利

横尾拓真「池大雅の作品研究—中国絵画との関係を中心に—」〈指導教員〉佐藤康宏

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

なし

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

伊藤紫織「江戸時代の唐画」

〈主査〉佐藤康宏 〈副査〉高岸輝・長島弘明・板倉聖哲・成澤勝嗣

(乙)

なし

04 哲学

1. 研究室活動の概要

1877年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910年、「哲学」、「史学」、「文学」の3学科中「哲学科」に属する哲学専修学科として今日に至る基礎をかためた。本研究室は、井上哲次郎、ラファエル・フォン・ケーベルといった最初期の教授陣のもと、西田幾多郎、桑木厳翼、田辺元、九鬼周造といった日本の哲学草創期の哲学者たちを輩出してきた伝統を持つ。1963年の類制度創設以降は、第一類（文化学）中の、そして1995年からは、思想文化学科中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一角を占める。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953年、人文科学研究科の中の哲学専攻課程として発足し、1995年からは、人文社会系研究科における基礎文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的探究に基づきつつ、哲学の体系的なおよび個別テーマ研究をその任務として活動を続けている。

2014年3月現在の所属教員は、教授2名、准教授1名、外国人専任講師1名、助教1名であり、哲学史の時代区分的には古代ギリシャ哲学から現代哲学まで、そして内容的には論理哲学から、存在論、形而上学、社会哲学、応用倫理に至るまでの広い領域をカバーするべく、非常勤講師も含め、多方面にわたる研究者を偏りなくそろえることに留意してスタッフを構成している。また、不定期的ではあるが、フルブライト講師など外国人教員が一定期間在籍することもしばしばであり、その際は英語による講義が開講される。ちなみに、2008年度から2009年度は、米国のメアリマウント・コレッジのRoger Robins教授がフルブライト講師として哲学研究室に在籍し、哲学特殊講義を英語にて講じていた。2010年度以降は、グローバル化の現状に対応するために、日本人専任教授による英語の授業も開講され、さらに2011年10月からは、ドイツ人専任講師を迎えて英語による授業が増加し、グローバル化に対応する方向性が強化された。また、毎年、他大学から3名程度の非常勤講師の協力をあおぎ、今日の哲学研究の多様化の情勢に対応するべく多彩なカリキュラムの編成にたえず留意している。

教養学部から毎年進学する学生数は、近年、少数の学士入学者を含めて、毎年20名程度である。また、大学院も、修士課程、博士課程それぞれの枠について、多くの応募者の中から選抜された院生で毎年ほぼ満たされている。関心がもたれる領域は、古代哲学から近世・現代の西洋各国ないし各言語圏の哲学にひろく及び、そして論じられるテーマも特定の偏りなく分布している。また、近年は、欧米あるいは中国など東アジアからの大学院生や研究生も少しずつ増えてきており、研究室全体が着実にグローバル化しつつあることが実感される。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、「哲学会」の運営があげられる。哲学の学会としては、文字通りわが国における草分けとして、明治初期以来の長い伝統を持つこの組織は、今日、戦後生まれの中堅・若手層の成長によって、自由闊達な雰囲気のもとに旧来にまして活発な研究活動を展開し、わが国の哲学の学会のなかにあつて重要な位置を占め続け、多くの有能な人材を世に送り出している。「哲学会」の主な事業としては、今日では特集形式をとる年報の形で出されている『哲学雑誌』の編集・刊行、秋の「研究大会」、春の「カント・アーベント」（研究発表と講演会）の企画開催があり、いずれも高レベルの研究の披瀝と研鑽の場として機能している。また、近年は、哲学に対する社会的要請に呼应すべく、哲学研究室として死生学・応用倫理センターとの連携のもと「応用倫理・哲学研究会」を企画し、研究報告書もすでに刊行している。その他、「Hongo Metaphysics Club」や「Tokyo Forum for Analytic Philosophy」というタイトルのもと、哲学研究室を訪れる外国人研究者を交えた国際研究会議も大変頻繁に行われ、そこでは同時に哲学研究室の大学院生が、そしてときに応じて参加する他大学の大学院生が、英語で発表をしている。加えて近年は、北京大学、ソウル大学、そして東京大学の哲学関係部門で、教員と院生がともに英語で研究発表をする BESETO 哲学国際会議が持ち回りで開催されており、多くの教員と院生が参加・発表をしている。2014年3月末までに、計8回の BESETO 哲学会議が開催された。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

高山守	(教授、無という観点から哲学を読み解く)
一ノ瀬正樹	(教授、因果性の哲学・人格概念の研究)
榊原哲也	(教授、現象学・ドイツ現代哲学)
鈴木泉	(准教授、近世形而上学・現代フランス哲学)
Richard Dietz	(専任講師、現代英米哲学・言語哲学)

(2) 助教の活動

松浦 和也

在職期間 2012 年度から

研究領域 古代ギリシア哲学研究

主要業績

(論文) Kazuya Matsuura, 「Doxography in the Milesian School」、『第八届东亚三校青年学者哲学会议』、2012

松浦和也, 「アリストテレス『自然学』第3巻第5章の物体概念」、『Studia Classica』、3、2012.12

松浦和也, 「アリストテレスの無限大否定論」、『西洋古典研究会論集』、21、2013.10

松浦和也, 「ベルクソンとアリストテレスの間隙」、『論集』、32、2014.3

(学会発表) 国内、松浦和也, 「ベルクソンとアリストテレスの間隙」、ベルクソン研究会、2013.3.31

国際、Kazuya Matsuura, 「Doxography in the Milesian School」、The 8th BESETO、北京大学、2013.10.12

国内、松浦和也, 「ミレトス学派再考」、第1回 PAP 研究会、熊本大学、2014.2.22

(会議主催・チェア他) 国内、「第59回ギリシア哲学研究会」、主催、東京大学、2012.7.29

国内、「第58回ギリシア哲学研究会」、主催、2013.4.7

国内、「第59回ギリシア哲学研究会」、主催、2013.8.3

国内、「第60回ギリシア哲学研究会」、主催、2013.12.28

国内、「第62回ギリシア哲学研究会」、主催、2014.2.2

(研究テーマ) 文部科学省科学研究費補助金、松浦和也、研究代表者, 「アリストテレスの物体概念と運動概念の研究」、『Studies on Aristotelian Concept of Natural Body and Change』、2012~2013

文部科学省科学研究費補助金、松浦和也、研究代表者, 「ギリシア自然哲学の展開とペリパトス派的受容」、『The expansion of Greek natural philosophy and peripatetic acceptance』、2014~

(他機関での講義等) 国内、哲学会、委員、2012.4~2014.3

(3) 外国人教員の活動

ディーツ リチャード Richard Dietz (専任講師)

在職期間 2011 年度 10 月から

研究領域 Philosophy of Language, Epistemology, Philosophical Logic

主要業績

(著書) 共著、Lieven Decock, Richard Dietz, Igor Douven, "Modelling Comparative Concepts in Conceptual Spaces", New Frontiers in Artificial Intelligence, Berlin/Heidelberg: Springer, 69-89 頁、2013

(論文) Richard Dietz with Lieven Decock and Igor Douven, 「Modelling comparative concepts in conceptual spaces」、『New Frontiers in Artificial Intelligence (LNCS 7856)』、69-89 頁、2013

Richard Dietz with Julien Murzi, 「Coming true: A note on truth and actuality」、『Philosophical Studies』、163、403-27 頁、2013

Richard Dietz, 「Comparative concepts」、『Synthese』、190、139-70 頁、2013

Richard Dietz with Igor Douven, Lieven Decock and Paul Egré, 「Vagueness: A conceptual spaces approach」、『Journal of Philosophical Logic』、42、137-60 頁、2013

(学会発表) 「Comparative concepts」、Comparative Concepts At Work Conference、ルンド大学、2012.5.25

「Vagueness, looking the same, and observationality」、European Society for Philosophy and Psychology Conference、ロンドン大学、2012.8.28

「Vagueness, looking the same, and observationality」、First Conference on Contemporary Philosophy in East Asia、台北、2012.9.7

「Modelling comparative concepts in conceptual spaces」、Aspects of Perceptual Experience Workshop, Japan Association for Philosophy of Science Fall Meeting、東京大学、2012.11.3

「Modelling comparative concepts in conceptual spaces」、LENLS9、宮崎市、2012.12.1

「Actuality in branching time」、7th Beseto Conference、2013.1.6

「The possibility of vagueness」、ProbVag Conference、東京大学、2013.3.21

「Understanding Vagueness」、Research seminar talk、Queen's University Belfast、2013.6.11

「The possibility of vagueness」、CLLAM seminar talk、Stockholm University、2013.9.20
 「Historical modal book-keeping」、Mind & Language Symposium; Annual Meeting of the Japanese Society for Philosophy、2013.10.26
 「The possibility of vagueness」、LENLS10、慶應大学、2013.10.27
 「Historical modal book-keeping」、Frontiers in the Philosophy of Time conference、2013.11.30
 「The possibility of vagueness」、Colloquium of Logic and Philosophy、2013.12.20
 「The possibility of vagueness」、Current Trends in Analytic Philosophy、2014.2.6
 「Actuality as a historical modality」、Korean Society for Analytic Philosophy Winter Conference、2014.2.22
 (会議主催・チェア他) 国際、「TOKYO FORUM FOR ANALYTIC PHILOSOPHY」、オーガナイザー、東京大学本郷キャンパス 2012.4.12～
 国際、「Probability & Vagueness Conference」、実行委員、東京大学、2013.3.20～2013.3.22
 (共同研究・受託研究) 共同研究、Richard Dietz、University of Groningen、「Modelling vagueness and gradability in conceptual spaces」、2012～
 (研究テーマ) 文部科学省科学研究費補助金、リチャード・ディーツ、研究代表者、「曖昧性の基礎づけ」、2012～
 (他機関での講義等) 特別講演、Seoul National University、「Vagueness」、2014.2

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「フィヒテ 1794 年「知識学」における絶対的自我の構造」
 「デカルト『情念論』における意思の自由について」
 「クワインの様相論理批判研究」
 「カント認識論と言語をめぐる問題」
 「眠る<私>—レヴィナス『存在することから存在するものへ』における「定位」概念をめぐる—」
 「スピノザ『政治論』における群衆と国家」
 「「種の論理」と家族—京都学派と高山守哲学—」
 「確率、因果、法則についての研究」
 「後期ヴィトゲンシュタインの詩的言語論について」
 「事実と規範」
 「決定論と自由意志」
 「古代から近代における時間論の歴史的展開」
 「アダム・スミスにおける規範について」
 「現代におけるモアドロジーの意義」
 「西田幾多郎の「ポイエシス」の可能性」
 「功利主義の基礎付け—シジウィック見解を中心として」
 「ウィトゲンシュタイン『哲学探究』と「語り合えぬもの」」
 「数学の哲学における直観主義の研究」
 「レヴィナスにおける「他者との出逢い」」
 「ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』における「対象」と「自我」」
 「教育の中での人間観について」
 「哲学と芸術の同一性と差異」

2013 年度

「プラトン『法律』における刑罰観について」
 「メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』における習慣の獲得について」
 「『存在と時間』における良心解釈」
 「マルクスの労働論研究—『経済学・哲学草稿』を中心に—」
 「普遍の理論とその問題」

「フッサールの他者論」
「レヴィナスにおける存在と時間」
「『日常言語』『不確実性』そして『確実性』—ウィトゲンシュタイン『哲学探究』に即して—」
「J.S.ミル『自由論』第四章再考」
「J.S.ミルにおける思想及び討論の自由の現代的意味」
「レヴィナスの『他者』について」
「『存在と時間』における現存在と死の関連性—本来性と非本来性の間で—」
「デイヴィッド・ルイスの様相実在論」
「ミル『自由論』における『幸福の一要素としての個性』について」
「ライプニッツ哲学における人間の自由について」
「カントの『純粋悟性概念の超越論的演繹』について」
「G・E・ムア『倫理学原理』における自然主義の誤謬について」
「『差異と反復』における反復の概念について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012年度

松井淳「シェリングの同一哲学と知的直観」〈指導教員〉高山守
井上一紀「スピノザ『エチカ』における様態論の研究」〈指導教員〉鈴木泉
岩井拓朗「カント『純粋理性批判』における空間について」〈指導教員〉高山守
岡崎秀二郎「ヘーゲル『大論理学』における反省論と矛盾」〈指導教員〉高山守
中島立博「プラトン『ポリティコス』におけるディアレクティケー」〈指導教員〉一ノ瀬正樹

2013年度

飯泉佑介「ヘーゲル『精神現象学』における方法の問題—基本述語『われわれ』の意味についての考察」
〈指導教員〉榊原哲也
小原悠里奈「ヘーゲル『精神現象学』における『生命』概念」〈指導教員〉榊原哲也
金子研太郎「フッサールにおける現実性—『イデーンⅠ』における理性と現実—」〈指導教員〉榊原哲也
小林大介「カント『実践理性批判』における意志規定の問題」〈指導教員〉一ノ瀬正樹
春日亮佑「ジョン・ロックの『人間知性論』における知識について」〈指導教員〉一ノ瀬正樹
鴻浩介「実践的推論と行為のなかの合理性」〈指導教員〉一ノ瀬正樹
松井隆明「フッサール超越論的観念論と間主観性—問題」〈指導教員〉榊原哲也
松本佳菜子「ハイデガー『存在と時間』における時間性」〈指導教員〉榊原哲也
杜赫「フッサールにおける心情作用の研究」〈指導教員〉榊原哲也

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012年度

(甲)

島村久幸「ロック『人間知性論』における諸観念と知識について」
〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉榊原哲也・鈴木泉・平野耿・田村均
景山洋平「出来事と自己変容—ハイデガー哲学の構造と生成における自己性—」
〈主査〉榊原哲也 〈副査〉高山守・一ノ瀬正樹・鈴木泉・石原孝二
中野眞「ヘーゲルの反省論」
〈主査〉高山守 〈副査〉榊原哲也・一ノ瀬正樹・鈴木泉・久保陽一

(乙)

なし

2013年度

(甲)

滝沢正之「カントにおける判断と推論」
〈主査〉高山守 〈副査〉一ノ瀬正樹・榊原哲也・鈴木泉・大橋容一郎
萬屋博喜「因果と自然—ヒューム因果論の構造—」
〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉榊原哲也・鈴木泉・伊藤邦武・久米暁
伊藤美恵子「カントの様相理論—汎通的規定原則—についての考察—」

〈主査〉高山守 〈副査〉一ノ瀬正樹・榊原哲也・鈴木泉・加藤泰史
早川正祐「ケアと行為者性の哲学―揺れ動くものとしてのケアと行為者性―」
〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉榊原哲也・鈴木泉・清水哲郎・野矢茂樹
八重樫徹「善さはいかにして構成されるのか―フッサール倫理学の研究―」
〈主査〉榊原哲也 〈副査〉一ノ瀬正樹・鈴木泉・古荘真敬・浜渦辰二
山田有希子「『逆さまの世界』としてのヘーゲル哲学―矛盾と反復の論理学―」
〈主査〉榊原哲也 〈副査〉一ノ瀬正樹・鈴木泉・高山守・久保陽一

(乙)

なし

05 倫理学

1. 研究室活動の概要

人間存在、価値、道德意識、行為等に関する学術的反省を行う倫理学の研究は、古今東西の先人の思索の跡を踏まえ、これを手懸かりとして深められる。倫理学専修課程の講義・演習も倫理学の基礎理論の考察を目指したもののほか、西洋の倫理思想を対象とするものと、日本の倫理思想を対象とするものがあり、教授3名、助教1名から成る専任教員の専門分野も多岐にわたっている。専任教員の他、他大学から出講して頂いている先生方（各年度2～3名程度）の協力のもとに、西洋と日本の主要な倫理思想を対象とする多彩なカリキュラムの編成が可能になっている。

教養学部から進学する学生数は、近年増加傾向にある（2012年度14名、2013年度14名）。学科全体としてみれば、学生、院生あわせて50名ほどの学科だが、学生、院生の研究テーマも、古代ギリシア哲学や古代ユダヤ教からヨーロッパにおける現代の先端的な社会哲学や倫理学まで、また、古事記から儒教、仏教、国学、さらに近現代の日本思想に至るまで、まことに多彩である。そして、教員と学生、院生双方に言えることであるが、本研究室の特徴として西洋思想の研究者と日本思想の研究者の間での対話が要求され、現に行われているという点が挙げられる。

倫理学研究室では、年1回『倫理学紀要』を編集、発行しているが、これは、専任教員ばかりでなく、博士課程在籍中の院生の研究成果を発表する場ともなっている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 関根 清三

専門分野 西洋倫理思想史・旧約聖書学

在職期間 1994年6月－現在

教授 菅野 覚明

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2005年1月－2013年3月

教授 熊野 純彦

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2007年4月－現在

教授 頼住 光子

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2013年4月－現在

助教 宮下 聡子

専門分野 心理学的倫理学・宗教的倫理

在職期間 2008年4月－2013年3月

助教 岡田 大助

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2013年4月－現在

(2) 助教の活動

宮下 聡子

在職期間 2008年4月－2013年3月

研究領域 心理と倫理と宗教の接点

主要業績

(論文)

“On the Individual in Watsuji Tetsurō's Ethics” 『倫理学紀要』第20輯、1-17頁、2013.3

(他機関での講義等)

非常勤講師、青山学院大学、「倫理学の諸問題A」、2012.4～2013.9

非常勤講師、立教大学、「哲学」、2012.9～2014.3

非常勤講師、お茶の水女子大学、「西洋倫理思想史I」、2012.10～2013.3

岡田 大助

在職期間 2013 年 4 月－現在

研究領域 日本仏教倫理思想史

主要業績

(論文)

「親鸞の求道の動機について―他者の救済への願い―」、『工学院大学共通課程研究論叢』、第 49－2 号、2012.2

「『源氏物語』における六条御息所の煩悩と苦しみについて」、『工学院大学共通課程研究論叢』、第 50－2 号、2012.10

「親鸞の思想における韋提希の煩悩と善のつまずきについて」、『倫理学紀要』、第 21 輯、159-181 頁、2014.3 (学会発表)

国内、岡田大助、「『教行信証』化身土巻における『涅槃経』からの「信不具足」を含む引用について―読み替え、入れ替えの意図に注目して」、日本思想史学会、2012.10

(他機関での講義等)

非常勤講師、駿河台大学、「倫理学Ⅰ、倫理学Ⅱ」、2013.4～2014.3

非常勤講師、東京理科大学、「倫理、世界の宗教」、2013.4～現在

(3) 外国人教師の活動

Raji Steniecek

在職期間 2013 年 12 月 (集中講義)

研究領域 日本学

(4) 外国人研究員・内地研究員

なし

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「生きのこる者への通信―宮澤賢二「銀河鉄道の夜」を「手紙」として読み返す」

「『忠度』における「花」の位相」

「レヴィナス『全体性と無限』における無限なものの観念」

「『善の研究』における神秘主義について」

「窓なき部屋の孤独の情景―カッシーラー『シンボル形式の哲学』「モナド」としての数学的概念と「対立物の総合」の可能性」

「人間存在における「問うこと」の筆法」

「抜隊得勝『塩山和泥合水集』」

「J.S.ミルにおける平等の概念について」

2013 年度

「「存在と時間」における語りの構成」

「家の歴史的、機能的なつながりを背景とした、貝原益軒『和俗童子訓』の総合的理解」

「一遍における念仏の思想について」

「福沢諭吉の『帝室論』にみえる象徴天皇制との関わりについて」

「『葉隠』における理想の君臣関係」

「二宮尊徳における倫理性と経済性」

「法然の『選択本願念仏集』における称名念仏について―なぜ法然は念を声としたか―」

「親鸞の法身について」

「『古事記伝』における、生と死の世界観について」

「伊藤仁斎『童子問』における王道論の位置づけについて」

「小林秀雄『一ツの脳髄』について」

「『葉隠』における、戦闘者としての武士のあり方について」

「『政談』における礼法の制度が浸透した世界について―武家の困窮の視点から―」

「吉田松陰の国体論について」

「『正方眼蔵』『現成公案』におけるさとり」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

菅原令子「『葉隠』における藩史の意義」〈指導教員〉菅野覚明

2013 年度

中原真祐子「バルクソンにおける言語表現の問題—『試論』を中心に—」〈指導教員〉熊野純彦

橋爪大輝「アーレントにおける世界の概念について」〈指導教員〉熊野純彦

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

佐々木雄大「バタイユにおけるエコノミーと贈与」

〈主査〉熊野純彦 〈副査〉関根清三・菅野覚明・中地義和・麻生博之

三重野清顕「ヘーゲル哲学の時間論的研究」

〈主査〉熊野純彦 〈副査〉関根清三・菅野覚明・山田忠彰・麻生博之

(乙)

山田忠彰「〈エスト・エティカ (Est-Etica)〉の展望—〈デザイン・ワールド〉と倫理的〈エステティズモ〉—」

〈主査〉関根清三 〈副査〉高山守・小田部胤久・田中久文・森一郎

2013 年度

(甲)

西塚俊太「日本近代哲学における「個人」と「社会」—西田幾多郎と三木清の比較から—」

〈主査〉熊野純彦 〈副査〉頼住光子・菅野覚明・竹内整一・田中久文

山蔦真之「純粹感情の倫理学カント道徳哲学における尊敬の感情」

〈主査〉熊野純彦 〈副査〉関根清三・榊原哲也・小田部胤久・山根雄一郎

宮村悠介「カント倫理学と理念の問題—学と智の統一点を求めて」

〈主査〉熊野純彦 〈副査〉頼住光子・榊原哲也・小田部胤久・城戸淳

板東洋介「表現する人間—徂徠学派から賀茂真淵への思想的継受関係についての—研究—」

〈主査〉頼住光子 〈副査〉熊野純彦・長島弘明・苅部直・黒住眞・菅野覚明

(乙)

なし

06 宗教学宗教史学

1. 研究室活動の概要

本専修課程（宗教学研究室）における研究は宗教の経験科学的研究である。2012年度の研究活動は、教授4、准教授1、助教1、計6名、2013年度は、教授3、准教授2、計5名の教員を中心として行われた。研究分野は、宗教理論（宗教概念批判、宗教学史）、世界宗教史、日本宗教史、宗教思想史（中近世および近現代ヨーロッパ、古代イスラエル・オリエント、古代中国、近現代日本）、現代社会と宗教（死生観の変容、生命倫理と宗教、グローバル化・ポストセキュラー時代の宗教と公共圏）、宗教調査（現代日本の諸宗教・宗教性、宗教民俗）、発掘調査（イスラエル）、などをカバーしている。方法論は、宗教社会学、宗教民俗学、宗教人類学、宗教史学、比較宗教学などである（詳しくは、教授・准教授については本書第Ⅲ部を参照のこと）。宗教学は対象とする宗教・地域も方法論も極めて多様であるため、毎年数名の非常勤講師を迎えることにより、その多様性を可能な限り反映するカリキュラムを実現している。また、近年は宗教学の社会的役割を意識し、死生学・応用倫理センター（死生学グローバルCOE拠点の継承）との活発な連携が研究活動の大きな特色となっており、院生・学部生の問題関心にも影響を与えている。

本専修課程では研究成果を発信するために教員と院生の協力により毎年『宗教学年報』を刊行している。これには教員、院生、同窓生などの研究論文・書評・研究ノートが掲載される。併せて『年報別冊』も刊行されるが、これは本研究室の同窓会（本専修課程創設時の主任教授、姉崎正治教授の雅号により嘲風会と称する）誌的な性格をもち、同窓生や留学生の随想や近況を伝えるもの、また研究室の現況報告、修士論文の要旨、卒業題目一覧などが常時載せられる。他に研究室と同窓生の交流の場としては、定期・不定期の研究会・集会を開催している。

本専修課程の最近の傾向として、駒場からの進学者が比較的多いこと（2012年度17名、2013年度14名、学士入学者1名）が挙げられる。研究室の伝統の一つに、学部生・院生・教員全員が参加する春の研究室旅行があるが、この行事は、増加する学部生や、他大学からの大学院新入生が研究室に馴染むための、かつ教員が各学生の人柄や興味関心を把握するための場として、一層意義を増している。また、この旅行では東京近隣の宗教施設を複数見学するが、その企画は博士課程1年次の院生全員が担当する。このため文献研究を専門とする院生にもフィールドワークの実地経験のよい機会となっている。

国際交流としては、2012年3月に東京大学で開催された PESETO（北京・ソウル・東京）三大学人文学会議において、池澤が岸本英夫（本研究室元教授）と傅偉勳（台湾・米国テンプル大学元教授）を死生学の観点から比較する研究発表を行い、研究交流を促進した。2012年6月に、立教大学キリスト教学研究科、東京国際大学国際交流研究所とともに、ジョナサン・マゴネット氏（ロンドン レオ・ベック大学前学長）を招聘し、公開講演会「現代におけるラビの役割と挑戦」を開催した。同年10月には、イタリア、アカデミア・アンブロジーアーナのアジア学シンポジウムにおいて、藤原が日本の公教育と宗教に関して研究発表を行った。さらに12月には、東洋英和女学院大学の協力を得て、東欧の宗教学者、トマス・ブビック氏（チェコ パルドゥビツェ大学教授）、ヘンリック・ホフマン氏（ポーランド ヤギェウォ大学教授）を招聘し、講演会「東欧宗教研究における東欧宗教のステレオタイプ」を開催した。また、2013年5月～8月にかけて、筑波大学人文社会系教授山中弘氏と協力し、韓国、中国、インドネシア、マレーシア、タイ、インド、湾岸諸国、北アフリカからの留学生に対し、各国の生活世界レベルでの宗教状況について複数回のグループ・インタビューを行った。これには本研究室の教員のほか、院生、学生、OBOGも参加し、研究・文化交流の機会となった。その成果の一部は一般社会への情報提供のために、書籍として出版した。外国からの留学生と外国への留学生も、2011年度は震災の影響があったが、その後回復してきている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 島 進 : 近代日本宗教史、宗教理論研究、比較宗教運動論（1987年4月～2013年3月）
- 鶴岡 賀雄 : 西洋神秘思想、近現代宗教思想（1998年4月～）
- 市川 裕 : 一神教の世界宗教史、ユダヤ教、比較法思想史、ヘブライ語（1991年4月～）
- 池澤 優 : 中国宗教研究、祖先崇拜、生命倫理（1995年4月～）
- 藤原 聖子 : 宗教学（理論研究・比較研究）、宗教と教育の関係、アメリカの宗教（2011年4月～）
- 西村 明 : 宗教史学、宗教人類学・民俗学、慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化（2013年4月～）

(2) 外国人研究員・内地研究員

Rowe, Mark

Dessi, Ugo

Porcu, Elisabetta

Dhammajothi, Medawachchiye

鈴木 卓

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

- 「オウム真理教事件における責任の所在」
- 「神道における救済とその諸相」
- 「宗教と社会貢献—石巻市での震災復興支援活動を事例に—」
- 「ヒトラーのカリスマ性とドイツ民衆の共同体意識」
- 「読売新聞に見る戦後の日本人の葬儀に対する意識・関心の変容」
- 「上田閑照の禅/哲学解釈の地平」
- 「宗教の経営学的分析に対する一考察」
- 「信仰心が生んだ『マルコム X 自伝』の歪み」
- 「日本国内において自殺に対する地方ごとの捉え方の違いはあるのか」
- 「鯰と要石をめぐる論考」
- 「日本人の死後世界観に関する研究史とその課題」
- 「若者の神概念と宗教意識」
- 「スピリチュアリティと経済活動」
- 「インターネットにおける水子供養の動向」
- 「元田永孚の「宗教」」

2013 年度

- 「文学にとって代わられる宗教—バプチンとバタイユを例にとつて—」
- 「現代創作における異類婚姻譚—人と異類との間の『子供たち』を軸として—」
- 「サイイド・クトゥブの倫理論—イスラーム原理主義における犠牲の論理—」
- 「合気道の思想と宗教性」
- 「近代仏教系雑誌・書籍の女性の伝記に見る女性教化のレトリック」
- 「いのちを操作する僧侶の論理—自殺幫助と自殺予防—」
- 「現代における俗信の考察」
- 「ファンタジー文学における宗教的要素の分析」
- 「自然災害と疫病への対処法から見る中世ヨーロッパの信仰世界」
- 「結合と創造—西田幾多郎のアルス・コンビナトリア—」
- 「中等教育課程において宗教教育が生徒に与える影響についての事例研究」
- 「経営と宗教—松下電器を例に—」
- 「ウブメと水子に見る死生観の変化」
- 「グローバル化とムスリムの信仰形態—聖者信仰をもとに—」
- 「バラナシの日本人旅行者—バックパッカーの商品化と真正性—」
- 「マインド・コントロール言説の分野による違い」
- 「ローゼンツヴァイクにおける信仰と霊魂—諸思想家と諸概念における位置づけをめぐって—」
- 「オウム「近代日本の行き止まり」」
- 「科学理論としてのインテリジェント・デザイン理論の批判的検討」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

- 今野啓介「心理学理論における救済思想の研究—A. マズローと人間性心理学を中心に—」(指導教員) 島菌進

黒田純一郎「現代社会におけるスピリチュアリティの展開—ディープエコロジー運動を事例として—」〈指導教員〉

島蘭進

竹内喜生「宗教法人の公益性 言説の誕生」〈指導教員〉市川裕

伊井野友香「宗教とナルシズム—自己愛障害時代における宗教心理の精神分析的考察—」〈指導教員〉島蘭進

嶋田弘之「現代インドネシアの《生権力》が働く場としての〈自制するムスリマ〉—初期共和制中国との比較を

通じてイスラーム的欲望論を照射する—」〈指導教員〉池澤優

清水俊毅「ジョン・ウェスレーの社会倫理—慈善観、金銭観、経済観—」〈指導教員〉鶴岡賀雄

池田智「D. ヒュームの宗教論における「宗教」と「世俗」」〈指導教員〉鶴岡賀雄

2013 年度

川口典成「演劇と運命—近代日本演劇を例として—」〈指導教員〉市川裕

青木良華「近代ドイツにおけるユダヤ人のアイデンティティをめぐる問題」〈指導教員〉市川裕

大畑明則「宗教伝統における異性装の研究」〈指導教員〉鶴岡賀雄

森康智「戦後日本宗教学におけるウェーバーの受容」〈指導教員〉藤原聖子

矢尾基「モシェ・コルドヴェロのカバラ思想における人間観」〈指導教員〉市川裕

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

土居由美「新約聖書『受難物語』の古層」

〈主査〉市川裕 〈副査〉鶴岡賀雄・葛西康德・筒井賢治・佐藤研

Erik Christopher Schickelanz 「近代中国仏教の歴史認識形成と日中仏教交流」

〈主査〉池澤優 〈副査〉島蘭進・吉澤誠一郎・末木文美士・陳継東

古澤有峰「〈スピリチュアルケア〉の創出と「共同体」幻想—「見えない宗教」をめぐるポリティクスと近代宗教論再考—」

〈主査〉島蘭進 〈副査〉市川裕・池澤優・渡辺和子・河東仁

古田富建「『韓国のキリスト教』と恨：韓国土着キリスト教の救済論」

〈主査〉島蘭進 〈副査〉鶴岡賀雄・本田洋・藤原聖子・丹羽泉

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

塚田穂高「戦後日本宗教の国家意識と政治活動に関する宗教社会学的研究—新宗教運動のナショナリズムを中心に—」

〈主査〉島蘭進 〈副査〉中野毅・對馬路人・藤井健志・大谷栄一

小堀馨子「共和政期ローマにおけるローマ人の宗教についての—考察—religio 概念を手がかりとして—」

〈主査〉市川裕 〈副査〉鶴岡賀雄・葛西康德・橋場弦・松村一男

井関大介「近世日本における経世論的宗教論と「神道」」

〈主査〉池澤優 〈副査〉鶴岡賀雄・島蘭進・林淳・田尻祐一郎

(乙)

前川理子「近代日本の宗教学思想と国家—「新宗教」理想と国民教育の交錯—」

〈主査〉藤原聖子 〈副査〉島蘭進・林淳・吉永進一・深澤英隆

07 美学芸術学

1. 研究室活動の概要

本研究室は、その名が示すとおり、美と芸術を対象とする研究の場として機能している。研究分野の中心をなすのは、美と芸術に関する理論的考察であるが、文学、音楽、造形芸術、演劇、舞踊、映画といった個別の芸術ジャンルを対象とする研究をも含む形で多彩な研究が繰り広げられ、一般美学のみならず、個別のジャンルの研究の世界にも多くの人材を輩出してきた。このように一般的・原理的な研究と個別的・具体的な研究とが相補いながら並存することによって、美学の原理的な研究が具体的な芸術現象や芸術体験から遊離することなく、アクチュアリティを持った形で展開されてきたのみならず、音楽学、演劇学といった個別のジャンルに関わる研究分野に関しても、奥行きと広がりを持った研究によって多大な貢献を成し遂げてきた。とりわけ、本研究室の学風をなす、古典的なテキストを取り上げ、その精読によって厳密なテキスト研究を積み重ねてゆく研究の手法は、現象の皮相的な考察に陥らない、独自の研究の伝統を作り上げてきた。

さらに学問状況全体が大きく変わりつつある近年にあつては、一般美学の研究においても、また個別的なジャンル研究においても、美や芸術といった概念やそれを背景とした芸術制度や慣習といった、これまで自明なこととして問われることのなかったシステムそのものの成り立ちを対象化し、政治・経済や社会制度、メディアといった問題圏の中で捉えなおしてゆくような研究が重要な位置を占めるようになってきており、さらには美学を感性文化論的文脈のうちに位置づけることも喫緊の課題となっている。このような新しい方向性に関しても本研究室は従来の伝統を新たに生かす仕方では日本の学会における主導的な役割を果たしており、そのような研究環境を求めて他大学から本学での指導を希望してやってくる者なども少なくない。また外国からの留学希望も多く、この2年間に受け入れた外国人研究生は5名である。

本研究室では現在 JTLA (The Journal of the Faculty of Letters, the University of Tokyo, Aesthetics) と題された欧文の紀要 (1976 年創刊) と『美学芸術学研究』(1982 年に『東京大学文学部美学芸術学研究室紀要・研究』として創刊、1995 年改題) と題された和文の紀要の2つを毎年刊行している。これらはもちろん、教員スタッフや博士課程の大学院生の研究成果の発表の場となっているが、特に前者は当研究室の研究活動と様々な形で関わっている諸外国の第一線級の研究者を執筆者に迎えるなど、国際的な研究交流の点でも大きな貢献を果たしてきた。また、美学会東部会等との共催で、リチャード・シュスターマン (フロリダ・アトランティック大学教授)、ニック・ザングウィル (ハル大学教授)、ダニエル・ブリージュール (ケンタッキー大学教授)、ジョージ・ディ・ジョヴァンニ (マギル大学教授)、フリードリヒ・フォルホルト (ミュンヘン大学教授)、ティルマン・ボルシェ (ヒルデスハイム大学) といった著名研究者を迎え講演会を開催するなど、海外との学術交流に努めている。なお、本研究室では美学会の本部事務局 (2013 年 10 月～) を担当しており、名実ともに日本における芸術研究の拠点としての役割を担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

2004 年 4 月より在籍していた西村清和教授 (現代美学) が 2012 年 3 月に定年を迎えたため、2007 年 12 月以降人文社会系研究科文化資源学研究室に移っていた渡辺裕教授 (在籍は 1996 年～。聴覚文化論、音楽社会史) が美学芸術学研究室に戻り、小田部胤久教授 (在籍は 1996 年～。近代美学、感性文化論) および安西信一准教授 (在籍は 2008 年 4 月～。庭園美学、環境美学) とともに 3 名の教員スタッフによってバランスのとれた教育活動ができるように努力した。だが、安西准教授は 2014 年 2 月 10 日に惜しくも急逝した。

(2) 助教の活動

大愛 崇晴

在職期間 2012 年 4 月 1 日～2013 年 3 月 31 日

研究領域 音楽美学

主要業績

他機関での講義等

非常勤講師、日本大学文理学部、「音楽文化論」、2012.4～2012.7

橋爪 恵子

在職期間 2013 年 4 月 1 日～

研究領域 フランス美学

主要業績

論文

「ガストン・バシュラールにおける生と死のイメージ——『蠟燭の焰』および『火の詩学 断章』を中心に——」、『死生学研究』、2012.3

「ガストン・バシュラールにおける詩学の成立——時間論、認識論を通して——」、『美学藝術学研究』、2012.3

「触覚を中心としたバシュラール身体論への一視座——物質的想像力論を中心に——」、『美学藝術学研究』、2013.3

(3) 外国人教員の活動

ウルリヒ・シュタインフォルト（ビルケント大学（トルコ・アンカラ）教授、ハンブルク大学連携教授）：小田部教授とともに大学院特殊研究を担当（2012年度夏学期）

(4) 外国人研究員・内地研究員

ウルリヒ・シュタインフォルト（ビルケント大学（トルコ・アンカラ）教授、ハンブルク大学連携教授、2011年9月1日～2012年8月31日）

清水哲朗（東京造形大学教授、2012年4月1日～9月30日）

下道郁子（東京音楽大学准教授、2013年4月1日～9月30日）

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012年度

「マンガ「スラムダンク」に見る表現方法」

「大阪市音楽団の「公共」性」

「金沢における観光文化の一ブランド構築とその真生性について」

「クレメント・グリーンバークの「モダニズム」概論について」

「書における形象と筆触」

「ホガースの理論と実践—著作『美の分析』と絵画作品とのあいだ—」

「映画『海を飛ぶ夢』の研究—尊厳死の表現をめぐる—」

「少女文化をめぐるジェンダー —『少女革命ウテナ』を事例として—」

「映画予告編に見る日米映画文化—シーン分析を中心に—」

「VOCALOID 受容の要因—音楽・繋がり・キャラ・アイドルの観点から—」

「勅使河原宏と記録芸術」

「雑誌『主婦の友』の料理記事における和風と洋風—大正から戦後まで—」

「曖昧になる現実と虚構の境界線—フィクションの創造と受容における想像について—」

「スポーツと舞踊の共存競技ダンスの特殊なあり方について」

「グリーンバークの形式主義」

2013年度

「たばこにみる江戸時代後期の美意識」

「パウル・クレーにおけるタイトル—タイトルとイメージの歴史から—」

「H・G・ガダマーの芸術索引の存在論」

「50年代東映時代劇の歴史的立ち位置—戦前の時代劇からの継承、成立背景、以後の東映作品への影響—」

「芸術作品の「開かれ」再考」

「ドビュッシーを取り巻く「主義」問題について」

「アンドレ・ブルトンの弁証法—シュルレアリスムにおける「現実」—」

「ヴェリズモ・オペラの演出における歴史性」

「景観からのまちづくりへ—「場」の理論に即して—」

「ドビュッシーを取り巻く「主義」問題についての東洋受容の19世紀後半の文化的潮流における位置づけ—1889年パリ万国博覧会でのガムラン受容を中心に—」

「ミラン・ワンデラのキッチュ論」

「茶の湯の遊戯的形式に見る社交美学」

「ジャズとヒップホップの接近とその限界—マイルス・デイビス『ドゥー・バップ』を中心に—」

「ヤンキーの美学」

「時間軸からみた美について—空海の曼荼羅に即して—」

「写真のシニフィアンを取りこぼさないために—ロザリンド・クラウドによるシンディ・シャーマン論—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

寺町英明「自然と共演する集団の身体生成—ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」における芸術の政治化と映画の役割について—」〈指導教員〉安西信一

清水康宏「真のカトリック音楽、あるいは「未来のドラマ」としてのミサ・ソレムニス—F・P・ラウレンツィンの教会音楽論を中心に—」〈指導教員〉渡辺裕

松本大輝「K.Walton のメークビリーフ説—フィクションのパラドクスを軸として—」〈指導教員〉安西信一

松原薫「J.S.バッハ《四声コラール曲集》論—その作曲技法の 18 世紀における継承—」〈指導教員〉渡辺裕

2013 年度

青田麻未「自然の美的鑑賞における〈制限的認知モデル〉の構築に向けて—アレン・カールソンの環境美学に対する批判的検討—」〈指導教員〉安西信一

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

橋爪恵子「ガストン・バシュラールの思想における時間論—科学とイメージを繋ぐもの—」

〈主査〉西村清和 〈副査〉渡辺裕・小田部胤久・安西信一・金森修

喜屋武盛也「カッシーラー『象徴形式の哲学』の形成と展開」

〈主査〉小田部胤久 〈副査〉西村清和・渡辺裕・安西信一・久保光志

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

桑原俊介「シュライアマハーの解釈学—方法概念の歴史的系譜に即して—」

〈主査〉小田部胤久 〈副査〉渡辺裕・安西信一・西村清和・川島堅二

堀朋平「フランツ・シューベルトとロマン主義—〈他なるしらべ〉の生成と諸相」

〈主査〉小田部胤久 〈副査〉渡辺裕・安西信一・磯山雅・村田千尋

(乙)

なし

08 心理学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1903年に我が国で初めて心理学実験室が設立されて以来の長い歴史を持っており、心理学の基礎的領域における教育と研究を行っている。現在、教授4名、准教授1名、助教1名、日本学術振興会のPD・研究員・研究生・大学院生・学部生ら約80名が心理学研究室に所属している。知覚・注意・記憶・思考などの心理現象を精神物理学的手法・神経科学的手法・認知科学的手法によって実験的に研究している。また、文化認識や科学方法論などについても研究を行っている。毎年、教養学部文科3類や他の科類から約25名の学生が本専修課程に進学する。演習や特殊講義によって心理学に関する幅広い知識を身につけるのみならず、心理学実験演習においてヒトや実験動物を被検体として実験を行い、コンピュータの操作法・データの収集と解析法・実験レポートの作成法などを学んでいる。卒業論文では、教員の指導の下に実験的研究を行い、その成果を取りまとめている。

大学院教育に関しては、本専修課程の教員のみならず、大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系の認知行動科学に所属する心理学系教員の参加を得て、指導体制の充実を図っている。毎年、数名の課程博士（博士（心理学））が誕生している。

本専修課程の教員は、それぞれが関係諸学会（日本心理学会・日本基礎心理学会・日本動物心理学会・日本視覚学会・日本生理学会・日本神経科学学会・日本認知心理学会・日本認知科学会など）に所属して活動している。研究成果は、各専門分野の国際的学会誌に掲載され、公開されている。国内外で開催される学会等に積極的に参加するのみならず、シンポジウム等で特別講演を依頼されることも多い。本学の他研究科や他大学・研究所とも交流があり、共同研究等も活発に行われている。2010年度からは、第一線で活躍する著名な研究者を招いて公開の講演会を毎年数回開催し、アウトリーチならびに研究者と学生の交流促進を図っている。

心理学研究室には認知科学研究室が併置されている。これは、1946年の本学航空研究所の廃止に伴いその航空心理部門が文学部に移管されたもので、当初は能率研究室と称し、心理学研究室の教官1名が兼任し助手1名と共に作業適性や職務分析を中心とした応用心理学の研究を行っていた。1954年に助手の定員割り当てがなくなり、以後、心理学研究室の内部組織として運営されてきた。心理学研究室は、実験心理学を心理学の基礎領域として教育・研究の中心に据えてきたが、やがて周辺科学との学際的交流が深まり、基礎と応用を対立的に捉える考え方は次第に廃れていった。さらに1960年代以降、心理学では情報処理アプローチが興隆し、認知心理学という分野が成立した。この流れの中で心理学は、コンピューター・サイエンス、神経科学、言語学、哲学などと共に認知科学と呼ばれる新たな学際領域を形成し、心理学研究室の教育・研究活動も認知科学と密接な関連を持つようになった。そのため能率研究室は1992年に認知科学研究室と改称され、現在に至っている。心理学研究室に所属する教員は、認知心理学を専門とする2名を含め、全員が認知科学と深い研究上の関連を持っており、認知科学の他領域とも連携をとりながら教育・研究活動を行っている。認知科学研究室の担う役割も大きなものになってきていると言えよう。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

佐藤 隆夫

専門分野 知覚心理学

在職期間 1995年5月～ 大学院人文社会系研究科助教授

1996年12月～現在 同 教授

高野 陽太郎

専門分野 認知心理学

在職期間 1990年4月～ 文学部助教授

2003年4月～現在 大学院人文社会系研究科教授

立花 政夫

専門分野 生理心理学

在職期間 1988年10月～ 文学部助教授

1994年1月～ 同 教授

1995年4月～現在 大学院人文社会系研究科教授

横澤 一彦

専門分野 統合的認知の心理学

在職期間 1998 年 10 月～ 大学院人文社会系研究科助教授
2006 年 4 月～現在 同 教授

村上 郁也

専門分野 知覚心理学、認知神経科学

在職期間 2005 年 4 月～ 大学院総合文化研究科 助教授
2013 年 4 月～現在 大学院人文社会系研究科 准教授

(2) 助教の活動

新美 亮輔

専門分野 実験心理学

在職期間 2011 年 4 月～現在

主要業績

論文

- Niimi, R., & Watanabe, K., 「Consistency of likeability of objects across views and time.」, 『Perception』, Vol. 41, No. 6, 673-686 頁、2012
- Niimi, R., & Watanabe, K., 「Contextual effects of scene on the visual perception of object orientation in depth.」, 『Plos One』, Vol. 8, No. 12, e84371、2013.12
- Yamashita, W., Niimi, R., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Yokosawa, K., 「Three-quarter view preference for three-dimensional objects in 8-month-old infants.」, 『Journal of Vision』, Vol. 14, No. 4, 5 頁、2014.4

解説

新美亮輔・横澤一彦、「反応時間」、『脳科学辞典』、2013.2

学会発表

- 国内、新美亮輔・渡邊克巳、「日常物体の好ましさの不変性」、日本心理学会「注意と認知」研究会第 10 回会宿研究会、名古屋、2012.3.20
- 国内、山下和香代・新美亮輔・金沢 創・山口真美・横澤一彦、「異なる視点からの画像に対する乳児の知覚」、日本視覚学会 2012 年夏季大会、米沢、2012.8.7
- 国内、新美亮輔・渡邊克巳、「物体方向知覚と情景文脈—情景の親近性の効果—」、日本心理学会第 76 回大会、東京、2012.9.1
- 国内、新美亮輔、「麻雀牌錯視：表面テクスチャによる物体形状の錯視」、日本基礎心理学会第 31 回大会、福岡、2012.11.3
- 国内、陳娜・坪見博之・高橋康介・新美亮輔・渡邊克巳、「Effects of projection geometry on shape perception of 3D cuboids」、日本認知科学会第 29 回大会、仙台、2012.12.13
- 国内、新美亮輔、「東大航空研究所秘密報告に見る航空心理部の研究活動」、日本心理学会第 77 回大会、札幌、2013.9.20
- 国内、新美亮輔、「視覚物体認知における焦点距離の効果」、日本基礎心理学会第 32 回大会、金沢、2013.12.7
- 国外、Niimi, R., 「Mahjong tile illusion: Illusory shape perception induced by object surface texture」, 8th Asia-Pacific Conference on Vision, 仁川、2012.7.13
- 国外、Niimi, R. & Watanabe, K., 「How well do we know others' average liking?」, Psychonomic Society Annual Meeting, Minneapolis, MN, 2012.11.16
- 国外、Yokosawa, K., Sastyn, G., & Niimi, R., 「Does viewpoint dependency effect influence scene consistency effect?」, Vision Sciences Society Annual Meeting, Naples, FL, 2013.5.21
- 国外、Yamashita, W., Niimi, R., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Yokosawa, K., 「Three-quarter view preference for three-dimensional objects in 8-month-old infants.」, 9th Asia-Pacific Conference on Vision, 蘇州、2013.7.7
- 国外、Niimi, R., 「Camera focal length and object recognition.」, OPAM annual meeting, Toronto, Canada, 2013.11.14

受賞

国内、新美亮輔、日本基礎心理学会優秀発表賞、日本基礎心理学会、2012.2

他機関での講義等

非常勤講師、東京藝術大学音楽学部、「心理学概説」、2012.4～

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

- 「共同サイモン効果の生起メカニズムに関する検討」
- 「色残効における二次属性輪郭の帰属効果」
- 「外国語副作用が生起する言語処理段階の検討」
- 「色彩嗜好における空間配置の影響」
- 「能動的身体運動情報が奥行き知覚学習に与える影響について」
- 「ぼけ勾配がミニチュア効果に及ぼす影響」
- 「運動からの構造復元における位置情報と速度情報の役割」
- 「写真色残像における刺激要因の効果の検討」
- 「参加者配置の変化による共同サイモン効果の生起メカニズムの検討」
- 「探索領域の分割が視覚探索に及ぼす影響」
- 「特徴連合強度と共感覚との関係についての検討」
- 「物理的反転をしない鏡とする鏡における鏡映反転」
- 「色字共感覚者の色認知特性」
- 「物体の向きが物体と背景の認知に与える影響」
- 「存在脅威管理理論における解釈レベルが探索学習と態度形成に及ぼす影響の検討」
- 「解釈レベルが共感性に及ぼす影響の検討—表象対象の区分を踏まえて—」
- 「発話知覚と反応方略が音源定位に与える影響」
- 「エピソード記憶の想起と再固定化の相互作用に関する検討」
- 「空間位置の符号化における自己座標から世界座標への交換」
- 「振動刺激がベクションに及ぼす効果」
- 「量刑判断の判断過程に対する応報的動機の活性化の影響」
- 「文字が重なり合っている場合の読書」
- 「色彩嗜好に季節が与える影響」
- 「音楽における演奏音と演奏動作による多感覚情動知覚—視覚情報と聴覚情報の情動一致刺激と不一致刺激を用いて—」
- 「トランプゲームにおける真実バイアスの実証的研究」
- 「大局的刺激による幽体離脱体験の生起に関する検討」
- 「視対象の物理的な大きさがコントラスト感度に与える影響」

2013 年度

- 「多義的運動を用いた視野間仮現運動の検討」
- 「奥行き知覚における両眼視差手がかりの相対性」
- 「オン型運動方向選択性を示すラット網膜神経節細胞の光応答解析」
- 「解釈レベルが共感性に及ぼす影響を反転させる要因の特定—新しい想像方略を用いた独自の検討—」
- 「Global/Local プライミングによる抽象的概念・具体的概念への選択的活性化と距離推定に対する影響—Navon 図形の文字間の密度を操作して—」
- 「日常物体認知における俯角の違いによる視点依存性の検討」
- 「楽器音による感覚間協応の検討」
- 「多数派への同調行動が裁判員の量刑判断に及ぼす影響の検討」
- 「抽象イメージが色彩嗜好へ与える影響」
- 「視線分野に基づく対向者の進行方向推定の要因の検討」
- 「ぼけ勾配の知覚特性」

「犯罪報道によって自動的に強められる動機についての検証」
「視野間仮現運動知覚の両眼分離提示による検討」
「複数モダリティを用いた逆サイモン効果の検討」
「呈示項目数推定における刺激画面分割の効果の検討」
「想起する表象の対象と解釈レベルが利他的行動に与える影響の検証」
「モナリザ効果生起時の顔幅の知覚」
「解釈の抽象度が被理解感覚に及ぼす影響の検討—表象対象の区分を踏まえて—」
「視触覚情報の統合が身体角度知覚に与える影響」
「ベクションに対する注意の効果の検討」
「記憶固定化に伴う表象の構造的変化に関する検討」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

佐藤弘美「コントラスト順応における輝度極性選択性」〈指導教員〉佐藤隆夫
中山遼平「視覚運動の時空間座標系」〈指導教員〉佐藤隆夫
松嶋優「ラット網膜における異所性アマクリン細胞の形態と電気的特性による分類」〈指導教員〉立花政夫

2013 年度

柴田健史「外国語使用が大量の情報処理を求められる意思決定に与える影響についての検討」〈指導教員〉高野陽太郎
新岡陽光「犯罪被害者への態度および責任帰属に関する実証的研究」〈指導教員〉高野陽太郎
松本章弘「網膜神経節細胞群による非静止画像の協同的な符号化」〈指導教員〉立花政夫

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

綿村英一郎「潜在的な応報的動機およびその量刑判断に対する影響」
〈主査〉高野陽太郎 〈副査〉立花政夫・佐藤隆夫・横澤一彦・伊東裕司
田中雅史「初期視覚情報処理における抑制機構—局所抑制と側抑制—」
〈主査〉立花政夫 〈副査〉佐藤隆夫・横澤一彦・岡良隆・岡ノ谷一夫

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

金谷翔子「聴覚における時間的な対応付けに関する実験心理学的研究」
〈主査〉横澤一彦 〈副査〉立花政夫・佐藤隆夫・村上郁也・藤崎和香

(乙)

なし

09a 日本語日本文学（国語学）

1. 研究室活動の概要

東京大学における本格的な日本語研究は、明治中期、帝国大学文科大学に上田万年が「国語研究室」を開設したのに始まったと言ってよい。1897年に設けられた「国語研究室」は、わが国における研究室制度の始まりと言われ、わが研究室は1997年9月に開設百周年をむかえたのであるが、開設当初は、単に大学内の一研究室という立場にとどまらず、広く日本の言葉の実情を調査し、そのあるべき未来像を研究する国家の研究機関という性格を帯びていた。日本の国語を研究する国家的な機関という性格から「国語研究室」と称したものであって、学問名、専修課程名に対応させて言うなら「国語学研究室」「日本語学研究室」と言ってもよいところを、現在でもあえて「国語研究室」と称しているのは、設立当初のこの事情に由るものである。

教育組織としても、明治初期の和漢文学科、和文学科以来、国文学科、国語国文学専修課程と名前を変えて続いていたものが、1975年に国語学専修課程と国文学専修課程に分かれた。その後、わが国語研究室、国語学専修課程は、従来の国語学国文学第一講座（国語学担当）のほか、日本語を軸として日本の文化を考える日本語文化講座、日本語による情報伝達のメカニズムを研究する日本語解析講座を加えて、日本語の構造と歴史を多面的、総合的に研究、教育する体制を整えた。

1995年の大学院化への過渡的措置として1994年に文学部の大講座化という組織替えがあり、その際、国文学専修課程とともに「日本語日本文学専修課程」という共通看板を掲げるようになったが、それぞれの研究目的、方法の差によって、また学生に課すべき訓練内容の差によって、その後も「国語学」として独立した教育、研究室体制を維持している。なお、大学院の教育組織としては、従来から国文学研究室とともに「日本語日文学専門分野」を形成している。

国語学の研究分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語彙論・音韻論・文字論などがあり、言語の広い意味での使用をめぐる、談話分析（文章論）・社会言語学（言語生活論）などがある。また、これらの諸分野の一部または全体を、時間的・空間的な展望において扱う国語史学、方言学がある。また、これらの成果の上に立って、日本語情報処理のための理論的研究や外国人への日本語教育という観点からの研究などもある。

研究組織としては、国文学研究室とともに東京大学国語国文学会を運営し、学会誌『国語と国文学』を広く全国の研究者にも開放して刊行している。国語研究室独自の活動としては『日本語学論集』を刊行し、主として大学院生等の論文を公表している。

また、全国の国語学研究者の学術情報の集積伝達場として、当研究室には全国のほとんどの研究雑誌のバックナンバーがそろっており、多数の古写本、古刊本とともに、希望者の閲覧に供している。

国際交流の状況としては、2012年度は、大学院生として4名、学部生として2名、計6名の外国人留学生在本専修課程に在籍し、また、海外の日本語研究者が2名、1名は外国人研究生、1名は外国人研究員として本研究室に在籍し、研究に従事している。2013年度は、大学院生として5名、学部生として2名、計7名の外国人留学生在本専修課程に在籍し、また、外国人が3名、1名は学部特別聴講生、1名は外国人研究生、1名は外国人研究員として本研究室に在籍し、研究に従事している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

月本 雅幸	教授	日本語史	1992年4月～現在
井島 正博	准教授	日本語文法論	1998年4月～現在
肥爪 周二	准教授	日本語史	2003年4月～現在

(2) 外国人研究員・内地研究員

アルベリッツィ・ヴァレリオ・ルイジ	研究題目：漢文訓読語に関する文体史的研究
（受入教員：月本雅幸）	研究期間：2008年4月～2013年3月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

- 「ヨウダ」「ソウダ」「ラシイ」の通時的研究
- 「近世～現代の小説における漢語サ変動詞の語彙の変遷について」
- 「モノカ文の多義性の解釈」
- 「助動詞相当表現「ワケダ」の成立についての考察」

他、特別演習を履修し、卒業した者、8 名。

2013 年度

- 「平安鎌倉時代の訓点資料における文頭の逆説接続詞の訓について一而・然を中心に」
- 「叙法副詞の研究―「どうせ」とその類義語と周辺語について―」
- 「否定副詞について」
- 「複合助詞「であれ」「にせよ」「にしろ」の歴史的研究」

他、特別演習を履修し、卒業した者、3 名。

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

- 南雲千香子「明治期法律用語の成立に関する研究」〈指導教員〉月本雅幸
- 平能一創「仏典音義の国語学的研究―『成唯識論音義』を中心に」〈指導教員〉肥爪周二
- 久保祐介「テ形補助動詞に関する研究」〈指導教員〉井島正博
- 馬紹華「複合辞の成立に関する研究―「ウヘ」と「カラ」を中心に―」〈指導教員〉井島正博

2013 年度

- 崔梅花「日本漢字音の一元化に就いての研究」〈指導教員〉肥爪周二
- 辻本桜介「引用構文の通時的研究」〈指導教員〉井島正博

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

なし

(乙)

- 矢田（松本）勉「国語文字・表記史の研究」
- 〈主査〉月本雅幸 〈副査〉井島正博・肥爪周二・高橋典幸・山本真吾

2013 年度

(甲)

- 藤本灯「『色葉字類抄』の研究」
- 〈主査〉月本雅幸 〈副査〉井島正博・肥爪周二・高橋典幸・山本真吾

(乙)

なし

09b 日本語日本文学（国文学）

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1877年（明治10）の東京大学発足時の和漢文学科に起源する。当時の小中村清矩、芳賀矢一の先学により、近世国学の遺産を継承しつつ、近代的な学問としての国文学の基礎が築かれたのである。

戦後の新制大学発足後、1963年（昭和38）に国語国文学専修課程となり、1975年（昭和50）には国語学専修課程と国文学専修課程とに分かれたが、1994年（平成6）、再び日本語日本文学専修課程となり、今日に至っている。近代的学問の専門分化により、国語学と国文学の教育研究活動は、当然のことながらそれぞれ独自に行われている面もあるが、明治期以来、国語学と国文学が密接に交流してきた伝統は、いまでも保たれている。

現在、本専修課程は教授5名・准教授1名・助教1名の教員を擁し、古代から近現代までの日本文学の全時代をカバーできる体制を取っているが、さらにさまざまな領域の専門家をも非常勤講師として招聘し、開講科目の充実をはかっている。

本専修課程は、長らく国文学研究の後継者養成に多大な貢献をしてきたが、中等教育の教員をも数多く世に送り出してきた。2012年度以来、本専修課程では「総合日本文学」という新たな試みを通して、中等教育の現場の教員たちとの交流を深め、また教員志望の学生達のための講義・演習を開講している。もとより本専修課程は、研究者や中高教員のみならず、さまざまな分野に人材を送り出している。また、数多くの海外からの留学生をも、それぞれの母国の日本文学研究において指導的な役割を果たせるような研究者として育成し、学位を授与して来たが、「総合日本文学」は、そうした留学生たちや、あるいは一般社会に出てゆく卒業・修了者のためということをとくに配慮した試みでもある。さらに、上記のような研究教育活動のほか、年に一度、教員と大学院学生・学部学生がともに参加する研究調査旅行を行い、資料の実地調査に努めている。

学会としては東京大学国語国文学会があり、国語研究室と共同で、毎年、評議員会と大会（研究発表とシンポジウム）の開催、会報の発行を行っているほか、1924年（大正13）の創刊以来つねに国語国文学界をリードし続けてきた月刊研究誌「国語と国文学」の編集などの事業を行なっている。また国文学研究室独自の研究誌として「東京大学国文学論集」をも毎年刊行し、その内容はUTリポジトリで公開している。

現在、国文学研究室には、大学院学生45名（内、外国人留学生12名）・学部学生42名が在籍し、その他、大学院研究生3名（内、外国人留学生2名）・内地研修員3名・日本学術振興会特別研究員3名を受け入れている。またこれまで多くの外国人研究員を受け入れ、あるいは教員が海外の学会の招待講演を引き受けるなどの活動を通して、国際交流に貢献している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

多田 一臣	教授	日本古代文学	2013年3月退職
長島 弘明	教授	日本近世文学	
藤原 克己	教授	平安朝文学・和漢比較文学	
渡部 泰明	教授	日本中世文学・和歌文学	
安藤 宏	教授	日本近代文学	
鉄野 昌弘	教授	日本古代文学	
高木 和子	准教授	平安朝文学	

(2) 助教の活動

神田 祥子

在職期間 2012年4月～

研究領域 日本近代文学

主要業績

矢内賢二編『日本の芸術史 文学上演篇Ⅱ 近世から開化期の芸能と文学』、149-183頁、幻冬舎、2014.2

『漱石「文学」の黎明』青簡舎、全280頁（予定）、2014.11（刊行予定）

学外活動

女子美術大学非常勤講師（2012～2014年度）

(3) 内地研修員・外国人研究員

内地研修員

2012 年度

岩田秀行（受入教員：長島弘明） 跡見学園大学教授

2013 年度

中村文（受入教員：渡部泰明） 埼玉学園大学教授

五月女肇志（受入教員：渡部泰明） 二松学舎大学准教授

古川裕佳（受入教員：安藤宏） 都留文科大学准教授

外国人研究員

2012 年度

エドアルド・ジェルリーニ（受入教員：藤原克己） イタリア 日本学術振興会外国人特別研究員

李 昌秀（受入教員：長島弘明） 韓国 慶熙大学副教授

2013 年度

エドアルド・ジェルリーニ（受入教員：藤原克己） イタリア 日本学術振興会外国人特別研究員

エマニュエル・ロズラン（受入教員：藤原克己） フランス INALCO 教授

ニコラ・ミシェル・モラル（受入教員：安藤宏） スイス ジュネーブ大学講師 フランス外務省派遣研究員

日本学術振興会特別研究員

2012 年度

佐藤温（受入教員：長島弘明） PD

田代一葉（受入教員：長島弘明） PD

2013 年度

佐藤温（受入教員：長島弘明） PD

田代一葉（受入教員：長島弘明） PD

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「宇治拾遺物語論」

「『齒車』を中心とした晩年の芥川龍之介論」

「延慶本『平家物語』における「文覚」像」

「近世和歌の革新」

「谷崎潤一郎『細雪』論—幸子・貞之助夫妻を中心に—」

「式亭三馬と景物本」

「源氏物語研究—柏木密通から女三宮出家までを中心に—」

「井伏鱒二『多甚古村』論」

「夏目漱石『坑夫』論」

「林羅山研究」

「『浮世風呂』研究」

「『とはすがたり』考—遊女の視点をめぐって—」

「『本朝桜陰比事』研究—西鶴の小説の方法—」

「堀辰雄『ルウベンスの偽画』から『聖家族』へ—愛の変容—」

「夕霧人物論（源氏物語）」

「継子物語論—落窪の姫君と紫の上—」

「近代日本文学における不美人について」

「『金閣寺』論」

「三体和歌論—「たけあるうた」を中心に—」

「『末枯』研究」

「『源氏物語』 朧月夜論」

「竹取物語論」

2013 年度

「泉鏡花論」

「類聚歌林歌の注釈的研究」

「遠藤周作『海と毒薬』論」

「源氏物語考察～源氏と藤壺の宮の密通を通して」

「夏目漱石「虞美人草」論」

「久生十蘭『予言』論」

「横光利一『上海』論」

「紫の上の和歌」

「大伴家持 越中時代に於ける作歌意識の展開—諸郡巡行歌迄を中心に—」

「小林秀雄「私小説論」」

「『東海道中膝栗毛』論」

「観世元雅研究」

「室生犀星論—晩年の作品群を中心に—」

「『沈黙』論—「愛」とその共鳴—」

「川端康成『眠れる美女』論」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

小川愛「三島由紀夫研究—昭和三十年代作品に見る＜人間＞概念の崩壊—」〈指導教員〉安藤宏

長谷宏之「志賀直哉研究—「自己」幻想と死生観—」〈指導教員〉安藤宏

田中智子「源順・曾禰好忠と古今和歌六帖—十世紀後半の和歌世界—」〈指導教員〉藤原克己

金由賢「菊池寛の小説作法—初期の歴史物を中心に—」〈指導教員〉安藤宏

2013 年度

鹿取賢太郎「『玉葉和歌集』の研究」〈指導教員〉渡部泰明

倉繁佑平「大岡昇平の初期作品研究」〈指導教員〉安藤宏

宋晗「平安朝漢文学における隠逸思想の受容と変容」〈指導教員〉藤原克己

韓守珍「蕉風連句における故事付・俳付の研究」〈指導教員〉長島弘明

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

牧藍子「元禄江戸俳壇の研究」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉多田一臣・藤原克己・渡部泰明・古井戸秀夫

尹勝玟 YOON SEONG MIN 「『源氏物語』 宇治十帖論—その虚構の方法—」

〈主査〉藤原克己 〈副査〉渡部泰明・安藤宏・肥爪周二・土方洋一

松野彩「『うつは物語』と平安貴族生活—歴史と風俗の視点から—」

〈主査〉藤原克己 〈副査〉多田一臣・渡部泰明・長島弘明・大津透

山根龍一「坂口安吾作品研究」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉井島正博・長島弘明・多田一臣・浅子逸男

木村尚志「中世和歌史論」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉長島弘明・藤原克己・月本雅幸・榎原雅治

曲莉 QULI 「国木田独歩研究」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉藤原克己・阿部公彦・高橋博史・猪狩友一

青島麻子「婚姻研究に見る源氏物語論」

〈主査〉藤原克己 〈副査〉多田一臣・渡部泰明・長島弘明・松岡智之

崔泰和 CHOI TAE WHA 「春水人情本の研究—同時代性を中心に—」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉多田一臣・藤原克己・渡部泰明・佐藤至子

栗本賀世子「平安朝物語の後宮空間—宇津保物語から源氏物語へ—」

〈主査〉藤原克己 〈副査〉多田一臣・渡部泰明・長島弘明・高田信敬

洪聖牧 HONG SEONG MOK 「太陽神論」

〈主査〉多田一臣 〈副査〉長島弘明・藤原克己・渡部泰明・居駒永幸
高桑枝美子「万葉挽歌の研究」

〈主査〉多田一臣 〈副査〉長島弘明・藤原克己・渡部泰明・森朝男

(乙)

吉野瑞恵「王朝文学の生成—『源氏物語』の発想・「日記文学」の形態—」

〈主査〉藤原克己 〈副査〉多田一臣・渡部泰明・安藤宏・河添房江
安藤宏「近代小説の表現機構」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉沼野充義・藤原克己・渡部泰明・塚本昌則

2013 年度

(甲)

蝦名翠「日本上代文学における倫理と禁忌」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉鉄野昌弘・高木和子・多田一臣・大浦誠士
野本東生「中世説話集研究—受け手と語り手の相関—」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉藤原克己・安藤宏・高木和子・佐伯真一
室田知香「『源氏物語』の世界とその文学史的位罫についての研究」

〈主査〉藤原克己 〈副査〉渡部泰明・鉄野昌弘・高木和子・鈴木宏子
日置貴之「明治維新期歌舞伎研究—江戸からの継承と断絶—」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉安藤宏・鉄野昌弘・高木和子・古井戸秀夫

(乙)

森正人「場の物語論」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉長島弘明・藤原克己・三角洋一・多田一臣
澤井耐三「室町物語研究—絵巻・絵本への文学的アプローチ—」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉長島弘明・藤原克己・安藤宏・小島孝之
福長進「歴史物語の創造」

〈主査〉藤原克己 〈副査〉長島弘明・渡部泰明・大津透・高木和子

10 日本史学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1889年、帝国大学文科大学に国史科がおかれて以来の長い歴史をもつ。文献史料を中心とする実証的学風を伝統としてきたが、近來では、これを基礎としながらも、歴史学の新しい動向を積極的にうけとめ、とりあつかう史料の範囲を意識的に拡張し、隣接諸分野—考古学・民俗学・経済学・法制史・政治学・社会学・美術史・国文学・建築史など—の成果を旺盛にとりいれて、多彩な研究方法の開拓を試みている。1994年に名称を「国史学専修課程」から現行のものに改めた。

現在の教員数は、教授5名、准教授2名、助教1名で、古代・中世・近世・近現代のそれぞれに、原則として2名ずつの教員（助教を除く）を配置してきた。それに加え、多彩な非常勤講師の方々のご協力をえて、日本史の諸時代・諸分野を広くカバーし、教育・研究にとりくんでいる。また、大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻・日本史コースにおいては、史料編纂所をはじめ、大学院総合文化研究科、経済学研究科、法学政治学研究科の教員のご協力をえて、多様なカリキュラムを編成しており、多分野交流演習等にも参加している。なお、急増する研究室事務を処理するため、副手2名を雇用している。

教養学部からの進学生は毎年25名内外で、卒業時には約3分の2が就職し、約3分の1が大学院に進学する。学生や大学院生が専攻する時代・分野は、各自の関心に応じて自由に選ぶことができる。

本研究室は、独自に『東京大学日本史学研究叢書』（1994年創刊。6冊まで刊行）と『東京大学日本史学研究室紀要』（1996年創刊。現在18号まで刊行）を企画・出版している。『研究叢書』は、課程博士論文の成果をひろく公表するものであり、『研究室紀要』は、おもに研究室の教員・大学院生による調査・研究成果の発表の場となっている。

本研究室が、歴史文化学科の他の研究室とともに担っている学会として、史学会がある。教員の何人かは、理事として学会運営に参加し、編集委員として『史学雑誌』の編集に携わっている。また、毎年11月の史学会大会において、日本史関係のシンポジウムや各時代別部会を組織するなどの活動を行っている。

近年、日本史学の専攻を希望する海外からの留学生が増加している。2013年度においては、韓国・中国を中心に、大学院に5名、研究生に6名が在籍していた。

最後に、研究室におけるハラスメントを許さない体制づくりに、意識的にとりくんでいることを強調しておきたい。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

村井 章介 教授	日本中世史
佐藤 信 教授	日本古代史
野島（加藤）陽子 教授	日本近代政治史
大津 透 教授	日本古代史
鈴木 淳 准教授	日本近代史
牧原 成征 准教授	日本近世史
高橋 典幸 准教授	日本中世史

(2) 助教の活動

有富 純也

在職期間 2010年4月～2013年3月

研究領域 日本古代史・宗教史

主要業績 「疫病と古代国家」（『歴史評論』728）

「平安時代における清涼殿の出入方法」（武光誠編『古代国家と天皇』同成社）

「軍団と郡家」（『明治大学古代学研究所紀要』15）

「近世後期の信濃国一宮神楽殿再建」（『清内路—その歴史と文化』3）

「日本古代の野蚕」（『日本歴史』774）

「平安時代の儀式・建築からみた母屋と廂」（『四面廂建物を考える 報告編』奈良文化財研究所）など

竹ノ内 雅人

在職期間 2013 年 4 月～現在

研究領域 日本近世史・都市史

主要業績 「江戸の神社とその周辺―祭礼をめぐる―」（『年報都市史研究』12）
「近世後期佃島の社会と住吉神社」（『年報都市史研究』14）
「神社と神職集団―江戸における神職の諸相―」（吉田伸之編『身分的周縁と近世社会6 寺社をささえる人びと』吉川弘文館）
「The Dissolution of Early-Modern Urban Society and the Activities of Shinto Priests in Edo」（『国際基督教大学学報3-A アジア文化研究』33）
「近世鳩ヶ嶺八幡宮の社会構造」（『飯田市歴史研究所年報』7）
「近世後期飯田町の人口動態と社会構造」（高澤紀恵他編『伝統都市を比較する 飯田とシャルルヴィル』山川出版社）
「南信地域における神職の組織編成と社会変容」（塚田孝・吉田伸之編『身分的周縁と地域社会』山川出版社）など

(3) 外国人研究員・内地研究員

(1) 人文社会系研究科研究員

2012 年度 呉座 勇一
若月 剛史
戸森 麻衣子
2013 年度 三ツ松 誠
呉座 勇一
若月 剛史

(2) 特別研究員

2012・13 年度 坂口 正彦

(3) 外国人研究員

2012 年度 崔 子明
2013 年度 カーチャ・シュミットボット
金 宗植

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「音楽家の戦争責任論とその変遷」
「学校教練の立案過程について―陸軍省と文部省との関係を中心に」
「明治初期の漢方存続運動」
「東京音楽学校の男女共学成立過程に関する一考察」
「明治初年における華族の結集と岩倉具視―華族会館建設に至るまで―」
「『都』としての福原の考察」
「陰陽師の展開とその背景」
「日本古代の采女制度について」
「禅僧参学の場としての足利学校」
「中近世以降木の都部交流について―道正庵の成立を通じて」
「京都市公同組合の成立と変遷―大札を軸として」
「戦国時代の茶道が作る政治ネットワーク」
「織田政権期大和の権力構造」
「明治10年代前半の侍補グループ―佐々木高行の思想を中心に―」
「日本陸軍の精神教育―大正期の精神教育を中心に―」
「東海道品川宿の旅籠屋と飯盛女」
「南北朝正閏問題における国体擁護団の思想と活動」

「律令体制の再編と平安京の都市計画―「官衙町」をめぐる」
「中世畿内の農民と土地」
「『旧弁護士法』及び「法律事務取扱ノ取締ニ関スル法律」制定までの地方農村における非弁護士の法的サービス
について～小繋事件における小堀喜代七を題材に～」
「1920年代における日本陸軍と対外情報収集」

2013 年度

「明治前期官立博物館における人材集積」
「近世末期の公事訴訟と公事宿―信州飯田の裁判記録を中心に―」
「中世の神国思想と国家観」
「試験移民期の満州自由移民」
「鎌倉時代撰関家の大殿について」
「近世屋久島における薩摩藩の支配と在地社会」
「在米日本人会と国民外交―渋沢栄一と牛島謹爾を中心に―」
「太良庄地頭の権限の変遷」
「伝馬制の展開と律令国家」
「東京府の武家地処理における屋敷管理」
「貴族院議員の価値観と行動規範」
「室町人の集団意識」
「鎌倉期における撰関家本所訴訟」
「越前国東大寺領荘園と地方豪族」
「明治後半期の国内言語教育について」
「幕末福井藩における資金調達―木谷藤右衛門家文書を中心に―」
「律令軍団制と地域性」
「律令軍団制の展開と地方官人―軍毅を中心に―」
「明治初期山口県におけるハワイ移民政策と県議会の関わり方」
「戦時期の食糧配給政策について」
「国鉄労組の地方組織形成過程 昭和二十年代前半における姫路管理部の事例から」
「幕末長崎における銅と銅銭の流通構造」
「島津氏における戦国的状況の出来」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

池田真歩「大都市における政治秩序の近代化」〈指導教員〉鈴木淳
神戸航介「律令租税制度と古代国家構造」〈指導教員〉大津透
木下竜馬「中世前期の公武祈祷所」〈指導教員〉村井章介
佐々木政文「近代浄土真宗教団の変容と被差別部落の信仰―大正期・近畿地方の地域史との関わりを通して―」
〈指導教員〉野島陽子
武内美佳「古代貴族社会における橘氏―中下級貴族の氏の構造とその変容―」〈指導教員〉佐藤信
畑山周平「中近世移行期の島津氏と「家臣団」」〈指導教員〉村井章介
曾寶満「1930-40 年代の保田與重郎の言論に関する一考察」〈指導教員〉野島陽子

2013 年度

戸谷太一「五山制度における鹿苑僧録の変遷」〈指導教員〉高橋典幸
横山綾乃「室町期の中央政権と地域権力―治罰御教書・治罰論旨を用いて―」〈指導教員〉高橋典幸
垣中健志「律令国家と王家の家産―古代における「家」の成立について―」〈指導教員〉佐藤信
河村真澄「松代藩足輕の内部秩序と身分意識」〈指導教員〉牧原成征
小池勝也「中世東国顕密寺社と武家政権―室町期の「鎌倉三ヶ寺」を中心に―」〈指導教員〉高橋典幸
下田桃子「近世仏教教団の運営と僧侶身分―浄土宗檀林寺院を中心として―」〈指導教員〉牧原成征
長崎健吾「中世京都における法華宗の展開」〈指導教員〉高橋典幸
水上たかね「維新期の国家体制変革と軍事―廃藩置県の断行と海軍をめぐる兵部省・政府・藩―」〈指導教員〉
鈴木淳

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

佐藤雄介「近世の朝廷財政と江戸幕府」

〈主査〉牧原成征 〈副査〉本郷恵子・吉田伸之・藤田覚・田中暁龍

小松愛子「近世天台宗寺院の存立構造」

〈主査〉牧原成征 〈副査〉吉田伸之・伊藤毅・西坂靖・朴澤直秀

蔡蕙光 TSAI, HUI-KUANG「戦前期台湾総督府による南清・華南における学校の運営—東亜書院・旭瀛書院・東瀛学校を中心に—」

〈主査〉野島陽子 〈副査〉鈴木淳・牧原成征・吉澤誠一郎・家近亮子

湯川文彦「明治初期における行政事務の形成—官民共治の構想と展開—」

〈主査〉鈴木淳 〈副査〉野島陽子・三谷博・西川誠・松沢裕作

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

前田亮介「帝国議会開設後の全国政治—地方統治の再編と藩閥支配の変容—」

〈主査〉野島陽子 〈副査〉鈴木淳・五百旗頭薫・季武嘉也・千葉功

高銀美 GO EUN MI「対外関係からみた鎌倉時代」

〈主査〉村井章介 〈副査〉佐藤信・高橋典幸・近藤成一・田島公

北村安裕「日本古代の大土地経営と社会」

〈主査〉佐藤信 〈副査〉大津透・佐川英治・早乙女雅博・山口英男

磐下徹「日本古代の郡司と天皇」

〈主査〉大津透 〈副査〉佐藤信・鉄野昌弘・六反田豊・山口英男

武井紀子「日本古代倉庫制度と地方支配構造の研究」

〈主査〉佐藤信 〈副査〉大津透・佐川英治・田島公・藤井恵介

オラー・チャバ OLAH CSABA「中世後期の日中関係史研究—「入明記」からみる遣明使節の外交及び貿易活動—」

〈主査〉高橋典幸 〈副査〉渡邊正男・村井章介・川越泰博・橋本雄

(乙)

三谷芳幸「律令国家と土地支配」

〈主査〉佐藤信 〈副査〉大津透・佐川英治・早乙女雅博・加藤友康

1 1 中国語中国文学

1. 研究室活動の概要

中国語中国文学研究室（通称、中文研究室）は、1877年東京大学設立に際し創設された和漢文学科に始まる。その後、和漢両文学の分離などを経て、1904年漢学科が支那哲学、支那文学に分かれた。途中一時期支那哲学支那文学科として合併された時期はあるものの、哲学科、文学科が独立の学科となった時点から数えても、今日まで100年を越す歴史をもっている。

研究領域は、中国語学と中国文学の2分野に大別され、さらに、中国語学は古漢語（古典中国語）と現代中国語、中国文学は古典文学と近現代文学の領域にそれぞれ分かれる。語学の研究対象には、文字学、音韻学、意味論、文法論、語用論などが含まれ、文学の研究対象には詩詞、散文、小説、演劇のほか、台湾文学、香港文学、中国の少数民族文学、さらに最近では映画、テレビ・ドラマなどが含まれる。ほぼ3000年の間に作られたすべての言語テキストが研究の対象である。教員数は、教授3名、助教1名であるが、大学院人文社会系研究科における中国語中国文学専門分野においては、東洋文化研究所の教員1名が教育に参加している。学生数は、学部学生10名、大学院修士課程9名、博士課程22名、研究生4名で多様な研究テーマに取り組んでいる。近年留学生の数も増加し、上記のうち中国大陆からの留学生17名、台湾からの留学生4名、合計21名にのぼっている。留学生の増加は、授業のあり方にも影響を与え、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。

国際交流は極めて盛んで、日本人学生の中国・台湾・香港・シンガポール・アメリカへの留学も多く、ほとんどの学生が中国政府奨学金による長期の留学や私費による短期留学を経験している。教員も短期長期で中国語圏のみならず韓国、欧米へ出向き、調査研究や学会活動を行っている。諸外国からも毎年多くの訪問客を迎えるほか、常に数名の外国人研究員が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、学生との交流が活発に行われている。

また、海外から多くの研究者を招き、国際シンポジウムやワークショップを開催することも少なくない。最近の主要な催しに「東アジアにおける魯迅「阿Q」像の系譜」国際シンポジウム（2012年11月22-26日 於 山上会館）、「現代東アジア文学史の国際共同研究」ワークショップ（主催、東京大学文学部、2013年12月22-23日）などがある。

中文研究室では、1998年に研究室紀要を創刊した。そこには教員・学生による最新の研究成果とともに、留学生を交えた共同研究の報告や、外国人研究者との交流の記録が掲載されている。紀要は2013年度第16号をUT Repositoryで公開している。（<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#12-0>）

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

戸倉英美教授（中国古典詩、中国古典小説、中国古典文学理論 2013年3月定年により退職。）

藤井省三教授（中国近代文学、台湾・香港文学、日中比較文学）

木村英樹教授（現代中国語文法論・意味論）

大西克也教授（中国古典文法、文字学）

前田真砂美助教（2011年4月～2014年3月）

(2) 助教の活動

前田真砂美

在職期間：2011年4月～2014年3月

研究領域：現代中国語学

当該期間の主要業績

論文：「程度副詞「比较」の（相対性）」、『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』、451-473頁、2013.5

他機関での講義など：非常勤講師、早稲田大学商学部、「中国語Ⅱ総合」、2013.4～2014.3

非常勤講師、慶應義塾大学経済学部、「中国語Ⅲ」、2012.4～2014.3

非常勤講師、慶應義塾大学経済学部、「中国語Ⅳ」、2012.4～2014.3

(3) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

敖玉敏：上海東華大学講師（中国）

研究題目—元雜劇「竇娥冤」の研究

研究期間—2011年9月1日～2012年8月31日

楊炳菁：北京外国語大学准教授

研究題目—村上春樹と戦後日本文学

研究期間—2013年1月10日～2014年1月9日

陳朝輝：南開大学外国語学部准教授

研究題目—魯迅と中野重治の受容関係についての研究

研究期間—2013年3月～2013年8月31日

林敏潔：南京師範大学日語系教授

研究題目—魯迅と林芙美子、増田渉との交流、蕭紅・謝冰心の東京体験の調査研究

研究期間—2013年12月20日～2014年12月20日

傅元峰：南京大学現代文学研究中心副教授

研究題目—中国現代詩歌の影響関係

研究期間—2013年12月20日～2014年12月20日

内地研究員

野原将揮：日本学術振興会 特別研究員

研究題目—上古中国語音韻体系の共時的・通時的研究～出土資料を中心に～

研究期間—2013年4月～

夏海燕：日本学術振興会 特別研究員

研究題目—日本語動詞の意味拡張に見られる方向性

研究期間—2013年4月～

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012年度

「日本に於ける中国語辞典の発展についての考究」

「現代日本文学に対する魯迅の影響 魯迅『祝福』と山田宗樹『嫌われ松子の一生』を中心に」

「日本における老舍「駱駝祥子」の受容をめぐる一邦訳版本の比較研究」

2013年度

「満州事変が引き起こしたもの—日中文学が描いた満州の比較—」

「文人曹操～文学作品から見る曹操の一生～」

「“指示代詞(＋量詞)＋名詞” フレーズにおける量詞の有無について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012年度

鈴木政光「温庭 詩における情景表現の諸相—李商隠・杜牧との比較を中心に—」〈指導教員〉戸倉英美

杉山裕梨「『三国志演義』における女性描写について」〈指導教員〉大木康

権慧「中国語圏・韓国における村上春樹文学の翻訳状況と受容状況の比較研究—『ノルウェイの森』を中心に—

〈指導教員〉藤井省三

千賀由佳「近世白話小説における民間宗教—蘇庵主人『帰蓮夢』を題材に—」〈指導教員〉大木康

YAN LU「映画『さらば、わが愛 覇王別姫』の日本における受容の研究」〈指導教員〉藤井省三

張瑶「ポスト鄧小平時代における郭敬明を中心とする「八〇後」文学研究—その模作的創造と出版戦略をめぐる—

〈指導教員〉藤井省三

2013年度

卓于綉「日本統治期台湾における映画文化の形成をめぐる—」〈指導教員〉藤井省三

宮島和也「出土文献から見た上古中国語における「于」と「於」」〈指導教員〉大西克也

張偉萌「鄧小平時代以降の中国における日本児童文学の受容—宮沢賢治、新美南吉、安房直子を中心に」

〈指導教員〉藤井省三

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

高芝麻子「苦熱・納涼・生命の汪溢—先秦から唐代の詩賦に見る「夏」の描写の変遷—」

〈主査〉戸倉英美 〈副査〉藤井省三・大西克也・市川桃子・和田英信

謝惠貞 XIE HUI-ZHEN「日本統治期台湾文化人による新感覚派の受容—横光利一と楊逵・巫永福・翁鬧・劉吶鷗—」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉安藤宏・河原功・垂水千恵・山口守

(乙)

木村英樹「中国語文法の意味とカタチ—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究—」

〈主査〉大西克也 〈副査〉林徹・西村義樹・小野秀樹・井上優

2013 年度

(甲)

山崎藍「中国古典文学に描かれた廁と井戸の研究—正と負の廁神・井戸をめぐる・轆轤と瓶—」

〈主査〉戸倉英美 〈副査〉藤井省三・大西克也・齋藤希史・黒田真美子

蕭涵珍 SHIAU HAN-CHEN「李漁の創作とその受容」

〈主査〉大木康 〈副査〉藤井省三・古井戸秀夫・廖肇亨・小林ふみ子

徐曉紅 XU XIAO HONG「施蛰存文学研究—1920、30 年代の創作・翻訳活動を中心に—」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉尾崎文昭・斎藤敏康・藤澤太郎・山口守

遠藤星希「李賀研究—その詩にあらわれた時間意識を中心として—」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉大西克也・齋藤希史・戸倉英美・黒田真美子

福田素子「討債鬼故事の成立と展開—我が子が債鬼であることの発見—」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉大西克也・戸倉英美・田仲一成・岡田充博

郎潔 LANG JIE「明清「文学世家」の研究」

〈主査〉大木康 〈副査〉木村英樹・大西克也・廖肇亨・板倉聖哲

松崎寛子「鄭清文とその時代：“本省人” エリート作家と戦後台湾アイデンティティの形成」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉松田康博・垂水千恵・山口守・河原功

馬場昭佳「『水滸伝』の成立と受容—宋代忠義英雄譚を軸に—」

〈主査〉大木康 〈副査〉藤井省三・大西克也・齋藤希史・小松謙

(乙)

なし

12 東洋史学

1. 研究室活動の概要

1904年に漢学科から独立した支那史学科は中国以外の東洋も研究対象とする実情にあわせて、1910年に「東洋史学科」と改称された。支那史学科の時代から数えれば、本専修課程は100年以上の歴史をもつ。当初は中国およびその周辺の西域・北アジア史が中心であったが、次第にその対象は東南アジア、南アジア、西アジア、中央アジアに広がっている。2012～2013年度本専修課程の授業を担当したのは、教授1名・准教授4名・助教1名と複数の非常勤講師であり、東は中国から東南アジア・インドをへて西は北アフリカに至る広い範囲をカバーしている。

本研究室の教員は、1995年4月の大学院部局化により、大学院のみが地域毎に三コースに分かれ、学部は東洋史学のままとされたが、より広い視野でのアジア研究者の育成を目指し、2009年に「アジア史」として大学院が再統合された。同大学院では、東洋史学の教員だけではなく、韓国朝鮮文化研究専攻、東洋文化研究所、総合文化研究科等に所属する教員の協力を得て、多彩なカリキュラムが編成されている。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、史学会の運営があげられる。歴史文化学科の他専修課程と共に、理事として運営に参加し、『史学雑誌』その他の出版物の編集にたずさわるほか、史学大会において東洋史関係のシンポジウムを組織するなどの活動を行っている。

他には、東洋学・アジア研究連絡研究会議、東方学会や東洋文庫のような広域かつ多分野にわたる学会・研究所での活動にたずさわり、また個別的には、中国社会文化学会、南アジア学会、日本オリエント学会、日本中東学会、内陸アジア史学会をはじめとする諸学会に加わり、それらの運営で中心的な役割を果たしている。

本研究室の特色のひとつは、留学生の存在であり、学生レベルの国際交流が自然な形で行われている。また、大学院博士課程の学生は、殆どが留学中ないしは長期の留学経験者であることも重要な特色であろう。個々の教員は、様々な形で海外の研究者と密接な関係をもちながら研究交流をおこなっており、研究室は狭義の歴史研究にとどまらないアジア理解の場として、活況を呈している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	水島 司	(南アジア史)	(1997年10月～現在)
准教授	大稔 哲也	(西アジア史)	(2007年4月～2014年3月)
准教授	佐川 英治	(中国古代史)	(2010年4月～現在)
准教授	吉澤 誠一郎	(中国近現代史)	(2001年4月～現在)
准教授	島田 竜登	(東南アジア史)	(2013年4月～現在)

(2) 助教の活動

助教	北川 香子
在職期間	2010年4月～2014年3月
専門分野	東南アジア史
主要業績	論文

「チャンルン寺(カエト・スレイ・サントー)の住職任命騒動—プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No.10133の分析—」、『南方文化』、39、135～160頁、2012.12

「ポー・ヴィエル寺の選択—寺院史から見た「返還」前後のバット・ダムバーン—」、『南方文化』、40、1～23頁、2013.12

「18世紀クメール語書簡の発見」、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』、64、2～14頁、2014.1

(3) 外国人研究員・内地研究員

易青 (中国)	2011年9月～2013年8月
呂文利 (中国)	2011年10月～2012年9月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

- 「1800 年代初頭イギリス東インド会社の貿易独占権修正をめぐる論争—会社の主張を中心に—」
- 「アンディジャンにおける「革命」—1917 年から 1924 年まで」
- 「英領マラカにおけるインド人労働移民の定着過程について—1930 年代大恐慌後から 1938 年インドの労働移民制限措置までを中心に—」
- 「開発体制下のインドネシアにおける反抗勢力としてのメディアの醸成」
- 「日中戦争期、アメリカの軍事支援をめぐる米中交渉—航空機を中心に—」
- 「一九〇五年竹島編入に関する考察—堀和生論文批判を中心に—」
- 「南京国民政府の鉄道運賃政策」
- 「バタヴィアの奴隷とラッフルズ」
- 「20 世紀前半における電力産業発展の日印比較」
- 「1920 年代インドにおける日本人綿関係商社の活動」
- 「中華民国期における電力産業の発展とその地域的特徴」
- 「「じゃがたらお春」像の展開」
- 「方臘の乱の受容と祠廟の言説—温州を中心に—」

2013 年度

- 「曹操の徐州虐殺の真相」
- 「民国期山西省の炭鉱開発」
- 「17・18 世紀マドラスにおける交易とアルメニア商人—アジア人商人集団の交易活動に関する考察—」
- 「スィースターン地方におけるサファヴィー朝支配の展開と君主権」
- 「第二次世界大戦後 GCC 諸国の産業多様化政策と SWF」
- 「ムスリム同胞団の発展過程におけるジャムイーヤ的側面」
- 「20 世紀初頭マレー半島における錫鉱業—海峡錫を中心に—」
- 「19 世紀におけるラブアン島の石炭供給」
- 「曹魏時代の肉刑復活をめぐる議論に関する考察」
- 「日本占領下インドネシアにおけるイスラム教」
- 「17 世紀初頭ムガル朝とインド洋交易—イギリス東インド会社進出に関する一考察—」
- 「劉備集団と孫氏の関係—荊州をめぐる—」
- 「海峡植民地におけるアヘンの研究—社会的側面からみたアヘン—」
- 「17 世紀マニラの中国人—鄭氏政権との関係から—」
- 「19 世紀初頭ベンガル地方における教育システム」
- 「清末における茶葉輸出の変遷と日本の市場調査」
- 「英国外交におけるパレスチナに関する一考察—歎きの壁事件からアラブ大反乱に至るまで—」
- 「19 世紀前半のイエズス会シリア宣教団の活動とフランス政府への再接近：学院創設計画の変遷に注目して」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

- 水上遼「イブン・アル＝フワティ著『アダブ集成』にみるイルハン朝下の学者たち—その移動と交流を中心に—」
〈指導教員〉森本一夫
- 岩田香織「インド民族運動家と移民社会—20 世紀初頭カナダを例にして」〈指導教員〉水島司
- 張楽「出土資料よりみた秦漢の郡県における文書行政」〈指導教員〉小寺敦

2013 年度

- 長沼秀幸「カザフ草原におけるロシア帝国統治体制の形成—ケネサル叛乱（1837-47 年）への対応とその帰結—」
〈指導教員〉森本一夫
- 三浦雄城「古代中国江南政治文化研究—国山碑の分析を中心として」〈指導教員〉佐川英治

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

森川裕貫「民国前期における政論家の制度構想—『甲寅』雑誌を起点として」

〈主査〉吉澤誠一郎〈副査〉佐藤慎一・村田雄二郎・石井剛・石川禎浩

木村拓「朝鮮前期の事大交隣と羈縻—「侯国」的対外政策の形成と変容—」

〈主査〉六反田豊〈副査〉吉澤誠一郎・村井章介・早乙女雅博・吉田光男

東條哲郎「近代マレー半島ペラにおける華人錫採掘」

〈主査〉古田元夫〈副査〉水島司・桜井由躬雄・池本幸生・加納啓良

阿部尚史「19 世紀イランの地方社会有力者の家・財産・相続」

〈主査〉羽田正〈副査〉大稔哲也・森本一夫・久留島典子・近藤信彰

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

堀内淳一「南北朝間を移動する人々と北朝貴族社会」

〈主査〉平勢隆郎〈副査〉吉澤誠一郎・佐川英治・窪添慶文・町田隆吉

長田紀之「インド人移民の都市からビルマの首都へ：植民地港湾都市ラングーンにおけるビルマ国家枠組みの生成」

〈主査〉古田元夫〈副査〉水島司・高橋昭雄・伊東利勝・根本敬

大塚修「ペルシア語文化圏における普遍史書の研究：9-15 世紀の歴史叙述における人類史認識」

〈主査〉羽田正〈副査〉大稔哲也・杉田英明・森本一夫・近藤信彰

(乙)

なし

13 中国思想文化学

1. 研究室活動の概要

中国思想文化学専修課程の学科としての淵源は、明治10年の本学の創立時にまでさかのぼることができる。専修課程としては、当初の「支那哲学」から、「中国哲学」、「中国思想文化学」と2度の名称変更を経て現在に至っている。平成7年に大学院が部局化されると、人文社会系研究科の「アジア文化研究」専攻「東アジア」コース「東アジア思想文化」専門分野と一体のものとして、文学部の中国思想文化学研究室が存在する形態となった。なお、大学院のほうは、平成21年からは「アジア文化研究」専攻「アジア文化」コース「東アジア思想文化」専門分野という位置付けとなっている。

研究の分野は、中国の殷周時代～中華人民共和国に至る思想史で、方法的には哲学・哲学史的研究だけでなく、社会史を背景にした思想史的研究、中国文化と他文化との比較文化論的研究、など多岐にわたっている。平成24年度、25年度の教員は、教授2名、准教授1名、助教1名であり、他に非常勤講師を3名委嘱した。また、本学部次世代人文学開発センターの特任教員や中国語担当外国人教員にも、学生の教育に携わってもらっている。大学院は、基幹講座としての文学部の本研究室と、協力講座としての東洋文化研究所東アジア思想・宗教分野とからなり、他に教養学部（総合文化研究科）などから若干名の教員の協力を仰いでいる。平成4年度より毎年2名のティーチング・アシスタントを大学院生から募り、学部学生の手ほどきをしてもらっている。なお、助手1名体制にともない、平成8年度からは嘱託1名を委嘱している。

外国人研究員については、毎年数名を受け入れている。留学生も積極的に受け入れており、東アジアを中心に平成24年度は計8名（博士課程3名、修士課程1名、研究生4名）、平成25年度は計9名（博士課程2名、修士課程2名、研究生5名）が在籍、チューター制度もうまく噛みあって学生間の国際交流が盛んである。日本人大学院生は、博士課程進学後に大部分の者が海外に留学する。平成24年度前期には1名が留学中であった。また、博士課程在籍中に日本学術振興会特別研究員に選ばれる事例も多い。後掲のように、大学院満期退学後に博士論文を提出する者が毎年2～3名いる。

研究室全体で支えている学会として中国社会文化学会があり、役員として運営に参加している。また、大学院生を中心に「中国哲学研究会」（昭和48年～）が組織されて月例会を開いており、平成2年より雑誌『中国哲学研究』を発行して助手・助教・大学院生の研究発表の場としている。

本研究室では、漢籍の語句用例検索ソフト導入など、従来から研究・教育活動におけるコンピュータの利用を積極的に図ってきた。技術の日進月歩にあわせて検索環境を随時整備し、従来の書冊漢籍の活用とともに教育の高度化を図っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

川原秀城 教授	専門分野 東アジア思想史・中国朝鮮科学史
小島 毅 教授	専門分野 儒教史・東アジア王権論
横手 裕 准教授	専門分野 道教史・中国三教交渉史

(2) 助教の活動

小野泰教 助教	専門分野 中国近代思想史
---------	--------------

在職期間 2011年4月～現在

主要業績

（論文）「安部健夫「中国人的天下観念」的意義と課題——在日本学者視野中的中国天下概念」、『中国儒学』7、355-367頁、2012.9

「郭嵩燾の政治思想——誠意・慎独・絜矩を中心に——」、『孫文研究』51、1-10頁、2012.11

（書評）「中国思想の伝道師」を目指して 井ノ口哲也著『入門中国思想史』、『東方』378、34-37頁、2012.8

共著「[書評]『新図説中国近現代史——日中新時代の見取図』」、著者は小野泰教 北村祐子 河野正、『近代中国研究彙報』35、211-231頁（小野の執筆箇所は213-219頁）、2013.3

（学会発表）国内、小野泰教、「郭嵩燾の風俗観念と西洋政治制度——議会制、学会組織を中心に——」、日本現代中国学会第62回全国学術大会、一橋大学、2012.10.21

- 国際、小野泰教、「任侠習俗と諸子百家」、日本東洋史研究の回顧と反思——以増淵龍夫の研究と思考為
中心學術研討会、中国人民大学、2013.11.30
- (予稿・会議録) 国際会議、小野泰教、「任侠習俗と諸子百家」、日本東洋史研究の回顧と反思——以増淵龍夫の
研究と思考為中心學術研討会、2013.11.30
- 『日本東洋史研究の回顧と反思——以増淵龍夫の研究と思考為中心學術研討会』、99-111 頁
(辞典項目執筆)「王汝淮」「何秋濤」「龔振麟」「徐繼畲」「徐建寅」「徐寿」「鄒代鈞」「鄒伯奇」「曹廷傑」「丁守
存」「杜亜泉」「フライヤー」、岩波書店辞典編集部編『岩波世界人名大辞典』
岩波書店、2013.12
- (翻訳) 個人訳、巫仁恕、「從城市民變到辛亥革命」、小野泰教、「都市の民變から辛亥革命へ」、辛亥革命百周年
記念論集編集委員会編『総合研究 辛亥革命』、岩波書店、2012.9
- 個人訳、張志強、「附録二 伝統と当代中国——近十年来中国内地伝統復興現象の社会文化脈絡分析」、
小野泰教、「伝統と現代中国——最近一〇年来の中国国内における伝統復興現象の社会文化的文脈
に関する分析」、『現代思想』、第 42 巻第 4 号、140-153 頁、青土社、2014.3
- (他機関での講義等) 非常勤講師、専修大学 ネットワーク情報学部、「中国語中級総合ⅠⅡ」、2012.4～2014.3
非常勤講師、専修大学 ネットワーク情報学部、「中国語初級構造ⅠⅡ」、2012.4～2014.3
非常勤講師、日本女子大学 人間社会学部、「中国語会話Ⅰ」、2012.4～2014.3
非常勤講師、日本女子大学 人間社会学部、「中国語Ⅱ 前期 後期 B」、2012.4～2014.3

(3) 外国人教員の活動

廖肇亨 准教授 専門分野 近世東アジア仏教、東アジア漢文学、中国古典文学理論
在職期間 2011 年 10 月～2013 年 9 月
担当講義

2012 年度

学部・中国思想文化学特殊講義「東アジア近世美学思想」(1) (2) (前期・後期、大学院共通)
学部・中国思想文化学演習「中国語文表現実践」(1) (2) (前期・後期)
大学院・特殊研究／アカデミックライティング「学術中国語文実践」(1) (2) (前期、後期)
大学院・特殊研究「東アジア近世美学思想」(1) (2) (前期・後期、学部共通)
大学院・演習「中国宗教文学研究」(1) (2) (前期・後期)

2013 年度

学部・中国思想文化学特殊講義「東アジア近世美学思想」(前期、大学院共通)
学部・中国思想文化学演習「中国語文表現実践」(前期)
大学院・特殊研究／アカデミックライティング「学術中国語文実践」(1) (前期)
大学院・特殊研究「東アジア近世美学思想」(前期、学部共通)
大学院・演習「中国近世仏教文化史研究」(1) (前期)

(4) 外国人研究員・内地研究員

陳永福 (日本學術振興会外国人特別研究員)
2013 年 9 月～現在

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

なし

2013 年度

「中国における「孝」の制度化——『論語』直射説話を中心として——」
「李卓吾の修己・治人論の矛盾点の整理」
「諸子百家における孔子評価の比較研究」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

早川泉「飛伏説からみる『京氏易伝』」(指導教員) 川原秀城

2013 年度

邱鈺珊「北宋道学者の易経解釈に見られる「生」の思想について」〈指導教員〉小島毅

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

新田元規「中国近世期における家族礼制の解釈史—清代初期礼学の視座から」

〈主査〉小島毅 〈副査〉川原秀城・廖肇亨・伊東貴之・林文孝

佐藤隆「蔡元培の翻訳活動を通しての思想形成に関する一考察」

〈主査〉小島毅 〈副査〉吉澤誠一郎・佐藤慎一・石井剛・坂元ひろ子

中村惇二「宋遼外交交渉の思想史的考察」

〈主査〉小島毅 〈副査〉川原秀城・佐川英治・村田雄二郎・須江隆

姜智恩 KANG JIEUN「経学的観点から見る東アジアの四書注釈—17 世紀朝鮮経学の新たな位置付けを中心に—」

〈主査〉小島毅 〈副査〉川原秀城・黒住真・渡辺浩・権純哲

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

小野泰教「清末における士大夫像の模索—郭嵩燾の修己治人を中心に—」

〈主査〉村田雄二郎 〈副査〉小島毅・吉澤誠一郎・佐藤慎一・石井剛・佐々木揚

高山大毅「近世日本の「礼楽」と「修辞」—荻生徂徠以後の「接人」の制度構想—」

〈主査〉小島毅 〈副査〉川原秀城・廖肇亨・苅部直・齋藤希史

(乙)

なし

14 インド語インド文学

1. 研究室活動の概要

インド亜大陸では3千年来数多くの言語が用いられ、それらの言語によって伝えられた文献も多様を極めている。そのうち、本専修課程（略称「印文」）では、明治34（1901）年に「梵文学講座」が開設されて以来（梵語学の開講は、明治18（1885）年に遡る）、古典サンスクリット語を中軸とする古期・中期インド・アーリア語をもって著された文献の研究がなされてきた。サンスクリット語はインドの雅語として古典時代の宗教、文学、哲学、科学などあらゆる分野の文献に用いられたものであり、古典インド文化の精華はサンスクリット語によって伝えられたといっても過言ではない。本専修課程でサンスクリット語の学習を必須とするのもこのためである。他方、平成8（1996）年度より、ドラヴィダ系のタミル語タミル文学の講座も設けられ、これにより、専門的なドラヴィタ系語学文学の研究に携ることが可能となった。タミル語も紀元前に遡る文献をそなえ、その文学は長い歴史と豊かな内容を誇るものである。

本専修課程は、これらの言語をはじめとするインド諸語の十分な知識とインド古典籍の精密な読解の基礎に立って、広くアジア諸地域に伝播してゆくインド古典文化を考究することを目標としている。したがって、専修課程名の一部ともなるインド文学とは、詩歌・戯曲・説話など狭義の文学作品だけでなく、ヴェーダ聖典、マヌ法典・実利論などの学術論書、仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教などの宗教文献なども含むものである。

なお、本専修課程と密接な関係にあるインド哲学仏教学専修課程とは、学部レベルでは別々の専修課程をなすが、大学院レベルではインド文学・インド哲学・仏教学専門分野として単一のコースを形成し、さまざまな行事を共同で行っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

高橋孝信（タミル語学文学）

梶原三恵子（サンスクリット語学文学）

(2) 非常勤講師

矢島道彦、山下博司（2012年度）、茂木秀淳（2013年度）

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012年度

小林史明「失われた出生図の復元法（*naṣṭajātaka*）の変遷—*Yavanajātaka*、*Bṛhajjātaka*、*Sārāvalī*の比較による」
〈指導教員〉永ノ尾信悟

2013年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012年度

(甲)

伊澤敦子「Yajurveda 文献における Agnicayana—黒 Yajurveda Samhitā と Śatapatha Brāhmaṇa を中心に—」
〈主査〉永ノ尾信悟 〈副査〉高橋孝信・丸井浩・後藤敏文・藤井正人

(乙)

なし

2013年度

(甲) (乙)

なし

15 インド哲学仏教学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1879年、和漢文学科に「仏教典籍」の講義が設けられたことを源流とし、1916年に「印度哲学」の講座が誕生したことに端を発する。以来、現インド語インド文学専修課程と密接な関係を保ちつつ、現在に至っている。本専修課程では、インドの哲学・宗教思想、およびインドにおいて成立・展開し、またアジア諸地域に伝播してそれぞれに独自の展開を遂げてきた仏教の研究・教育が、包括的・有機的な展望のもとに行われている。2013年度現在、教員は教授4名である。

大学院人文社会系研究科においては、本専修課程は、アジア文化研究専攻の中のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野（南アジア・東南アジア・仏教コース）に対応し、その一部を構成する。そこでは、インド語インド文学専修課程や東洋文化研究所の関連部門などと連携しながら、より広い視座に立って、インドの諸思想及び仏教についての専門的な研究・教育が進められている。

本専修課程への教養学部からの進学者は、毎年3～5名ほどであり、学士入学者も1～2名ほどいる。学部卒業生の多くは、大学院のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に進学する。また、他専修課程や他大学（外国の諸大学を含む）を卒業して同専門分野に入ってくるものも稀ではない。教育上は、学生たちがそれぞれに、サンスクリット語・パーリ語・チベット語・古典中国語などの修得を基礎として、関心を持つ問題を主体的に追求していくことを基本方針としているから、結果的には、本専修課程および当該専門分野において取り扱われる研究対象や研究方法は極めて広範囲に亘る。しかし、研究方法に関して文献学的な厳密さが要求されるという点は、共通である。そのために、卒業論文の代わりに特別演習を取って卒業することも認めている。これは教員の指導の下に指定された基本的な原典を自ら読解し、基本的な読解力を養おうというものである。

本専修課程は、インド語インド文学専修課程と共同で、年に数回研究例会を開催している。そこでは、大学院の博士課程在学学生などによる研究発表、国際会議等で海外に出張した教員による帰朝報告、海外留学生の体験報告などが行われており、研究・教育上の意義は大きい。また、本研究室における諸研究を公表する媒体として、1993年以来、原則として年に1回、『インド哲学仏教学研究』が刊行され、好評を得ている。

本専修課程に関わるインド哲学研究ならびに仏教学は、それ自体が高度の国際性を帯びていることもあって、研究者間の国際交流は極めて活発である。また、多くの留学生を海外に送り出すとともに、海外から多くの留学生を迎えている。さらに、内外の所学会との繋がりも緊密である。中でも、海外にも多数の会員を持つ日本印度学仏教学会は、1951年の創立当初より本研究室との関係が深く、事実上、学会運営においても中核的役割を担い続けて今日に至っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 斎藤 明	専門分野	インド仏教	在職期間	2000年4月より現在に至る
教授 丸井 浩	専門分野	インド哲学	在職期間	1992年4月より現在に至る
教授 下田 正弘	専門分野	インド仏教	在職期間	1994年10月より現在に至る
教授 蓑輪 顕量	専門分野	日本仏教	在職期間	2010年4月より現在に至る

(2) 助教の活動

加藤 隆宏 助教 専門分野 インド哲学

在職期間 2012年4月～現在

主要業績

(論文)

「バースカラの無明論批判と別異非別異論」、『インド哲学仏教学研究』19, 61-72, 2012.3.

“A Study on Brahmasūtra II.3.50: ābhāsa/ā eva ca,” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā*, Vol. 30, 35-53, 2013.4.

“A Note on the Kashmirian Recension of the *Bhagavadgītā*,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 62/3, 80-86, 2014.3.

“Bhāskara mentioned in the *Prameyakamalamārtanda*,” 『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』, 286-298, 2014.3.

(学会発表)

国際 Takahiro Kato, “Bhāskara's concept of jñānakarmasamuccaya,” XVth World Sanskrit Conference, New Delhi (India), 2012.1.8

国際 Takahiro Kato, “Would rather be a jackal,” The Second Cross-Strait Conference on Sanskrit and Buddhist Studies, National Chengchi University, Taipei (Taiwan), 2012.11.9.

国内 加藤隆宏、「カシュミール版『ギター』に関する覚書」、日本印度学仏教学会第64回学術大会、島根県民会館、2013.8.31.

(予稿・会議録)

国際会議 Takahiro KATO, “Bhāskara's Concept of Jñānakarmasamuccaya,” In *Abstract of Papers 15th World Sanskrit Conference*, 315-317, New Delhi, 2012.1.

国際会議 Takahiro Kato, “Would rather be a jackal: Vedāntins', Buddhists' and Jains' criticism of Nyāya-Vaiśeṣika concept of liberation,” In *Proceedings of the Second Cross-Strait Conference on Sanskrit and Buddhist Studies*, National Chengchi University, Taipei (Taiwan), 2012.11.9.

(3) 外国人研究員・内地研究員

2012年度：何歡歡（中国）

2012-13年度：吳娟（中国）

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012年度

「現代の東南アジアの修行僧が実践する『清浄道論』の瞑想について」

2013年度

「牧口常三郎研究—その生涯と仏教—」

「インド哲学・仏教思想における＜意識＞論」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012年度

大田祐慈「『清浄道論』における煩惱論 第六章不浄観を中心に」〈指導教員〉下田正弘

岡田文弘「鎮源『大日本国法華経験記』の法華信仰—異類功德譚を中心に—」〈指導教員〉蓑輪頤量

渡邊眞儀「ヴァイシェーシカ哲学における時間論—『ニヤーヤカンダリー』を中心に—」〈指導教員〉丸井浩

朴賢珍「蔵訳『華嚴経』の概観—「普賢所説品」の校訂・訳注を含めて—」〈指導教員〉下田正弘

2013年度

栗山純一「法華経の文学論的解釈試論—反復と唯一回性—」〈指導教員〉下田正弘

井野雅文「『修習次第初篇』における止観—『楞伽経』偈頌品の引用とその解釈をめぐって」〈指導教員〉斎藤明

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012年度

(甲)

堀田和義「ジャイナ教在家信者の倫理と＜布薩＞—シュラーヴァカ・アーチャーラ文献を中心として—」

〈主査〉丸井浩 〈副査〉斎藤明・下田正弘・矢島道彦・榎本文雄

柳幹康「中国仏教における永明延寿の思想研究—延寿が再編した仏教観と後世における延寿像—」

〈主査〉蓑輪頤量 〈副査〉斎藤明・下田正弘・小島毅・石井修道

(乙)

なし

2013年度

(甲)

鄭有植 JEUNG YOU SICK「『楞伽経』におけるアーラヤ識の研究」

〈主査〉斎藤明 〈副査〉丸井浩・下田正弘・佐久間秀範・上田昇

(乙)

なし

16 イスラム学

1. 研究室活動の概要

イスラム学専修課程は、イスラム地域思想・文化を研究する独立した学科として、1982年わが国で初めて設置された。一口にイスラム学といってもその対象範囲は広い。地理的には、中近東はもちろん東は中央アジア、インド亜大陸、東南アジア、東アジア、西は北アフリカ、スペインまでにも及び、時代的にはイスラム発生期から現代のイスラム思想の動向までも含んでいる。2012年度は教授2名、助教1名、2013年度は教授1名、准教授1名がそれぞれ近代より前の古典期イスラム思想文献研究を専門にしているが、それに加え古典研究をもとにした現代イスラム理解を念頭に置きつつ研究をすすめている。上記の広大な研究領域をカバーし、また歴史分野や現代研究との共同研究の可能性を探るために、オスマン史研究、現代アラブ政治、近現代イラン研究、アラビア語の領域に関して学外教員および非常勤講師の協力を仰いでいる。

本専修課程に対応する大学院人文社会系研究科の専門分野はアジア文化研究専攻（西アジア・イスラム学）イスラム学専門分野である。大学院では特に同じコースに属する西アジア歴史社会専門分野と連携しつつ、さらには東洋文化研究所ならびに大学院総合文化研究科の教員2名の協力を得て、より包括的なイスラム理解を求め研究・教育活動が行われている。

教養課程から進学する学生は例年2～3名前後で、2012年度と2013年度の在籍数はともに10名である。他大学から学士入学してくる事例も過去にはあった。授業は基本的にアラビア語・ペルシア語の文献読解を通じて、神秘主義・法学・神学・哲学などの学問分野の理解を深めるという方向で行われる。だが、その枠組みにとらわれず学生が主体的にイスラム理解の視座を新たに設定し研究することが奨励されており、言語にかぎっても、必ずしもアラビア語・ペルシア語に自らのフィールドを限定する必要はない。また近年、イランやパキスタンなどからの研究生を受け入れ、より広い範囲での教育活動を目指している。

本専修課程から大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻イスラム学専門分野に進む学生は毎年、1、2名程度。それ以外にも他大学からの入学希望者もいる。2012年度は9名、2013年度は6名が在籍。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

2012年度

教授	竹下政孝	専門分野	イスラム神秘主義
教授	柳橋博之	専門分野	イスラム法
助教	吉田京子	専門分野	シーア派思想

2013年度

教授	柳橋博之	専門分野	イスラム法
准教授	菊地達也	専門分野	シーア派思想史

(2) 助教の活動

吉田京子

在職期間 2010年4月～2013年3月

研究領域 12 イマーム・シーア派のイマーム論に関する初期伝統の分析および成立過程の考察

主要業績

(論文) 「12 イマーム・シーア派の夢議論」『宗教史学論叢 17 夢と幻視の宗教史』上巻、リトン、33-55 頁、

2013.1

(学会発表) 「アーシューラー：英雄譚としてのフサイン伝」、研究会「アシュラの事件についての社会的歴史的考察」、イラン・イスラム共和国大使館文化交流センター、2012.11.17

(非常勤講師) 神田外語大学非常勤講師、2010.4～2013.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「近代ペルシアのナショナリズム」

「イスラームの食物規定について」

2013 年度

「自爆攻撃とイスラーム」

「イスラーム法に見る家族制度を日本民法と比較して一日本の最高裁違憲判決を題材に一」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

西山健人「『修業者の階梯』におけるイブン・カイイム・ジャウズィーヤのタウヒード論」〈指導教員〉竹下政孝

2013 年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

加藤瑞絵「伝承の中の神と世界と人間—アブー・シャイフ『威厳の書』の思想研究—」

〈主査〉竹下政孝 〈副査〉柳橋博之・市川裕・杉田英明・鎌田繁

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

森下信子「アラビア語版『サラーマーンとイブサール物語』の写本研究—古代末期からイスラームへの文化伝播に関する文献学的考察—」

〈主査〉柳橋博之 〈副査〉菊地達也・鎌田繁・杉田英明・竹下政孝

近藤洋平「イバード派イスラーム思想における共同体論の研究」

〈主査〉柳橋博之 〈副査〉大稔哲也・菊地達也・鎌田繁・竹下政孝

(乙)

なし

17 西洋古典学

1. 研究室活動の概要

西洋古典学はギリシャ語・ラテン語でしるされた文献全体を対象とする。のみならず古典古代世界の全容の把握をもめざす学問である。西洋社会を理解する上で、この学問の重要性はいまさら強調するまでもなく、欧米では広範な領域を対象として永い伝統を誇る総合的学問である。本専修課程ではギリシャ語・ラテン語双方の基礎を固め（大学院の入試段階ですでに両古典語を必須とする）、諸ジャンルの文献に親しんだ上で、徐々に視野を拡大していく方針をとっている。

広範な対象にくらべ講義・演習をもつ専任教員の数は助教を加えても2人とあまりに少ない。そこで非常勤講師の援助を受け、毎年、ギリシャ語／ラテン語・韻文／散文いずれをもおおよそするように努めている。また全国他大学ならびに諸外国の研究者にも随時、講演をお願いしている。2012～2013年度は、「クラシカル・セミナー」と称する研究会を、修士論文報告会などを含めて20回ほど開催し、世界的研究者の研究の最先端に触れるようにしている。さらに、2013年度からは「キャリア・セミナー」と称するセミナーを研究室主催で開催し、学部学生および院生のキャリア意識の向上に努めている。

2012年度 クラシカル・セミナー 全12回 報告数16本（うち外国人研究者6本）

第1回 2012年5月10日（木） 葛西康德「東京大学西洋古典学研究室クラシカル・セミナー 開講の辞」

第2回 2012年5月17日（木） 田作朋雄「古典学・聖書学についての若干の経験」

第3回 2012年5月24日（木） 安西真「最近の安西による『イリアス』論文から」

第4回 2012年6月28日（木） 葛西康德「From *pithanon* to 'Compliance and Defiance」

第5回 2012年7月5日（木） 野津寛（信州大学准教授）「アリストパネスの韻律論」

第6回 2012年7月12日（木） 修士論文中間報告会 友井太郎

第7回 2012年7月19日（木） 修士論文中間報告会 千葉慎太郎

第8回 2012年10月4日（木） 卒業論文準備報告会 岩田一郎 磯昌弘 本間友子

第9回 2012年12月13日（木） Dr. Lorenzo Amato (dept of Italian),

'The Origins of Florentine Humanism, and the Rediscovery of Greek'

第10回 2013年3月21日（木） Adele Scafuro, Professor of Classics, Brown University,

'Modern Scholarship and Ancient Comedy', 'Menander; Personal Address'

第11回 2013年3月23日（土）

Professor Adele Scafuro, 'The Economics of the Athenian Court System'

Professor Boudewijn Sirks (Oxford), 'Ought a life-annuity in a fideicommissum be returned? (Obs. Tum. 2528).'

第12回 2013年3月25日（月） Professor Adele Scafuro, 'Trial by Decree'

2013年度 クラシカル・セミナー 全9回 報告数15本（うち外国人研究者11本）

第1回 2013年5月1日（水）

Oswyn Murray (Oxford), 'The Western Tradition of Ancient History'

Penelope Murray (Warwick), 'Tragedy in Plato's Laws'

第2回 2013年6月7日（金）

Professor Douglas Cairns (Edinburgh) 'From Solon to Sophocles: Aspects of Intertextuality in the Antigone'

Dr. Orietta Cordovana (Berlin), 'The Arch of Marcus Aurelius and Lucius Verus in Oea and the Historia Augusta'

第3回 2013年6月21日（金） 友井太郎「プロペルティウス第2巻における恋愛と結婚」

田中夏恵「ヘレニズム時代後期のアポロン讃歌とその音楽の一考察」

第4回 2013年12月18日（水） 友井太郎「カトゥッルスと「恋愛詩」」

第5回 2014年1月10日（金） Prof. Dr. Sima Avramovic (Belgrade), 'Istor in Homer'

第6回 2014年2月4日（火） 泰田伊知郎（台湾義守大学副教授）「日本における古典ギリシャ語、ラテン語の受容の歴史」

- 第7回 2014年3月4日(火) Dr. Nigel Holmes (Munich, THLL), 'The Thesaurus Linguae Latinae: Making a Latin dictionary'
- 第8回 2014年3月22日(土)
Prof. Adele Scafuro (Brown) 'IG XII 4,1 no. 132: 'A Unique Text: The Settlement of Koan Foreign Judges for the Telians'
Prof. Ernest Metzger (Glasgow) 'The British Way of Doing Roman Law'
- 第9回 2014年3月24日(月) 14-18時
Prof. Adele Scafuro, 'The Ideology of Judging and Reconciling in Honorary Decrees for Foreign Judges'
Prof. Ernest Metzger 'Is it Possible to Sue a Slave?'
Prof. Graham Oliver (Brown University) 'War, Economy and Governance in Hellenistic Athens'

研究室紀要(査読つき)を年1回発刊している。2013年12月に第8号を刊行した。

この他、一種の課外活動として、東京大学本部「体験活動」プログラムの資金援助を受け、2012年度、2013年度に、オクスフォード大学クライスト・チャーチを主たる宿泊地として、「古典学とコモンロー」入門と称する、サマープログラムを実施した。参加者は大学院生を含めると、2012年度、2013年度とも、約20名を数える。学生はこのほか、各自のテーマを滞在中に研究し、最終発表会にてプレゼンテーションを行った。この試みの手ごたえは十分大きいので、今後も継続の予定である。

2012年度 東京オクスフォード・サマー・プログラム TOPS

参加者 学部生12名 大学院生5名 教員2名 オブサーバー1名 計20名

2012年8月3日(金)～20日(月)(17日間)

講師: Peter Parsons (Christ Church), Robert Parker (New College), Stephen Harrison (Corpus Christy), Neil Jones (Magdalene, Cambridge), Christopher Everett (Daiwa Foundation), Donald Cryan (High Court Judge), Gregory Durston (Kingston), Tom Cryan (Sollicitor), Gunter Martin (Bern), John Harris (Christ Church)、協力者: 納富信留(慶応義塾大学)、Wolfgang Ernst (Zurich), David Fox (St. John's, Cambridge)

2013年度 東京オクスフォード・サマー・プログラム TOPS

参加者 学部生12名 大学院生6名 教員 東京大学3名、他大学教員8名、他大学学生6名、計35名

2013年8月12日(月)～9月8日(日)(28日間)

集中講義講師: Classics: Christopher Metcalf (Wolfson), Samuel Slattery (Wolfson), Law: Eric Descheemaeker (Edinburgh), Simon Douglas (Jesus), Genevieve Helleringer (St. Catherine's), Stelios Tofaris (Girton, Cambridge)、

講演: Peter Parsons (Christ Church), Robert Parker (New College), Oswyn Murray (Balliol), John Harris (Christ Church), Gregory Durston (Kingston), Neil Andrews (Clare, Cambridge), Douglas Cairns (Edinburgh), Elisabeth Craik (St. Andrews), Mirko Canevaro (Edinburgh), Ernie Metzger (Glasgow)

なお、2013年度4月1日より、吉川斉が教務補佐員を務めている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

葛西 康德 ギリシア・ローマ法とその普及、法廷弁論、ギリシア宗教、西洋古典学継受史
(教授) 2011年度～

(2) 助教の活動

小池 登

在職期間 2012年度

研究領域 ギリシャ語韻文

主要業績

(他機関での講義等)

非常勤講師、共立女子大学、「ギリシャ語、ラテン語、文学」、2012年度

非常勤講師、首都大学東京、「西洋古典学演習(ギリシャ文学)」、2012年度

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「マールティアーリス『エビグランマタ』第 12 巻 18 判 25 行の *capillos* の問題について」

「紀元前 5-4 世紀におけるアッティカ方言の発音について」

「エウリピデスの『メディア』」

「ギリシア語のアクセントについての一考察」

2013 年度

「古代ローマの暦」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

田中夏恵「ヘレニズム時代後期のアポロン讃歌とその音楽の一考察」〈指導教員〉葛西康德

友井太郎「プロペルティウス第 2 巻における恋愛と結婚」〈指導教員〉葛西康德

2013 年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲) (乙)

なし

2013 年度

(甲)

吉田俊一郎「ワレリウス・マクシムス『著名言行録』の修辞学的側面の研究」

〈主査〉葛西康德 〈副査〉月村辰雄・逸身喜一郎・片山英男・大芝芳弘

(乙)

なし

18 フランス語フランス文学

1. 研究室活動の概要

本研究室は、テキストの綿密な読解を出発点とした、フランス語・フランス文学に関する教育・研究を担当している。ここでいう「フランス文学」が含意する作品の範囲は、言語および文学が社会の根幹に深く根ざしているフランスの伝統に即して、ひとり詩や小説にとどまらず、思想、宗教、歴史記述など、きわめて多岐にわたる。さらに近年ではテキストという概念の拡張にともなう、映画のシナリオや時事雑誌の記事など、研究対象は多様化の傾向にある。フランス語学研究についても、本研究室ではこうした文学研究の流れを受け、たんに文法的な側面ばかりでなく、文化的な諸状況における運用という側面からこれを捉える傾向にある。

研究室の専任スタッフは、教授4名、外国人教師（准教授）1名、助教1名であり、これに加えて毎年数名の非常勤講師を委嘱し、中世文学から現代フランス文学まで、また理論的なフランス語学研究からフランス人スタッフによる実践的な語学訓練まで、フランス語フランス文学のほぼ全領域をカバーする授業を提供している。

2013年度の大学院学生数は、修士課程12名、博士課程18名。近年の傾向として研究テーマには現代文学・思想を掲げる学生が増加している。大半は博士課程においてフランスやスイスの大学に留学し、博士論文提出資格（Master II）を取得。さらに博士論文を提出して博士号を取得する学生も少なくない。その一方、本研究科で課程博士論文を提出する学生も増加し、毎年2、3名が博士号を取得している。また専門的知識を生かし、修士課程修了後に新聞社、出版社等に就職する学生も増加している。

学部段階では教養学部からの進学生は毎年10名程度で、2013年度の学部在学学生は20名。前期課程教育の大綱化にともなうフランス語の必修単位の減少に配慮し、ティーチング・アシスタントの協力を得たヒアリング訓練の授業を設け、また他専修課程・他学部の学生に対しては「原典を読む」の枠内で講読授業を提供している。さらにフランス人スタッフによるフランス語授業は、週に大学院3コマ（「アカデミック・ライティング」を含む）、学部3コマ（非常勤講師担当の1コマを含む）が用意され、実践的なフランス語運用能力の向上を望む学生の求めに応じている。

研究面については、研究室スタッフが、日本フランス語フランス文学会をはじめとする各種の関連学会・研究会の組織・運営に積極的に関与している。研究室が運営の主体となる研究誌『仏語仏文学研究』は、年2回のペースで刊行されている。

国際交流については、パリとリヨンのエコール・ノルマル・シュペリウール（高等師範学校）およびジュネーヴ大学との間に学術交流協定を結び、それぞれ毎年1名の大学院学生の交換を続けている。ジュネーヴ大学とは2009年度より毎年1名の学部生交換も始まった。研究者の交流も盛んで、フランスのみならず各国からの研究者が研究室を訪問し、講義やセミナーをおこなっている。それらは他大学の研究者や大学院生、一般聴衆にも公開され、本研究室は日本におけるフランス文学研究のセンターの一つとしての責任を十分に担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 月村辰雄（フランス中世文学）
中地義和（ランボー、フランス近代詩）
塚本昌則（ヴァレリー、フランス20世紀文学）
野崎 徹（ネルヴァル、フランス19世紀文学）

(2) 助教の活動

2012-3年度

新田昌英（ニッタマサヒデ）

略 歴

2002年3月	東京大学文学部言語文化学科フランス語フランス文学専修卒業
2004年3月	大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻仏語仏文学専門分野修士課程修了
2010年3月	大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得満期退学
2011年3月	大学院人文社会系研究科にて博士（文学）学位取得
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教

研究対象 フランス近代文学・近代哲学

主要業績（論文）『Philosophie des sentiments – Une forme primordiale de la théorie des passions chez Alain』、『Études de langue et littérature françaises』、101、125-138 頁、2012.8
 「Repenser l'émotion, la passion et le sentiment chez Alain – dans le cadre de la lecture de ses premières œuvres」、『Revue de langue et littérature françaises』、2012.8
 「日本人への手紙—哲学者アランから戦後日本へ」、『仏語仏文学研究』、46、57-70 頁、2013.8
 （学会発表）国内、新田昌英、「反省哲学における心理学と形而上学—ラシュリエ・ラニョー・アランの場合」、日仏哲学会 2013 年春季大会、京都大学、2013.3.30
 （研究テーマ）文部科学省科学研究費補助金、研究活動スタート支援、研究代表者、「近現代フランスにおける哲学と心理学の関係」、2012～2013
 文部科学省科学研究費補助金、若手研究(B)、研究代表者、「近代フランスの感情研究」、2014～
 （他機関での講義等）非常勤講師、東京理科大学、「フランス語 I」、2013.4～2014.3

(3) 外国人教員の活動

マリアンヌ・シモン＝及川 (Marianne SIMON-OIKAWA)

略歴

1989 年 9 月 国立高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリユール）およびパリ第七大学入学
 1990 年 9 月 同大学にて仏文（現代文学）学士号、英文学学士号取得
 1991 年 9 月 同大学にて修士号取得（現代文学）
 1992 年 7 月 大学教育教授資格（アグレガシオン）取得
 1993 年 9 月 パリ第七大学にて DEA (PhD)取得（現代文学）
 1993 年 9 月－1995 年 8 月 東京大学研究生
 1995 年 9 月－1998 年 9 月 リール大学講師（現代文学）
 1996 年 9 月 パリ第七大学にて日本語学士号取得
 1997 年 9 月 同大学にて日本語修士号取得
 1999 年 12 月 パリ大七大学にて文学博士号取得（現代文学）
 1999 年 4 月－2005 年 4 月 早稲田大学非常勤講師（フランス文学）
 2000 年 9 月－2005 年 9 月 慶應義塾大学訪問講師（フランス文学）
 2000 年 4 月－2008 年 8 月 日仏会館客員研究員
 2006 年 10 月 東京大学准教授

研究対象 フランス文学と絵画；日仏両文化における視覚詩の伝統

主要業績

（著書）編著、マリアンヌ シモン＝及川、『絵を書く』、水声社、2012

共著、Marianne Simon-Oikawa et Carole Aurouet、『Poésie vivante – Hommage offert à Arlette Albert-Birot』、Champion、2012

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「ドゴールの言語表現とその影響力について」

「ボードレール論—詩的靈感としての酒」

「アルベール・カミュ『幸福な死』を読む—「幸福な死」の存否・正体・価値についての考察—」

「フローベールと沈黙」

Rousseau est mort. (ルソーは死んだ)

「エミール・ゾラ『ルゴーン・マッカール叢書』における「女性の幸せとは何か？」『愛のページ』、『生きる歓び』、『夢想』を中心として」

Une etude sur le concept d'Europe de Paul Valery. (ポール・ヴァレリーのヨーロッパ観の一研究)

2013 年度

「ジャン＝ジャック・ルソーの『告白』について」

「新聞小説としてのゾラ『ボヌール・デ・ダム百貨店』」

La notion de vertie dans "Les Confessions" (ルソー『告白』における真実の概念について)

「フローベール『感情教育』における恋と夢想—青年に働く「引力」を考える—」

「バルザック文献に見る 19 世紀フランス」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

浦浩平「バルザック『あら皮』に於ける現実と神秘の問題」〈指導教員〉月村辰雄

吉岡亮祐「アルベール・カミュ『最初の人間』—「探究」と創造の意味—」〈指導教員〉野崎敏

小高正行「ロベール・デスノスにおけるポエジーとラジオ」〈指導教員〉野崎敏

2013 年度

熊倉良子「ディドロにおける政治算術」〈指導教員〉野崎敏

岡崎麻由「視線と記憶—マルグリット・デュラス『ヒロシマ、わが愛』『ロル・V・シュタインの歓喜』をめぐって—」〈指導教員〉中地義和

西山直子「サルトルの文学作品における吐き気について」〈指導教員〉塚本昌則

藤井三千「ヴォルテールの哲学コントにおける女性」〈指導教員〉月村辰雄

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

なし

(外国の大学に提出された論文)

谷口円香、*Le pictural dans la poétique de Rimbaud* (パリ第 4 大学)

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

なし

(外国の大学に提出された論文)

浅間哲平、*Proust et les amateurs* (パリ第 7 大学)

志々見剛、*Les réflexions sur l'histoire dans les Essais de Montaigne* (ボルドー第 3 大学)

(乙)

なし

19 南欧語南欧文学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は1979年4月にイタリア語イタリア文学専修課程として発足、文学部の大講座制への移行に伴い、1994年4月より専修課程名が現在のものに改められた。さらに大学院の機構改革に伴って、本専修課程に直結する大学院レベルの専門分野名も1995年度以降、従来のイタリア語イタリア文学から南欧語南欧文学へと改称された。こうした一連の改称は、これまでのイタリア語イタリア文学の研究・教育に加え、南仏やイベリア半島・中南米のラテン系諸言語およびその文学をも、本専修課程ならびに大学院課程の専門分野における研究・教育の対象に取り込もうとする意図の現われにほかならない。目下のところ、新たに加わった分野を専ら担当する研究室所属の専任教員はいないが、94年度から学外非常勤講師等によるスペイン語スペイン文学関連の授業が開設され、専任教員によるロマンス語学の授業（学部・大学院共通）も年度により開講されている。また、2001年度からは中世オック語およびトゥルバドール文学がカリキュラムに加えられている。

2012～2013年度に本研究室に所属した専任教員は下記のように4名であるが、このほか毎年、学部および大学院の授業担当者として学内外から非常勤講師を数名招き、開設科目の充実を図っている。授業の中心をなすのは、旧専修課程時代以来、イタリア語イタリア文学であり、イタリア語の構造と歴史について、また中世から現代に至る様々な時代、様々なジャンルのイタリア文学についての講義・演習がなされるよう意を用いている。また、1994年以降、専任教員と博士課程在籍者を中心にして、研究室の紀要『イタリア語イタリア文学』を刊行している。

学生の専攻分野は古典文学、近現代文学、語学と様々である。本研究室の学生は、学部生のときから、夏期休暇などを利用してイタリア各地で開かれる語学研修に参加する者が多い。大学院在籍者の多くはイタリア留学中ないしは留学経験者である。

通常の研究・教育活動のほか、本研究室ではローマ大学ラ・サピエンツァ、フィレンツェ大学、ピサ高等師範学校、パドヴァ大学など東京大学と学術交流協定を締結しているイタリアの教育研究機関に所属する研究者等との交流も継続的に行なっている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教 授：長神 悟（イタリア語史・ロマンス語学）
教 授：浦 一章（イタリア13・14世紀文学）
准教授：Lorenzo Amato（ロレンツォ・アマート）（イタリア15世紀文学）
助 教：長野 徹（イタリア近現代文学・イタリア児童文学）

(2) 助教の活動

長野 徹
在職期間 1997年10月～現在
研究領域 イタリア近現代文学・イタリア児童文学
主要業績
(翻訳)
共訳、『イクバルと仲間たち』、小峰書店、2012.9
(他機関での講義等)
非常勤講師、共立女子大学国際学部、「基礎イタリア語（入門）」、2012.4～2013.3
非常勤講師、共立女子大学国際学部、「ヨーロッパ地域論（地中海）」、2012.4～2012.9
講演、イタリア文化会館、「エミリオ・サルガリ 人と作品」、2013.2

(3) 外国人教員の活動

Lorenzo Amato（ロレンツォ・アマート）
研究領域 15世紀のフィレンツェの文学、ヨーロッパへの印刷術の導入と文化変容
在職期間 2011年4月～現在
主要業績
(監修)
Domenico di Giovanni da Corella, *Teotocon*, Edizioni di Storia e Letteratura, 2012.10

(共著)

Come a Gerusalemme. Evocazioni, riproduzioni, imitazioni dei luoghi santi tra Medioevo ed Età Moderna, Sismel, 2013

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012年度

なし

2013年度

「ブリーモ・レーヴィにおける、アウシュヴィッツ体験を語る姿勢の変化について」

「フランチェスコ・ヨーヴィネの作品を通してみるイタリア南部問題」

「ナタリア・ギンズブルグ作品における《家》のもつ意味について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012年度

なし

2013年度

徳毛淑「『ある人生』を語る声—タブッキ『トリスターノは死ぬ』をめぐる考察」〈指導教員〉浦一章

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012年度

(甲) (乙)

なし

2013年度

(甲) (乙)

なし

20 英語英米文学

1. 研究室活動の概要

本学に英文学科が設置されたのは1887年であり、1893年には「英吉利語学英吉利文学」として講座化された。1962年にはこれに「アメリカ文学講座」が加わり、三講座となったが、1995年4月の改組に伴い「広域英語圏言語文化」大講座となった。100年の伝統をもった学科として、英語学と英米を中心とする英語圏文学（小説・詩・演劇など）の研究と教育にあたっており、そのカバーする領域は、イギリス中世から20世紀末の英語圏作品までと幅広い。現在、専任教員は教授3名、准教授3名、外国人客員教授1名、助教1名で、学内外から常時（「英語後期」や「アカデミック・ライティング」を含む）10名以上の非常勤講師を招いて、専任教員では扱いきれない分野を補っている。

毎年4月に教養課程から英語英米文学専修課程に進学してくる学部学生は、2年間の専門教育を踏まえ、大学生活4年間の総決算として、英語で30枚程度の卒業論文を執筆する。授業以外に、TAの大学院生、外国人客員教授および英語の非常勤講師の協力を得て、学部3年生を主に対象とした“英語漬け”の1日を体験する「イングリッシュ・キャンプ」も毎年開催されている。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会は、学部生・大学院生いろいろなレベルで常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムもある。本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職を目指して大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

大学院の修士課程には他大学からの志望者も多く、厳しい試験を経て入学し、本学出身者とともに博士論文研究に向け日々研鑽に励んでいる。大学院には専門に応じて、専任教員および学外の専門家をレフリーとする学術研究誌として、*Linguistic Research*（英語学）、*Reading*（イギリス系文学）、*Strata*（アメリカ文学）が、それぞれ年に1~2回ずつ刊行され、おおむね英語によって書かれた研究論文が掲載されている。これらの学術研究誌や各分野の学会誌に発表した研究を基盤として博士論文を人文社会系研究科に提出し、PhDの学位を取得した者はすでに8名輩出されている。

学会活動は、日本英文学会、日本アメリカ文学会、日本英語学会を中心に行われており、日本における英語学・英米文学研究の発展に中心的役割を果たしている。また、同窓会と卒業生の研鑽の場を兼ねた「東大英文学会」が古くから組織され、年1回の総会・講演会・懇親会が現在でも続いており、発行されている名簿の筆頭卒業生は夏目漱石である。

海外との研究交流も積極的に行なわれており、英米その他の大学の研究者の来日に際しては、他大学の研究者にも公開された講演会、セミナー等を開催することが多く、本学の教員・学生・院生が積極的に参加し、活発に討議を行い、日本の英語圏言語文化研究拠点として研究交流活動を行っている。近年では、大学院学生、特に博士課程在籍者がさまざまな団体からの奨学金を得るなどして英米の大学に留学し、MA、MPhil、PhDなどの学位を取得することが多く、すでにPhDの学位の取得者を30名以上は輩出している。わが国で教職につくものが大半であるが、中にはそのまま留学先の英米において職を得ているものもいる。ここ数年中国などからの外国人留学生・研究生も増えており、海外の大学との交流が活発になり、国際化した環境のもとで、教育・研究活動が展開されている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	平石 貴樹	HIRAISHI, Takaki	(アメリカ文学、2012年度まで)
教授	高橋 和久	TAKAHASHI, Kazuhisa	(イギリス文学)
教授	今西 典子	IMANISHI, Noriko	(英語学)
教授	大橋 洋一	OHASHI, Yoichi	(イギリス文学)
准教授	渡邊 明	WATANABE, Akira	(英語学)
准教授	阿部 公彦	ABE, Masahiko	(イギリス文学)
准教授	諏訪部 浩一	SUWABE, Koichi	(アメリカ文学)
客員教授	CLARK, Stephen		(イギリス文学)
助教	侘美 真理	TAKUMI, Mari	(イギリス文学、2012年度まで)
助教	稲田 俊一郎	INADA, Shunichiro	(英語学)

(2) 助教の活動

侘美 真理

著書・翻訳

『NHK ラジオ 英語で読む村上春樹: 世界のなかの日本文学』(共著、NHK 出版(ラジオテキスト 2013.4))、
発行年月日 2013 年 3 月 18 日

他機関での講義等

お茶の水女子大文教育学部非常勤講師、2012.4~2013.3

東京医科歯科大学医学部非常勤講師、2012.4~2013.3

稲田 俊一郎

論文

「比較構文における *d* 変項束縛と島の制約」『ことばとこころの探求』、148-162 頁、開拓社、2012.3

“On Binding of DP-internal Amount/Degree Variables,” *JELS* 29, pp.235-241, 2012

“On the Relativization of DP Adverbs,” *English Linguistics* 30: 1, pp.223-242, 2013.6.3

“Notes on a Hidden Pronoun Analysis of Circumvention Effects under Sluicing,” *Linguistic Research: Working Papers in Linguistics* 29, pp.123-131, The University of Tokyo English Linguistics Association, 2013.12

会議 (開催校委員)

「The English Linguistic Society of Japan 6th International Spring Forum 2013」、2013.4.28~2013.4.29

他機関での講義等

お茶の水女子大文教育学部非常勤講師、2013.4~2014.3

東京医科歯科大学医学部非常勤講師、2013.4~2014.3

(3) 外国人教員の活動

Stephen Clark

講演・学会発表

“Overcoming Cultural Difference: Jane Austen’s *Pride and Prejudice*,” plenary lecture, Jane Austen Society of Japan, Kansai University (2013)

“The Gaudy Dream of Empire”: European Dimensions of British Romanticism,’ JAFER Conference, Yasuda Women’s University of Hiroshima (2013)

編著書

Blake 2.0: William Blake in Twentieth-Century Art, Music and Culture, co-edited with Tristanne Connolly and Jason Whittaker, Plagrave (2012)

Digital Romanticisms, special issue of *Poetica* (79) (2013)

論文

“Only the Wings of his Heels” Blake and Dylan’ (co-written with James Keery), *Blake 2.0: William Blake in Twentieth-Century Art, Music and Culture*, pp.209-229, (2012)

“Visionary Forms Dramatic” in Blake and Baillie’, 『揺るぎなき信念 イギリス・ロマン主義論集』、彩流社 (2012)

“Forward,” *Philip Larkin’s Dichotomies* (2012)

“Blake’s Closet Drama,” in Bruder and Connolly (eds.), *Blake, Gender and Culture*, Pickering and Chatto, (2012)

“Something’s lost but Something’s Gained”: Joni Mitchell and Postcolonial Lyric,’ “Get Away from Me”: *Canadian Popular Music on American Culture*, Sophia University (2012)

書評

Review of Sally Bushell, *Text as Process: Creative Composition in Wordsworth, Tennyson, and Dickinson* 『イギリス・ロマン派研究』第 36 号 (2012)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

The Image of the House in Shakespeare's *King Lear*

(シェイクスピアの『リア王』における家のイメージ)

Comparison of Numerals and Several Quantifiers

(数詞と数量詞の比較)

Endgame of Dickens: Problems of self-awareness in *The Mystery of Edwin Drood*

(ディケンズの終盤戦：『エドウィン・ドルードの謎』における自己意識の問題)

The Sororal Bond in Jane Austen's *Sense & Sensibility*

(ジェーン・オースティン『分別と多感』研究)

The Core Poetics of William Carlos Williams: In Comparison with Ezra Pound

(ウィリアム・カーロス・ウィリアムズの詩学的核心—エズラ・パウンドとの比較—)

The Function of Reticence in *Persuasion*

(『説得』における無口の機能)

How to Create Free Choice Items

(自由選択表現の組成)

Japanese Literature Goes Abroad – English Translation & Publication of Recent Japanese Novels

(日本文学の発信—近年の日本の小説の英語翻訳と出版—)

Is Batman a Hero?: A Study of an American Hero in Christopher Nolan's *The Dark Night Trilogy*

(バットマンはヒーローなのか?—クリストファー・ノーランの『ダークナイト』3部作におけるアメリカン・ヒーローの研究—)

A Study of Judy Budnitz as Contemporary Jewish American Writer

(現代ユダヤ系アメリカ人作家 Judy Budnitz の作品研究)

Whatever You Say Say Nothing: Seamus Heaney's Politics in *North*

(とにかく本当のことは何も言うな—『北』におけるシェイマス・ヒーニーの政治)

A Study of *The Remains of the Day*

(『日の名残り』研究)

Tragedy of Anger: A Study of Anger in Shakespeare's *King Lear*

(怒りの悲劇：シェイクスピア『リア王』における怒りの考察)

2013 年度

Kabuki Adaptation of Shakespeare Drama: A Study of *Twelfth Night*

(歌舞伎版シェイクスピア—『十二夜』の研究)

Swan and Violence in Yeats's Poems

(イエイツの詩における白鳥と暴力)

Nineteen Eighty-Four and the Surveillance Society

(『1984』と監視社会)

Keats and Ambivalence - Poet's Conflicts in *The Fall of Hyperion*

(キーツと相反性—『ハイピャリエンの没落』における詩人の葛藤)

The Confession and Reenactment of Colonialism: a Reading of Charles Robert Maturin's *Melmoth the Wanderer*

(チャールズ・ロバート・マチューリン『放浪者メルモス』におけるコロニアリズムの告白と再演)

Adnominal Intensifiers in Japanese and English

(日本語と英語における名詞に付随する強調語)

Naming in T. S. Eliot's *Old Possum's Book of Practical Cats*

(T. S. Eliot の『ポッサムおじさんの猫と付き合う法』における名付け)

The Image of the Body in John Donne's Poem

(ジョン・ダンンの詩における身体イメージ)

Representation of Femininity in *Hamlet*

(『ハムレット』における女性性の表象)

The Character of Satan

(サタンのキャラクター分析)

Metamorphoses of Fairies: From Shakespeare to Tolkien

(妖精の変貌—シェイクスピアからトールキンまで)

Lives of Women: A Study of *The Great Gatsby*

(女性の人生～『華麗なるギャツビー』の研究～)

Cinema and Literature: A Study of Two Versions of *The Painted Veil*

(映画と文学—『五彩のヴェール』研究)

The Structure of Repression in the Works of Kate Chopin

(ケイト・ショパン作品における抑圧の構造)

The Role of Charlotte Lucas in *Pride and Prejudice*

(自負と偏見におけるシャーロット・ルーカスの役割)

The South, Father, and Mother: on Quentin Compson in *The Sound and the Fury*

(南部、父、母:『響きと怒り』におけるクエンティン・コンプソン)

William Blake's Obsession with Innocence in Women

(女の純真さに執着するウィリアム・ブレイク)

"In This Harsh World Drew Thy Breath In Pain, To Tell My Story": A Study of Playwright, Play and Memory in *Hamlet*

(「このひどい世界で、苦しい息をつきながら、俺のことを語り伝えてくれ。」『ハムレット』における劇作家、芝居、記憶の研究)

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

斎藤悠樹 Metamorphosis of Fame

〈指導教員〉阿部公彦

丸谷徳嗣 The Ethics of William Faulkner's *Go Down, Moses*

〈指導教員〉諏訪部浩一

井上和樹 The Development of the Repetitive Style in T. S. Eliot: Disease, Religion and Narration

〈指導教員〉阿部公彦

平田佳子 The Disguise of a Heroine in *Pamela*, *Evelina*, and *Pride and Prejudice*

〈指導教員〉高橋和久

2013 年度

山本毅雄 Kenneth Rexroth's Prosody

〈指導教員〉阿部公彦

雨宮迪子 Beyond the Mother-child Love: The Gothic and the Real in William Faulkner's *Absalom, Absalom!*

〈指導教員〉諏訪部浩一

鞠子和子 The Gulling of Malvolio: Shakespeare's *Twelfth Night* in Its Historical Context

〈指導教員〉大橋洋一

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲) (乙)

なし

2013 年度

(甲)

宮下治政 *Historical Change in the Formal Licensing Conditions of Personal Pronominal Objects in English: A View from Intra-syntactically Driven Language Change*

(英語における人称代名詞目的語の形式的認可条件の歴史的变化—統語部門内で駆動される言語変化からの見解)

(主査) 今西典子 (副査) 渡邊明・長谷川欣佑・児馬修・田中智之

(乙)

なし

2 1 ドイツ語ドイツ文学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

ドイツ語ドイツ文学研究室では、中世から今日までの、ドイツ語圏の叙事詩、抒情詩、散文作品、演劇、批評、文芸学、思想等のテキストを対象とする研究・教育、および、ドイツ語学（歴史文法と現代言語学）の研究・教育をおこなっている。

(2) 専攻としての活動

両年度の大学院兼任・非常勤教員による講義・演習・特殊研究のテーマは、次のとおりである。

2012 年度

「Schreiben für die Zukunft. Kleists Werk als Antwort auf die politische Krise nach 1800」

「Menninghaus の『Das Versprechen der Schönheit』を読む」

「ドイツ語のしくみと教え方」

「ローベルト・ヴァルザーの散文を読む — Der Spaziergang を中心に」

2013 年度

「20 世紀のドイツ散文」

「19 世紀のドイツ短編物語を読む」

「世紀転換期ウィーンにおける『言葉』のイメージ」

「現代ドイツ文学 — Thomas von Steinaecker と Durs Grünbein」

また各教員による通常の研究・教育活動のほか、専任スタッフと博士課程の学生全員が参加する博士課程コロキウム（学修）の時間をもうけ、博士課程の学生の研究発表と討論を行なっている。

(3) 研究室としての活動

研究論文誌として年 2 号発行している『詩・言語』は、2012 年度には 77 号・78 号が、2013 年度には 79 号が発行された。

科学研究費補助金関係では、2010 年度から 3 年間にわたり交付を受けている研究「ヒューマン・プロジェクト：人間学の文化史的視点からの再構築」（基盤研究（B）、研究代表者大宮勘一郎）は、2012 年度で研究を終了した。

「情動と技術の人間学的考察（ドイツ文学の場合）」（基盤研究（C）、研究代表者大宮勘一郎）は、2013 年度から 3 年間の予定で交付を受け、研究継続中である。「初期資料から見るルターの思想構造」（基盤研究（C）、研究代表者松浦純）は、2011 年度から 3 年間の研究を、2013 年度で終了した。

専門学会である日本独文学会には、専任スタッフの何人かが理事会や機関誌編集委員会などに加わることが通例となっている。2011、12 年度には、宮田眞治が理事・機関誌編集委員およびドイツ文化ゼミナール実行委員長をつとめた。さらに、宮田眞治と大宮勘一郎は 2013 年度からの理事職（任期 2 年）をつとめている。また宮田眞治は 2008 年度より 2013 年度まで日本シェリング協会理事・機関誌編集長の任にあった。

(4) 国際交流の状況

国際交流としては、各教員の海外出張のほか、例年ドイツ語圏の作家や研究者を招いて講演会を開催している。これらの講演会や研究会は、他大学の学生や研究者にも公開している。

2012 年度

Steffen Höhne 教授（Hochschule für Musik FRANZ LISZT Weimar）：Franz Kafka — Wirkung, Wirkungsverhinderung, Nicht-Wirkung in Mittel- und Ostmitteleuropa （2013 年 1 月 24 日）

2013 年度

Uwe Wirth ギーセン大学教授：Nach der Hybridität: Kultur als Pflanzung, Pflanzung als Kulturmodell （2013 年 4 月 4 日）

Albrecht Classen アリゾナ大学教授：Glaube, Medizin und Heilung im Mittelalter （2013 年 6 月 27 日）

Dietmar Goldschnigg グラーツ大学教授：Karl Kraus und die Pragerdeutsche Literatur（2013 年 11 月 12 日）

また大学院の学生の多くがドイツ、オーストリア、スイスへ留学している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授： 松浦 純 中近世ドイツ語ドイツ文学

教授： 重藤 実 ドイツ語学

教授： 大宮勘一郎 近現代ドイツ文学

准教授： 宮田 眞治 近現代ドイツ文学

准教授： Keppler-Tasaki Stefan 近現代ドイツ文学（2012年10月より）

(2) 外国人教員の活動

准教授 Keppler-Tasaki Stefan

在職期間 2012年10月1日～現在

主要業績

(著書)

–Dirk Kemper, Stefan Keppler-Tasaki, 『Akten des XII. Internationalen Germanistenkongresses Warschau 2010. Hg. v. Franciszek Gruzca. Bd. 6.』, Peter Lang, 2012

–Mathias Herweg, Stefan Keppler-Tasaki, 『Rezeptionskulturen. 500 Jahre literarischer Mittelalterrezeption zwischen Kanon und Populärkultur.』, De Gruyter, 2012.2

–Stefan Keppler-Tasaki, Elisabeth K. Paefgen, 『Was lehrt das Kino? 24 Filme und Antworten. München』, edition text + kritik, 2012.11

–Stefan Keppler-Tasaki (Hrsg.), 『Massen und Medien bei Alfred Döblin. Internationales Alfred-Döblin Kolloquium Berlin 2011.』, Peter Lang, 2013

(論文)

–「Ra-ta-ta für Bonny & Clyde etc.」, 『Rolf Dieter Brinkmann. Seine Gedichte in Einzelinterpretationen. Hg. v. Gunter Geduldig u. Jan Röhnert.』, Band I, 205-215 頁, 2012.4

–「Prussian Anglophilia: Gustav Freytag, Vicky and the Kaiser」, 『German Life and Letters』, Volume 65, Issue 4, 421-438 頁, 2012.10

–「Crisis Discourse and Art Theory: Richard Wagner's Legacy in Films by Veith von Fürstenberg and Kevin Reynolds」, 『The Medieval Motion Picture: Filming the Popular Past.』, 107-128 頁, 2014.3

(書評)

–Günter Saße, 『Auswander in die Moderne. Tradition und Innovation in Goethes Roman 'Wilhelm Meisters Wanderjahre'』, Stefan Keppler-Tasaki, 『Arbitrium』, Band 30 (2012), Heft 3, 346-352 頁, 2012.12

(解説)

–『Alfred Döblin: Wadzeks Kampf mit der Dampfturbine』, 363-391 頁, 2013.1

(マスコミ)

–「Seit "Dracula" hat die Angst einen Namen [zum 100. Todestag von Bram Stoker]」, 『Sendeplatz "Echo der Zeit"』, Schweizerischer Rundfunk (SR-DRS 1), 2012.4.20

–「Gerhart Hauptmann. Rebell und Repräsentant」, sat 3, 2012.11.10

(他機関での講義等)

–インターユニ・ゼミナール（ドイツ語・ドイツ文化ゼミナール）, 「Stimmen der Bürger」, 2013.8

–特別講演、ドイツ騎士団博物館（Deutschordensmuseum）, 「Wenn sich Abgrunds Geister regen - Hans Heinrich Ehrler im Nationalsozialismus」, 2014.3

(学会)

–国内、日本独文学会、機関紙編集委員（文学・文化部門）、2013.7～

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012年度

「『ラトノー砦の狂える傷病兵』における誤解と機能」

2013年度

「ガイノイドとしてのミニヨン—『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』における境界・神話・疎外」

「心態詞 doch の意味機能について」

「レッシング『エミーリア・ガロッティ』の女性たち」

「ヨアヒム・ハインリヒ・カンペによる言語純化の取り組みについて」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

河北千尋「クラウス・マンの『転回点』(幼年時代の神話から戦争まで)における父子の関係、死、空想と現実について」〈指導教員〉宮田眞治

堀弥子「ドイツ語の相関詞に関する考察」〈指導教員〉重藤実

小俣登糸美「匿名作者ヴェロニカの物語—E.T.A.ホフマンの『黄金の壺』—」〈指導教員〉宮田眞治

脇田淳「ドイツ語の「名詞化文体」(Nominalisierungsstil)と名詞結合価の実現について」〈指導教員〉重藤実

清水恒志「E.T.A.ホフマン『牡猫ムルの人生観』の研究—「猫」の教養小説—」〈指導教員〉大宮勘一郎

八木頼子「イルゼ・アイヒンガー『より大きな希望』における母の不在と語りの形成」〈指導教員〉宮田眞治

2013 年度

平井涼「初期ベンヤミンにおける理論構造の生成と源泉」〈指導教員〉宮田眞治

五島萌「テオドル・フォンターネ『エフィ・ブリースト』における近代化の不安」〈指導教員〉大宮勘一郎

沼田卓哉「トーニオ・クレーガーの帰郷」〈指導教員〉大宮勘一郎

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲) (乙)

なし

2013 年度

(甲)

小野間亮子「ホーフマンスタールの文学における中心と「中心点」—後期作品を中心として—」

〈主査〉宮田眞治 〈副査〉松浦純・重藤実・大宮勘一郎・山口裕之

前田佳一「損傷の書物—インゲボルク・バッハマン『フランツァ書』におけるフラグメント性について」

〈主査〉宮田眞治 〈副査〉松浦純・重藤実・大宮勘一郎・山本浩司

(乙)

なし

2 2 スラヴ語スラヴ文学

1. 研究室活動の概要

東京大学文学部にロシア語ロシア文学講座が設けられたのは 1972 年（昭和 47 年）、東京大学が創設されてのち約 100 年後のことである。まだ比較的若い専修課程であるが、それまで東京外国語大学、早稲田大学など限られた大学でしか行われていなかったロシア研究に新風を吹き込んだ。大学院の修士課程・博士課程は 1974 年度に設置されたが、すでに 32 名の課程博士を世に送り出している。1994 年度から学部はスラヴ語スラヴ文学専修課程に、また 1995 年度の大学院の部局化にともない、大学院も欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ語圏言語文化専門分野に改称された。スラヴ圏の言語と文学に関する研究と教育を発展させることを課題とし、日本におけるスラヴ語スラヴ文学の研究と教育の重要な拠点として幅広くスラヴ諸地域の言語文化に関する諸問題を扱っている。

現在の教員数は教授 2 である。ほかに他専門分野教員、総合文化研究科教員と非常勤講師の協力も得て、スラヴ語学、スラヴ語史、ロシア文学（詩、小説、演劇、批評）、また旧ユーゴ圏の言語文化、ポーランド、チェコ、ブルガリアなどスラヴ語スラヴ文学に関する研究・教育が行われている。今後、スラヴ諸地域の研究者との交流や学生の留学などを拡充し、国際レベルでのスラヴ語スラヴ文学研究に貢献する人材を育成することをめざす。

現在、学部学生 2 名、大学院修士課程院生 1 名、博士課程院生 9 名が在籍しており、うち 1 名がロシアに留学中である。

研究室では研究年報『SLAVISTIKA』を発行しており、2012 年度と 2013 年度にはそれぞれ第 28 号と第 29 号が刊行された。これは教員、大学院生および学部学生の日頃の研究勉強成果を発表する場であるが、社会の様々な分野で活動する卒業生と研究室を結ぶ場としての役割も果たしている。

東京大学スラヴ研究室は毎年多くの若い専門家たちを国内外の学会、研究会活動に参加させており、日本のスラヴ学、ロシア文学の一翼を担ってきた。それらの活動の運営に関しても積極的な役割を果たしているといえるだろう。また現在、東京大学はポーランドのワルシャワ大学、セルビアのベオグラード大学、国立ロシア人文大学と交流協定を結んでいるが、本研究室はそうした諸大学との交流事業においても中心的な役割を担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

長谷見一雄	ロシア・ポーランド文学
金沢美知子	ロシア文学・ロシア文化
沼野充義	ロシア・ポーランド文学
三谷恵子	スラヴ語学

(2) 助教の活動

乗松享平	
在職期間	2010 年 4 月～2013 年 3 月
研究領域	ロシア文学・思想
主要業績	「ユーリー・ロトマンの文化記号論における「ロシア」の単数性と複数性」、『ロシア語ロシア文学研究』第 43 号、日本ロシア文学会、2011、35-42 頁 「真実は何の数だけある？：ロシア・メディアのなかのチェチェン戦争」、野中進、三浦清美、ヴァレリー・グレチュコ、井上まどか編『ロシア文化の方舟：ソ連崩壊から二〇年』、東洋書店、2011、283-290 頁
(翻訳)	レフ・トルストイ『コサック：1852 年のコーカサス物語』、光文社、2012、全 377 頁
(学会発表)	国際、「「ロシア」の「曖昧」な境界をどう論じるか」、ロシアの国内植民地化、パッサウ大学（ドイツ）、2010.3.23 国際、「ロシア作家のコーカサス物語における改宗」、中東欧研究国際評議会、ストックホルム市会議センター（スウェーデン）、2010.7.27 国内、「ユーリー・ロトマンの記号論における「ロシア・ソヴィエト」」、日本ロシア文学会、熊本学園大学、2010.11.6 国際、「バフチン、ロトマン、ロシアのポスト記号論派における多言語主義の場所」、文化的多言語主義、タルトゥ大学（エストニア）、2012.2.29

- (受賞) 国内、表象文化論学会奨励賞、表象文化論学会、2010
国内、日本ロシア文学会賞、日本ロシア文学会、2011
(他機関での講義等) 非常勤講師、首都大学東京、「ロシア語Ⅰ・ロシア語Ⅱ」、2010.4～
非常勤講師、千葉大学、「人文科学の現在Ⅳ」、2010.4～2010.9

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「シヨスタコーヴィチの『日本歌人の詩による 6 つのロマンス』—作品とその意義—

2013 年度

「亡命作家エゴン・ホストフスキーの「ミステリー小説」の現代の視点からの再評価」

「『キング、クィーンそしてジャック』におけるナボコフの芸術的手法について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

宮島龍祐「ヨルダン・ラディーチコフ作『馬の思い出』の作品論」〈指導教員〉沼野充義

張忱 Incompatibility Between Polyphony and Heteroglossia: A Comparison of the Author-Hero Interrelations
in Light of Prosaics 〈指導教員〉金澤美知子

2013 年度

田子卓子「ブーニンの小説『スホドール』の作品研究—「語り」による物語の多層性—」〈指導教員〉金澤美知子

徳弘康好「カザコフとその時代—晩年の作品における自己と他のテキストの相互関係—」〈指導教員〉沼野充義

林由貴「ブーニン亡命前散文における旅人表象の解釈—ベルジャーエフの世界観を手掛かりに—」〈指導教員〉金澤
美知子

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

中野幸男「記憶と表象—シニャフスキー／テルツにおける地下文学・収容所・亡命—」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉金澤美知子・西中村浩・安岡治子・諫早勇一

(乙)

服部文昭「ロシア語史研究における『アルハンゲリスク福音書』の意義—文章語の萌芽ならびに日用語
(живаяречь) の資料として—」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉金澤美知子・佐藤純一・岩井憲幸・金田一真澄

2013 年度

(甲)

小松佑子「チャイコフスキイのオペラ『マゼーパ』研究—プーシキン叙事詩『ボルタヴァ』とオペラの美学—」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉金澤美知子・安岡治子・伊東一郎・森田稔

安達大輔「痕跡を生き直す：ゴーゴリの記号システムにおける反省の諸問題」

〈主査〉金澤美知子 〈副査〉沼野充義・望月哲男・石川達夫・番場俊

(乙)

なし

2 3 現代文芸論

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

現代文芸論専修課程（略称「現文」）は、2006年度まで存在した「西洋近代語近代文学専修課程」（略称「西近」）を発展的に引継ぎ、新たな研究室として2007年度に発足した。「西近」は、ひとつの言語・国の枠内にとどまることなく、西洋の近代文学・語学を広く学ぶことを奨励するとともに義務付けた専修課程であったが、「現文」はその精神を受け継いでいる。

初年度は専任教員2名と助教による体制でスタートし、「西近」時代にはなかった専用の共同研究室を確保するとともに、事務補佐員を採用して事務・運営体制を整えた。また学部課程に加えて大学院課程が新たに設けられ、学部での研究をさらに発展させ深めることが可能になった。

西洋近代の文学・語学を広く学ぶという基本姿勢のいわば裏返しとして、留学生が西洋のバックグラウンドから日本語・日本文学を研究することも奨励し、実際に2007年からそのような目的を持つ留学生が毎年のように大学院に入学している。また日本研究・比較文学研究に携わる外国人研究員、外国人研究生も積極的に受け入れている。

専任教員および助教は、広域英語圏、広域スペイン語圏、ロシア東欧、現代日本などの様々な領域の研究・教育に従事しており、世界の文学を幅広くカバーしているが、研究・教育は地域的なアプローチに限定せず、むしろ様々な地域間を越境・横断するような「世界文学」「翻訳」「批評」などの視点に重点を置いて、教員や研究者、大学院生・学生などの間の意見交換、討論、交流を活発に行っている。また、専任教員の論文の他、研究活動に関わる若手研究者・大学院生などの寄稿を得て現代文芸論研究室論集『れにくさ』を刊行している（2009年創刊、ほぼ年刊で発行。2014年3月には第5号「特集 北アメリカの文学 柴田元幸教授退官記念号」を発行した）。

非常勤講師による授業も、イディッシュ語、ポーランド語などの外国語をはじめ、表象文化、言語理論、幻想文学、翻訳論など、現代文芸論の理念にそった多彩な内容を提供し、当専修課程以外の学生も多数受講している。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2007年の創設時にスタートした大学院は、その後学内外から順調に学生を集め、毎年平均して修士課程に6名程度、博士課程に3～4名程度の大学院生が入学している。また外国からの留学生も積極的に受け入れている（国費留学生を含む）。これらの学生のバックグラウンドは多様であり、出身国はロシア、ウクライナ、スロヴァキア、ポーランド、ブルガリア、アメリカ合衆国、イギリス、ベネズエラ、中国、韓国、シンガポール、カザフスタンなど、多岐にわたる。そのことも刺激となって、学生相互の交流はさわめて盛んである。

(3) 研究室としての活動・国際交流活動

科研費研究「グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成」（基盤B、平成20年度～24年度）は、現代文芸論研究室の専任スタッフ全員が参加する研究プロジェクトであり、当研究室の研究活動の中心に位置づけられる。この資金を活用して、一連のシンポジウムや特別講義などを行ってきた。最後に5年間にわたる研究の総まとめとして2013年3月2・3日に東京大学で100名以上の内外の研究者を集め、国際会議「グローバル化時代の世界文学と日本文学—新たなカノンを求めて」を開催した（日本学術振興会国際研究集会助成）。この会議では、現代日本文学、世界文学の概念、翻訳論、ラテンアメリカ文学、越境と混成、現代ロシア中欧文学などをめぐる様々な主題を集中的に討議した。

平成25年度からは、新たな科研費研究「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」（基盤A、平成25年度～29年度の予定）を、現代文芸論研究室が中心となってスタートさせ、旧ソ連・中東欧地域の文学・文化に新たな現代的視点からアプローチする共同研究プロジェクトに取り組んでいる。

上記国際会議以外に研究室が主催・共催した主な学術・文学イベントを以下に挙げる。

2012年度：記録映画上映と特別講演「ヤドヴィガ・ロドヴィッチ＝チェホフスカ作創作能『調律師—ショパンの能』」（講師ロドヴィッチ＝チェホフスカ駐日ポーランド大使、5月7日）、アレン・マクダフィー博士特別講義「Dickens: Energy and the Novel」（6月18日）、アブラハム・イエホシュア特別講義「The Non-Literary Reality of the Novelist in Israel」（10月9日）、沼野充義・都甲幸治公開対談「世界文学の始まりとしてのアメリカ」（JPIC、光文社と共催、10月4日）、講演会・シンポジウム「ミハイル・シーシキン氏を迎えて——ロシア文学の意味：時空を超えて響く声」（パネリスト：シーシキン、島田雅彦、松永美穂、沼野充義、11月2日）、デンニツァ・ガブラコヴァ博士特別講義「世界文学と＜雑草＞」（11月12日）、マリオ・ピエドラ教授特別講義「キューバと日本映画」（11月13日）、シンポジウム「ブルーノ・シュルツのタペ」（パネリスト：和南城愛理、久山宏一、沼野充義、加藤有子、12月14日）、野谷文昭教授最終講義「深読み、裏読み、併せ読み——ラテンアメリカ文学はもっと面白い」

(2月1日)、多和田葉子特別講義「母語の外に出る旅 進化する翻訳」(2月19日)、第1回東京国際文芸フェスティヴァル・シンポジウム(講師:ジュノ・ディアス、綿矢りさ、ニコール・クラウス、川上未映子、マイケル・エメリック他、3月1日)、シンポジウム「中欧文学のタベ——トカルチュク、アイヴアス、山崎佳代子を迎えて」(3月2日)。

2013年度: ユーリイ・レヴィング教授特別講義「ナボコフ、『プレイボーイ』と1960年代のアメリカ」(5月7日)、福沢啓臣博士特別講義「大江文学における素材としての人物と出来事 ベルリンの大江健三郎」(6月3日)、エヴァ・パワシュニルトコフスカ(ワルシャワ大学教授)特別講義「遠くて近い?——ポーランドと日本の友好関係の源泉」(6月14日)、博士号取得記念特別講義: 亀田真澄「五カ年計画のメディア・イメージ——ソ連とユーゴの比較」(7月8日)、シンポジウム「観てから読むか、読んでから観るか」(パネリスト: 辻原登、野崎敏、諏訪部浩一、沼野充義、7月13日)、シンポジウム「すべての言葉は翻訳である——現代ロシア文学 翻訳の最前線から」(日本ロシア文学会と共催、パネリスト: 中村唯史、松下隆志、奈倉有里、高柳聡子、上田洋子、毛利公美、坂庭淳史、前田和泉、乗松享平、松永美穂。司会: 沼野恭子、11月1日)、プリシラ・メイヤー博士特別講義(ウェズリアン大学)「Vladimir Nabokov and Virginia Woolf」(11月11日)、トークと詩の朗読「セルビアと日本 響き交わす現代詩」(ゲスト: 山崎佳代子、ヴォイスラヴ・カラノヴィッチ、ドゥシコ・ノヴァコヴィッチ。司会: 加藤有子、亀田真澄、11月15日)、ナタリヤ・チャリソヴァ(ロシア国立人文大学教授)特別講義「ロシアのオマル・ハイヤーム」(11月22日)、金春美(高麗大学付属日本研究センター翻訳院院長)特別講義「韓国人にとって日本文学とは何か」(12月2日)、カリネ・カラミヤン(ロシアアルメニア大学教授)特別講義「若者言葉の国際比較——ロシア語を中心に、日本語、アルメニア語と比較しながら」(12月6日)、マウゴジャータ・サディ(現代美術キュレーター)特別講義「Franciszka and Stefan Themerson- Versatile Avant-Garde Artists」(コメント: 鴨治晃治、12月13日)、セルゲイ・ウシャーキン(プリンストン大学教授)特別講義「The Art of Not Saying Things: History as Texture——現代クルグズ映画の分析を通して」(12月16日)、シンポジウム「こどもの文学? おとなの文学? ~ロシアの児童文学作家グリゴリー・オステルを迎えて」(パネリスト: 青山南、ひこ・田中、毛利公美、12月21日)、加須屋明子(京都市立芸術大学准教授)特別講義「存在へのアプローチ——ポーランド現代美術への誘い」(1月24日)、柴田元幸教授退職記念イベント「世界文学朗読会」(3月31日)。

海外の大学との学術交流: 東京大学と学術交流協定を結んでいるワルシャワ大学との交流は、現代文芸論研究室の教員が世話役となって実施しており、主として大学院生の交換を行っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授: 野谷文昭(ラテンアメリカ文学。2013年3月退職)

教授: 柴田元幸(アメリカ文学、広域英語圏文学。2014年3月退職)

教授: 沼野充義(ロシア東欧文学、世界文学へのアプローチ)

准教授: 柳原孝敦(ラテンアメリカ文学・芸術・思想。2013年10月着任)

(2) 助教の活動

加藤有子

在職期間 2010年4月~2014年3月

研究領域 ポーランド文学・文化、表象文化論

主要業績

著書

共著、塩川伸明・小松久男・沼野充義編、『ユーラシア世界—第二巻ディアスポラ論』、東京大学出版会、2012

単著、加藤有子、『ブルーノ・シュルツ—目から手へ』、水声社、2012.4

共訳、ピーター・M・デイリー編、伊藤博明監訳、『エンブレムの宇宙—西欧図像学の誕生と発展と精華』、ありな書房、2013.11

編著、共著 加藤有子、『ブルーノ・シュルツの世界』、成文社、2013.11

論文

「A könyv mint az írás és a rajz toposza: Bruno Schulz illusztrációi a Szanatórium a Homokóráhoy című kötetében」、『Balkon (Budapest, Hungary)』、7/8, 2012、pp. 56-59、2012

「物語／歴史の操作——ジョナサン・サフラン・フォアの小説の視覚的要素」、『れにくさ』、3号、226-242頁、2012.3

「辺境からの世界地図—20世紀ガリツィアの作家が描く世界／アメリカ／ヨーロッパ（デボラ・フォーゲルとアンジェイ・スタシエク）」、『シンポジウム「世界文学におけるオムニフォンの諸相」報告記録集』1、37-54頁、2013.3

「顔のない肖像画—ナボコフ「ラ・ヴェネツィアーナ」」、『れにくさ』、5-1、133-147頁、2014.3

学会発表

国内、「両大戦間期ポーランド文学とドイツ文学」、日本スラヴ学研究会発足記念シンポジウム、2012.6.23

国内、「両大戦間期ガリツィアの文芸界とユダヤ人」、シリーズ「ユーラシア世界」刊行記念シンポジウム「ユーラシア研究の新しい地平」、東京大学、2012.7.16

国際、「Book as a New Genre: The Book Illustrations and Bookplates of Bruno Schulz」、Third Biannual conference of the European Network for Avant-Garde and Modernism Studies (EAM)、ケント大学（イギリス）、2012.9.8

国際、「Bruno Schulz i morfologia Goethego. Motyw transformacji w prozie Schulza」、INTERNATIONAL CONFERENCE „BRUNO SCHULZ AS A PHILOSOPHER AND THEORETICIAN OF LITERATURE」、ドロホビチ教育大学（ウクライナ）、2012.9.11

国際、「Bruno Schulz's Manipulation of Myths: “The Age of Genius”」、Bruno Schulz, 1892-1942: Interdisciplinary Reassessments、University of Chicago、2012.11.19

国際、「The Representation of Hands in Schulz and Rilke」、Schulz lu et interprété en Europe Centrale: entre modernisme et modernité. Poétique, réception, regards croisés、INALCO, Paris、2013.3.21

国内、「ポーランド・ウクライナ国境地帯の文学・美術と境界—ユダヤ人の動きを軸に—第二次世界大戦以前の国境地帯の文化遺産をどう語るか」、ロシア東欧学会第42回研究大会、2013.10.5

研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、代表者、「大戦間期ガリツィアのポーランド系ユダヤ人作家、画家の芸術思想的系譜とモダニティ」、2011～

文部科学省科学研究費補助金、分担研究者、「東欧文学における「東」のイメージに関する研究」、2012～
文部科学省科学研究費補助金、分担研究者、「グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成」、2010～2013

文部科学省科学研究費補助金、分担研究者、「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」、2013～2014

受賞

第四回表象文化論学会賞、表象文化論学会、2013.6.29

所属学会

ロシア・東欧学会、日本スラヴ学研究会

European Network for Avant-Garde and Modernism Studies Schulz/Forum、表象文化論学会

(3) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

沈俊（南京・三江学院助教授）、研究題目「安部公房研究」、2012年10月～2013年9月。

アレクサンドル・メシチェリャコフ（ロシア国立人文大学教授）、研究題目「日本文化における自然」、2012年10月～2012年11月（国際交流基金日本研究フェロー）。

マリヤ・トロピギナ（ロシア科学アカデミー東洋学研究所上級研究員）、『無名抄』の研究。2012年11月。

エヴァ・パウシュ＝ルトコフスカ（ワルシャワ大学教授）、研究題目「第二次世界大戦以後の日本・ポーランド関係史」、2012年12月～2013年6月（国際交流基金日本研究フェロー）。

イルメラ・ヒジャ＝キルシュネライト（ベルリン自由大学教授）、「日本における世界文学の概念」、2013年3月。

ロムアルド・フシチャ（ワルシャワ大学・ヤギェロン大学教授）、研究題目「日本語・ポーランド語大辞典編纂のための資料調査・分析」、2013年7月～8月。

ヤロスワフ・A・ペトロフ（ワルシャワ大学助教授）、「日本語・ポーランド語大辞典編纂のための資料調査・分析」（ロムアルド・フシチャ教授との共同研究）、2013年7月～8月。

バルトシュ・T・ヴォイチェホフスキ（ヤギェロン大学助教授）、研究題目「日本語・ポーランド語大辞典編纂のための資料調査・分析」（ロムアルド・フシチャ教授との共同研究）、2013年7月～8月。

デンニツァ・ガブラコヴァ（香港城市大学助教授）、「日本におけるポストコロニアリズムの受容と翻訳の役割」、2013年7月～8月。

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「崩壊する対話～マヌエル・プイグの *Eternal Curse on the Reader of these Pages* における対話の叙述について～」

「初期の北園克衛とフランス文学」

「別役実とベケットー ゴドーがやって来るまで」

「Tess of the D'Urbervilles と Effi Briest の比較考察—テスの主体性を中心にして—」

「遊戯としての小説—ジェール・ヴェルヌ『カルパチアの城』におけるゴシック性」

「夢見る町のコルタサル—「街」「高速道路」「地下鉄」「革命」をめぐる—」

2013 年度

「ゴーゴリ『肖像画』における方法意識」

「イタロ・カルヴィーノの见えない世界」

The figures of America in the short stories of Donald Barthelme（ドナルド・バーセルミの短篇作品におけるアメリカの諸形象）

Alternate Reality : A Study of Philip K.Dick's *The Man in the High Castle*（もうひとつの現実：フィリップ・K・ディック『高い城の男』研究）

「孤独なパービテラーボフミル・フラバル『あまりにも騒がしい孤独』」

「小説家にして幻視者、アントニオ・タブッキの夢—『トリスターノは死ぬ』におけるゴヤの《犬》の変奏—」

「ロベルト・ボラーニョ、謎の作家を追って」

The Monster in Frankenstein（フランケンシュタインの中の怪物）

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

浅羽麗 The Oscillation between Romanticism and the Otherness in F.Scott Fitzgerald's *Tender Is the Night*
〈指導教員〉柴田元幸

福田真三「「アナザー・ワールド」と親子の問題—エンデ、村上春樹、イシグロ」〈指導教員〉沼野充義

石山真衣 The Literature of Threshold: Angela Carter's Metamorphic Narratives 〈指導教員〉柴田元幸

落合一樹 Opaqueness, Origin, Communication in *Tristram Shandy* 〈指導教員〉柴田元幸

2013 年度

関大聡「J.P.サルトルの文学作品における真理の表現」〈指導教員〉沼野充義

阿部幸大 Development of Characters in Thomas Pynchon's Novels 〈指導教員〉柴田元幸

鄭重「＜変化＞をめぐる—『抱擁家族』と『女流』の表現論」〈指導教員〉沼野充義

西菜津子「ポーランド演劇における結婚—ムロージェック『タンゴ』に至る流れ」〈指導教員〉沼野充義

李眞和「大江健三郎研究「破局からの創造」」〈指導教員〉沼野充義

邵丹「現代都市の迷宮で愛を探し求める人たち—フィッツジェラルド、カーヴァーと村上春樹の比較文学研究」
〈指導教員〉柴田元幸

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲) (乙)

なし

2013 年度

(甲)

亀田真澄「五カ年計画のメディア・イメージ—ソ連とユーゴの比較—」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉柴田元幸・大橋洋一・三谷恵子・池田嘉郎

(乙)

なし

2 4 西洋史学

1. 研究室活動の概要

西洋史学研究室は1887年に史学科として発足した後、1919年に西洋史学科として独立、講座の増設や制度の改変を経て、現在の専修課程に至っている。おもにヨーロッパ史に関する研究および教育に従事している。この間、多数の指導的研究者・教育者を輩出し、また中等教育や出版・マスコミ、広告、通信、金融、製造など、さまざまな企業にも有為の卒業生を送りだしてきた。

西洋史学は地理的には、ヨーロッパはもちろん、周辺地域、さらに南北アメリカ大陸までも視野に入れ、時代的には古代から現代に至る、実に数千年を対象としている。また伝統的に人文地理学もその対象としてきた。これら広範にわたる分野をカバーして教育・研究にあたる専任教員は、2012年度、2013年度は教授6名、助教1名で構成された。さらに多様な視点を提供し、教育を充実させるため、大学院演習に関しては総合文化研究科の教授1名から、学部講義に関しては学外の多彩な非常勤講師陣（2012年度、2013年度は4名）から協力を得ている。

学部の専修課程は、毎年ほぼ定数25名程度の進学者を迎え、在籍学生数は2012年度、2013年度はいずれも69名である。学部生に対しては、西洋史学特殊講義や西洋史学演習などを開講し、授業以外でも卒業論文作成の指導にあたっている。またティーチング・アシスタントを務める大学院生（博士課程）がサブゼミを運営し、卒業論文作成を支援している。大学院（欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野）では毎年、博士課程3名程度、修士課程5名程度の入進学者を迎えており、在籍者は2012年度36名、2013年度31名である。授業は演習を中心としており、指導教員は時間外にも学位論文の作成指導を行っている。博士課程在籍中、多くの大学院生がイギリス・ドイツ・フランス・イタリア・スペイン・スイス・北欧・ロシア・アメリカなどに留学して現地の研究機関で研修し、博士論文の準備を行う。伝統的な政治史、経済史に留まらず、社会史、さらに異文化接触や公共圏の問題など、国際情勢、研究動向の変化にも対応した、多様なテーマで教育、研究が行われている。

また学会活動への参与も精力的である。日本西洋史学会大会運営理事校を務め、また他の研究室とともに、財団法人史学会に理事、評議員、編集委員を送り、『史学雑誌』の編集や大会開催などの業務を遂行している。その他、ほとんどの教員、大学院生は日本ばかりでなく、各国の学会・研究会に理事・評議員・会員として関与している。また『国際歴史科学文献目録IBHS』（本部ローマ）、『国際中世学文献目録IMB』（本部リーズ（英国））をはじめ、国際的な文献目録の編集協力を研究室として引き受けている。さらに各教員は、自ら海外で研究発表・雑誌編集・博論審査を行うとともに、海外の研究者と連携して、国内外で国際会議や講演会を定期的に開催し、その成果を邦語（翻訳）や欧語で公刊している。これらの会議、講演会には教員の他、大学院生、学部学生も報告者、あるいは準備運営委員として積極的に参加している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

石井規衛	教授	現代ロシア史（2013年3月まで）
深澤克己	教授	近代フランス史
姫岡とし子	教授	近現代ドイツ史
高山博	教授	西洋中世史
橋場弦	教授	古代ギリシア史
勝田俊輔	准教授	近代アイルランド史
池田嘉郎	准教授	近現代ロシア史（2013年4月より）

(2) 助教の活動

佐藤昇	1973年10月16日生
在職期間	2009年4月1日～2012年9月
研究領域	古代ギリシア史
業績	
（著書）	共著、本村凌二編『ローマ帝国と地中海文明を歩く』、講談社、2013.4
（論文）	「Maiandrios and(?) Leandr(i)os of Miletos (nos. 491-492)」、I. Worthington et al. (eds) 『Brill's New Jacoby』, Leiden、2012.10. 「ミレトス神話とディデュマ」『西洋古典学研究』61、2013.3

- (学会発表) 国内、「ミレトス神話とディデュマ」、日本西洋古典学会第 63 回大会、龍谷大学（京都）、2012.6.2.
 国際、「Abusing Legal Procedures for Impeding Legal Procedure」、International Conference: ‘Use and Abuse of Law in the Athenian Courts’, University College London（ロンドン）、2013.4.16-18.
 国内、「日本における古代ギリシア史研究の現在」、日本西洋史学会第 63 回大会、京都大学（京都）、2013.5.12.
 国内、「古典期アテーナイの法廷と社会」2012 年度神戸大学史学研究会総会、神戸大学（神戸）、2013.7.13.
 国際、「Comments on Douglas Cairns's "Revenge, Punishment, and Justice in Athenian Homicide Law」、The Tenth Japan-Korea-China Symposium on Ancient European History, Hall of Ziyu Hotel（北京）、2013.10.19-20.
 国際、「Milesian Myths and Didyma.」、The Tenth Japan-Korea-China Symposium on Ancient European History, Hall of Ziyu Hotel（北京）、2013.10.19-20.
 国内、「遅延戦術：古典期アテーナイにおける訴訟の意味をめぐって」、古代史の会、東京大学（東京）、2013.11.22.
 (啓蒙) 「翻訳：ヒュー・ボーデン「名無しの神々：秘儀、神話、儀礼とギリシアポリスの宗教」、『クリオ』26、2012.5
 「アテナイの裁判制度」「コリントス戦争」歴史学研究会編『世界史史料集第 1 巻 古代オリエントと地中海世界』岩波書店、2012.7
 (研究テーマ) 文部科学省科学研究費補助金、研究代表者、「古代東地中海世界国際関係におけるエリート間の紐帯に関する研究」、「Studies on the Elites' Relationships in the Ancient Eastern Mediterranean World」、2010～2012
 文部科学省科学研究費補助金、研究代表者、「歴史叙述にみるエスニシティの研究：ヘレニズム・ローマ期イオーニア地方を中心に」、「Ethnicities in the Ancient Greek Historiography in the Hellenistic and Roman Ionia」、2013～
 (他機関での講義等) 非常勤講師、早稲田大学エクステンションセンター、「古代ギリシアの歴史」、2012.4～2012.7
 専任教員、神戸大学、「西洋史学特殊講義」「西洋史学演習」「西洋古典語」、2012.10～
 非常勤講師、京都大学、「西洋史学特殊講義」、2013.10～2014.3
- 藤崎衛 1975 年 8 月 18 日生
 在職期間 2012 年 10 月 1 日～現在 助教
 研究領域 西洋中世史
 業績
 (著書) 単著、『中世教皇庁の成立と展開』、八坂書房、2013.12
 (論文) 「中世教皇庁の慈善施設—施与局と救護院」、『地中海学研究』、35、75-94 頁、2012.5
 「ヨーロッパ中世における教皇庁の成立と発展」、『歴史と地理 世界史の研究』、234、54-58 頁、2013.2
 (書評) ジャン・クロード・シュミット、『中世の幽霊—西欧社会における生者と死者』、みすず書房、『DALS ニュースレター』、31、15 頁、2012.2
 (解説) 藤崎衛、高山博、成川岳大、仲田公輔、「第 5 章 ヨーロッパ世界の形成と発展」、『世界史 B 世界史教授資料 研究編』、127-170 頁、2013.3
 藤崎衛、小澤実、「第 7 章 ヨーロッパ世界の形成と展開」、『世界史 B 教授用指導書』、79-97 頁、2013.3
 (学会発表) 国際、Mamoru Fujisaki、「Comment on Dr. Chiba's paper: "Conversion in form of reductio. The church union at the Council of Ferrara-Florence(1438-39)"」、Religious Conflict, Religious Concord in Europe and the Mediterranean World、2012.10.21
 国際、藤崎衛、「Maria Giuseppina Muzzarelli 氏講演 “The Bologna Ghetto” へのコメント」、第 34 回関西イタリア史研究会、京都大学吉田キャンパス（京都府）、2012.12.2
 国内、藤崎衛、「聖俗の支配者としてのローマ教皇—中世ヨーロッパを読み解く鍵として」、地中海学会春期連続講演会「地中海世界を生きる」第 1 回、2013.4.6
 国内、藤崎衛、「中世ローマの都市空間」、第 5 回合同沼地研究会、2013.6.20

- 国内、藤崎衛、「教皇使節活動の意図と実態—12、13世紀を中心に—」、平成25年度九州史学会大会、2013.12.8
- (マスコミ) 「ローマ法王 聖・俗、二つの顔のあいだで」、『朝日新聞』11面、2013.3.17
「ローマ教皇の交代 カトリックの体制立て直せるか」、『東京大学新聞』7面、2013.4.23
「祈りの地・バチカンへの道しるべ」、『旅なかま』(通巻245号)2-4頁、2013.8.1
- (翻訳) Geoffrey Barraclough, "The Medieval Papacy"、『中世教皇史』、八坂書房、2012.3
Maria Giuseppina Muzzarelli, "Il gettho di Bologna"、『ボローニャのゲットー』、『クリオ』、27、65-75頁、東京大学クリオの会、2013.5
- (研究テーマ) 文部科学省科学研究費補助金、代表者、「中世教皇庁の行政組織編成に関する実証的研究」、2011～2013
文部科学省科学研究費補助金、分担者(東大内に代表者あり)、「中世盛期教皇庁の統治戦略とヨーロッパ像の転換」、2013～
- (他機関での講義等) 非常勤講師、江戸川大学、「外国史概説／外国史学概論」、2012.4～2013.3
非常勤講師、学習院大学、「ヨーロッパ世界」、2012.4～2014.3
非常勤講師、日本女子大学、「基礎演習」、2012.4～2013.3
非常勤講師、立教大学、「史学講義」、2012.4～2013.3
非常勤講師、立正大学、「西洋史特講」、2012.4～2014.3
非常勤講師、立教大学、「歴史と資料」、2013.4～2014.3
- (学会) 国内、地中海学会、事務局委員、2012.12～
国内、西洋中世学会、国際交流委員、2013.6～
国内、西洋中世学会、研究会・講演会組織委員、2013.6～

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012年度

- 「ドイツ帝国統治下ストラスブールの都市政策」
「戦間期アメリカの通商政策」
「スペイン第2共和政期『左派の2年間』における政教関係—教育問題を中心に—」
「中世イタリアにおける船舶の発展とその経済・政治的影響に関する考察—ヴェネツィアのガトー船を中心として—」
「前四世紀アテナイにおける立法手続について」
「ワイマール共和国の保守革命論—タート紙に見られるタート派、青年保守派の思想を中心に、権威主義への歩み寄りについて—」
「1563年の魔術禁止再考」
「19世紀末から20世紀初頭におけるイギリス造船企業と日本海軍の関係—アームストロング社造船技師としての日本海軍」
「一九世紀イギリスにおける女性と慈善活動」
「19世紀中葉のイングランドにおける警察組織の発展と犯罪の発生について」
「戦間期イギリスの石炭産業衰退における一考察」
「名誉革命期のイングランドにおけるナショナル・アイデンティティの形成—キリスト教知識普及協会(SPCK)との関連を中心に—」
「ヴァンデ戦争におけるカトリック王党軍の組織—フランス革命期の地方反乱について—」
「ナチ演劇政策：ティンゲシュピールの隆盛と衰退」
「パライオロゴス朝前期ビザンツ帝国における知識人と古典」
「戦間期イギリスの文化広報活動の変容」
「戦間期スコットランドの経済的停滞と地方分権への動き」
「コンスタンティウス2世帝治下(337-361)における宮廷宦官—*praepositus sacri cubiculi* エウセビオスとその権力—」
「世紀転換期の英独海軍競争とイギリスの海軍制度」

「12 世紀サンチャゴ・デ・コンポステーラにおけるディエゴ・ヘルシレスの諸活動とコミュニオン運動」
 「1900 年代前半のピウスツキについて」
 「連合王国解体とアイルランドのナショナリズムの形成」
 「トマス・アーノルドのパブリックスクール改革」
 「アメリカ合衆国における東欧系ユダヤ移民の社会的上昇に対する考察—教育を主眼点に—」
 「1911 年の議会改革をめぐる貴族院の反応と、その再評価」
 「近代ロシアにおける農民の出稼ぎに関する考察」

2013 年度

「ローマ共和政末期における選挙不正と分配人」
 「19 世紀半ばのイギリスの対東アジア地域戦略における日本の位置づけ—極東における英露戦争が日英協約締結に与えた影響—」
 「13 世紀の列聖審査過程における聖職者の行動—ビンゲンのヒルデガルトとテューリゲンの聖エリーザベトの例から—」
 「19 世紀イギリスにおける売春規制について」
 「18 世紀イギリスにおける近代保険制度の成立と賭博との関係性」
 「19 世紀イギリスにおける売春規制について会社制度の変遷と時代状況」
 「イギリス金融・サービス利害の国家観 19 世紀後半大不況期を中心に」
 「反奴隷制運動に見るイギリス人女性の社会進出」
 「19 世紀イギリスの民衆娯楽に於ける階級意識」
 「ヴィクトリア朝社会における恐怖のイメージと伝播—切り裂きジャック報道を中心に—」
 「マッチウエンロック・オリンピック大会とクーベルタン」
 「1666 年ロンドンの大火とステュアート朝の国王たち—建築規制の国王布告を中心に—」
 「アテナイ身分制における、商業がもつ機能について」
 「第一次世界大戦期イギリスにおける外交と内政の重心—アルスター問題を中心に—」
 「オットー大帝期の紛争における政治儀礼・Spielregeln の考察」
 「ロンドン東インド会社の監査制度とコーポレートガバナンス」
 「カロリング期の農村と荘園制」
 「カステイリャ王国における王政とユダヤ人の関係」
 「19 世紀ドイツにおける産業革命の再考—鉄道史を中心に—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

長田雄人「1641 年のアルスタ反乱における宗教的暴力について」〈指導教員〉勝田俊輔
 富樫遼大「18 世紀中頃のパリにおけるポリス従事者の職務意識」〈指導教員〉深澤克己
 内川勇太「9 世紀末から 10 世紀半ばまでのマース地域：その統治の実態から見たイングランド統一過程の再考」
 〈指導教員〉高山博
 内川勇海「古典的アテナイの殺人訴訟における殺人行為の解釈」〈指導教員〉橋場弦
 福永新一「14 世紀後半フランスにおける国王森林制度—森林治水長官ジャン・ド・ムランと森林制度改革」
 〈指導教員〉高山博
 渡邊公夫「英宣教医ベッテルハイムの琉球王国宣教とイギリス帝国」〈指導教員〉勝田俊輔

2013 年度

見目典隆「1930 年代のソ連における政治と社会—作戦命令 00447 号と見世物裁判に見る政治的規律化—」〈指導教員〉池田嘉郎
 小野寺瑤子「フランス革命戦争期ロンドンにおける統治システムの再編成」〈指導教員〉勝田俊輔
 柏達己「アテナイにおける決議主導型手続きについて—五百人評議会・アレオパゴス評議会の役割を中心に—」〈指導教員〉橋場弦
 中川友喜「14 世紀末スコットランド北部における政治秩序」〈指導教員〉高山博
 長野壮一「ナポレオン 3 世による社会福祉政策とその思想背景」〈指導教員〉深澤克己
 長谷川祐平「戦間期のイギリスにおける「計画化」運動の諸相—G.D.H. コールの言説からみる—」〈指導教員〉勝田俊輔

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

坂野正則「17 世紀フランスにおける篤信家とパリ外国宣教会の成立」

〈主査〉深澤克己 〈副査〉姫岡とし子・近藤和彦・長谷川まゆ帆・武内房司

巽由樹子「近代ロシア絵入り雑誌の研究—19 世紀後半における都市中間層の文化的側面の分析—」

〈主査〉石井規衛 〈副査〉姫岡とし子・沼野充義・長谷川まゆ帆・和田春樹

(乙)

なし

2013 年度

(甲) (乙)

なし

25 社会学

1. 研究室活動の概要

東京大学における社会学の歴史は古い。社会学が「世態学」という名で初めて講じられたのは1878（明治11）年のことである。そして、1886（明治19）年には「社会学」の名で独立の学科目となり、1893（明治26）年帝国大学に講座制が導入されたとき、文科大学に社会学講座が設置され、外山正一や建部遯吾らに支えられて大きく発展した。1919（大正8）年には社会学科となり、翌1920（大正9）年には2講座になった。その後、戸田貞三のもとで社会調査を取り入れた経験科学がめざされた。

戦後の日本の社会学を牽引したのは尾高邦雄や福武直らで、1961（昭和36）年には3講座となり、1960年代には産業社会学、農村社会学、知識社会学、実験社会学（小集団論）、政治社会学、経済社会学にわたって教授陣が整えられ、現代社会を社会学の観点から包括的に教育研究する基礎が築かれた。そして、これをもとに社会学は、文化人類学などと協力しつつ文学部から独立して一つの学部となることをめざしたが、1960年代末に起こった大学闘争の嵐の中でその構想は立ち消えとなった。

1974（昭和49）年に社会心理学専修課程の創設に心理学とともに協力し、1983（昭和58）年以降は大学院総合文化研究科の創設に協力した。1984年には4講座となった。1987（昭和62）年から、社会心理学および新聞研究所と協力してふたたび学部となることをめざしたが、新聞研究所の社会情報研究所への改組により、また、東京大学全体として大学院に重点をおいて改革を進めることになったため、1990（平成2）年以降は社会学研究科の部局化に向けて努力がなされた。

しかし、1993（平成5）年になって、人文科学研究科と協議して合同で1つの研究科として部局化することがめざされ、1995（平成7）年度からは、社会学と社会心理学は社会情報研究所の大学院部分とともに、人文社会系研究科の専攻のひとつとして社会文化研究専攻を構成した。その後、社会情報学は情報学環として独立し、社会学研究室は学部では行動文化学科の社会学専修課程、大学院では社会文化研究専攻の社会学専門分野を担当して今日に至っている。

2013年度の教員数は、教授4名、准教授3名、助教1名であり、カヴァーする領域は主として学説・理論、家族、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、人口、計量、階層、社会意識、文化、計画、福祉、科学、技術、環境などである。

毎年前期課程から進学してくる学部学生は約50名、また学士入学でも学生を受け入れている。進学してくる学生の関心は多様であり、卒業論文のテーマも広い範囲におよんでいる。必修科目、演習、特殊講義をつうじて、系統的で体系的な教育に力をいれている。

学部生の卒業後の進路は、これまで新聞、放送、出版などマスコミ関係に3分の1程度の学生が就職していたが、最近は金融やメーカーに就職する者や、国家公務員・地方公務員になる者も増えてきた。さらに学部卒業生の約1割程度は、社会学その他の大学院に進学している。大学院修士課程入学者は外国人留学生を含めて10名前後である。修士課程入学者はこれまでほとんどが博士課程に進学していたが、修士号取得後、国家公務員になったり研究所研究員、あるいは民間企業に就職する者もでてきた。院生総数は60名ほどであり、研究テーマもきわめて多様である。部局化とともに博士号取得のための指導にも力をいれており、論文博士に加えて、課程博士を輩出している。

研究室全体でかかわっている活動としては日本社会学会の活動がある。教員全員と多数の大学院生が会員として毎年大会などで活躍しており、機関誌『社会学評論』の発行に大きく貢献してきている。このほか、各種の社会学関連の学会や研究会の運営や活動に教員や大学院生がそれぞれ深くかかわってきている。また、大学院生が中心になって、若手社会学者向けの雑誌『ソシオロギス』を毎年編集・発行している。

本研究室にも留学生は多い。もっとも多いのは韓国からの留学生であり、研究生として1～2年過ごしたあと大学院にはいり、社会学の博士号をとって本国に戻って活躍している人がすでに数名でてきている。ついで多いのは中国からの留学生である。このほか、他のアジア諸国や欧米からの留学生もいる。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

松本三和夫

専門分野 科学社会学

在職期間 1996年4月～現在

武川正吾

専門分野 社会政策

在職期間 1993 年 4 月～現在

佐藤健二

専門分野 歴史社会学

在職期間 1994 年 10 月～現在

白波瀬佐和子

専門分野 人口の社会学

在職期間 2006 年 4 月～現在

赤川学

専門分野 社会問題の社会学

在職期間 2006 年 4 月～現在

出口剛司

専門分野 理論社会学・社会学史研究

在職期間 2011 年 4 月～現在

祐成保志

専門分野 コミュニティの社会学

在職期間 2012 年 4 月～現在

(2) 助教の活動

常松淳

在職期間 2010 年 4 月～2014 年 3 月

研究領域 責任の社会学

主要業績 『責任と社会——不法行為責任の意味をめぐる争い』（2009 年、勁草書房）

「責任の社会学——自然主義的アプローチをめぐる」盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾（編）『公共社会学 1』（2012 年、東京大学出版会）

「取り決めとしての責任と社会学」米村千代・数土直紀（編）『社会学を問う——規範・理論・実証の緊張関係』（2012 年、勁草書房）

教育実績 2013 年度～2014 年度 成蹊大学非常勤講師

2012 年度～2013 年度 立教大学非常勤講師

2009 年度～2012 年度 東京女子大学大学非常勤講師

(3) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

李蓮花（2012 年度）

Yashavantha Dongre（2013 年度）

金禧秀（2013 年度）

大学院人文社会系研究科研究員

佐藤雅浩（2012 年度）

福岡愛子（2012 年度・2013 年度）

飯島幸子（2013 年度）

日本学術振興会特別研究員（PD）

後藤悠里（2012 年度・2013 年度）

森山至貴（2012 年度・2013 年度）

尾玉剛士（2012 年度・2013 年度）

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

「世代別の自殺に関するアノミー論的考察」

「ソーシャルメディアによる「可視化」とその影響」

「外国人居住者としての留学生」
 「大学 COC 構想の社会的意義」
 「富士山世界遺産運動についての社会学的考察」
 「リトルリーグという世界」
 「近代建築の保存をめぐる利害関係」
 「怠惰の超克」
 「食の社会学」
 「都市と新しい墓制」
 「東京都内のイスラムのパーソナルネットワーク」
 「若者論における「内向き志向」論—若者は内向きになったのか—」
 「震災ボランティアに関する考察」
 「里親制度の普及」
 「災難報道における公共放送—韓国の東日本大震災報道に関する考察」
 「性同一性障害の生殖補助医療利用における非摘出し子問題について」
 「途上国のマラリア対策の考察と根絶の必要性について」
 「なぜアフリカは自立できないのか」
 「世界の水資源とその解決に向けた BOP ビジネスの可能性」
 「映画人口の変遷—映画産業とテレビ産業の相互関係から—」
 「観光による地域振興」
 「法制度・支援・当事者の観点から見る面会交流—面会交流の実施を困難にするものと可能にするもの」
 「BOP ビジネスと IT 技術」
 「コンテンツビジネスと著作権制度」
 「マルセル・モースの社会構想」
 「これからのホームレス支援—山谷の実情を通じて」
 「犯罪を減らすために—防犯の理論と警察活動—」
 「“スイーツ”をめぐる文にみる現代の意識」
 「進路決定における学生時代の活動の影響」
 「摂食障害と eating disorder」
 「社会運動におけるデモの位置付け」
 「日本における外来生物問題に対する取り組みとその課題」
 「在宅医療場面の相互行為分析」
 「「高速ツアーバス」の「問題」化をめぐる研究」
 「地方学生の就職における意思決定プロセス」
 「太平洋戦争の政治指導者層の精神構造：丸山真男の軍国支配者分析の再検討」
 「現代日本におけるメディア・イベントの展開」
 「"観光地" TOKYO はどのように構築されるのか—ツーリズムマーケティングにおけるプロモーションの重要性」
 「感情労働における感情管理はゲーム感覚を取り入れることで改善されるのか」
 「動物愛護をめぐる政策決定過程—2012 年動物愛護管理法の改正を題材に—」
 「現代における若者の異性間の友情」
 「メンズコスメからみる「見た目」依存社会」
 「地方競馬の衰退と展望」
 「江東区豊洲地区における再開発事業の現状と可能性」
 「労働問題を正当化するやりたいこと志向 美容師たちの「継続」と「離脱」から」
 「創価学会における宗教教育の構造に関する研究」
 「風評被害の実態—東日本大震災を事例に—」
 「世代間格差」
 「現代日本における祭の構造」
 「アニメなどの「聖地巡礼」について」
 「「女子力」とは何か—雑誌分析から見る「女子力」の諸類型」

2013 年度

「音楽ソフトとしての CD の必要性」
「女性同性愛表現とジェンダー」
「現代社会におけるペット―愛着と擬人化の観点から」
「プロ野球視聴率の低迷は人気の低迷と言えるのか」
「韓流からみるソフトパワーとハードパワー」
「マレーシアにおけるバンサ制度の成立」
「広島の中学校における平和教育の真相～実践の地域差に着目して～」
「女性と労働―日本の女性が日本経済と人口問題をどう動かし得るのか―」
「日本における外国人知識労働者の実態を探る」
「パーリンズ理論とアメリカ社会学―経験性と規範性―」
「東証第一部上場電機メーカーによる社会貢献活動の戦略性に関する研究」
「近年の社会運動についての社会学的分析」
「企業城下町における住宅政策―日立を事例に―」
「雑誌におけるラブホテルの語られ方についての考察」
「衣、食、住、連、脱―大韓民国兵士の社会学―」
「『孤』のメカニズムの検討―解法としての『縁』の性質」
「ラグビー人気の社会学」
「地域における自衛隊基地の役割―京都府舞鶴市の事例からの考察―」
「重症心身障害児者の地域生活」
「行政と NPO・ボランティアの関わり」
「監視カメラを巡る言説と監視社会論」
「電車内での乗客のふるまいに見る、日本人の共在の作法―アーヴィング・ゴッフマンのドラマトゥルギーを手がかりに」
「記念館における歴史語りの生成」
「大都市都心部における近代建築保存」
「声優ファンの世界―声優・水樹奈々のファンを事例に」
「社会的包摂―「社会」を映す鏡としての犯罪者処遇」
「学生団体における団体理念の扱われ方についての考察」
「『体育会』をめぐる考察」
「現代女性の化粧行動における“自分遊び”」
「“社会人ごっこ”の可能性と限界」
「選挙におけるメディアの役割とインターネットの位置付け」
「テレビゲームにおけるメディア効果論と批評のあり方」
「家庭教育の様相―母親の子育て観―」
「サッカーを利用したエイズ啓発活動とその構造」
「喫煙行動のダイナミクス」
「踊り明かすことの違法性について―構築主義アプローチによるクラブ規制問題の再構築」
「Twitter の考察によるマクルーハンの理論の再構築」
「メディア多様化時代の新聞」
「社会学による公益通報の探求―内部告発と公益通報者保護法の関係から―」
「『自己責任』論をめぐる社会意識の様相」
「日本出版業の構造的特異性と中小書店に関わる社会コミュニケーションについて」
「イタリア人論の歴史社会学」
「音楽の媒体テクノロジーの発展とその周辺構造の変容に冠する考察」
「不妊治療と生殖補助医療の心理的支援―カウンセラーの意識と実践から―」
「美醜競争―容姿の社会学―」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

塩谷昌之「鉄道ファンの社会学―「ゲーム」としての鉄道趣味に焦点を当てて」(指導教員) 佐藤健二

石島健太郎「関係性におけるニーズ生成を支える介護者の限定性—神経難病介護を事例に」〈指導教員〉赤川学
櫛原克哉「精神医療技術を通じた自己形成に関する社会学的研究」〈指導教員〉赤川学
福田隆巳「現代スペインにおける教育と雇用に関する実証研究」〈指導教員〉白波瀬佐和子
藤田研二郎「環境保全の正当化をめぐる社会過程」〈指導教員〉赤川学

2013 年度

長谷一弘「心理主義化に関する歴史社会学的研究—友人論の歴史の変容の分析を通じて」〈指導教員〉赤川学
岡崎佑大「職業の専門性に関する社会的承認のあり方—経営コンサルタントに着目して」

〈指導教員〉白波瀬佐和子

加藤謙信「サイバースペースにおけるコンテンツの共同利用の構造—動画投稿サイトを事例として—」

〈指導教員〉佐藤健二

崔謙「韓国オルタナティブメディアの意義と限界—ポッドキャスト「ナヌンコムスダ」を事例に—」

〈指導教員〉佐藤健二

渡邊隼「コミュニティ問題の形成と変容—社会問題の歴史社会学の分析視角からの検討—」〈指導教員〉赤川学
井口尚樹「否定的レイベリングに対する抵抗法—被レイベリング者による定義し直しの可能性と困難—」

〈指導教員〉出口剛司

上林薫「生殖補助技術をめぐる議論における「子どもの福祉」の再検討」〈指導教員〉松本三和夫

佐藤和宏「日本における福祉国家再編期の住宅政策—ハウジングの社会学という視座から—」

〈指導教員〉武川正吾

嶋田吉朗「商工業者の結社活動から見る地域活性化プロセスの解明—福岡県飯塚市の事例から」

〈指導教員〉白波瀬佐和子

田巻綾那「＜記念の場＞を通じた記憶の伝承—ドイツ強制収容所記念館を事例に—」〈指導教員〉出口剛司

品治佑吉「私的・社会的・潜在的—清水幾太郎「潜在的輿論」にみる社会心理学的個人論—」

〈指導教員〉佐藤健二

山中麻莉子「ゲオルク・ジンメルにおけるゲーテ受容と社会学の構想—形式社会学再考—」〈指導教員〉出口剛司

黄銀智「高齢者介護におけるケアマネジメントの可能性—韓国の老人長期療養保険制度と日本の介護保険制度の比較を通じて—」〈指導教員〉武川正吾

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲)

福岡愛子「日本における文革認識—歴史的認識転換をめぐる「翻身」の意味—」

〈主査〉佐藤健二 〈副査〉武川正吾・藤井省三・上野千鶴子・片桐雅隆

飯島幸子「旧東ドイツ社会学者が経験した「統一」—ベルリン・フンボルト大学における事例研究—」

〈主査〉出口剛司 〈副査〉武川正吾・白波瀬佐和子・赤川学・上野千鶴子

(乙)

なし

2013 年度

(甲)

野辺陽子「養子縁組の社会学—＜血縁＞をめぐる人々の行為と意味づけ」

〈主査〉赤川学 〈副査〉武川正吾・白波瀬佐和子・出口剛司・上野千鶴子

(乙)

町村敬志「開発主義の構造と心性—戦後日本がダムでみた夢と現実」

〈主査〉佐藤健二 〈副査〉武川正吾・白波瀬佐和子・丹羽美之・蓮見音彦

上野千鶴子「ケアの社会学…当事者主権の福祉社会へ」

〈主査〉白波瀬佐和子 〈副査〉武川正吾・佐藤健二・大澤眞理・盛山和夫

26 社会心理学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

社会心理学は、人の社会的行動や認知の心理的な規定因を実証的に研究する経験科学である。そのため、社会的状況における個人の行動や認知、集団行動、組織における人間行動、文化的に規定された行動や認知の研究など幅広い研究を含んでいる。

当社会心理学研究室は、人文社会系研究科の中では比較的新しい研究室であるが、研究及び教育活動は活発に行われている。現在は、社会文化研究専攻の社会心理学コースとして、教授3名、准教授1名、助教1名で運営されている。それぞれの教員が独自の領域で研究を進めながら、協力しあって教育を行っている。

研究室の特色としては、各教員と大学院生の共同研究が数多く行われていること、また、海外の研究者や他学問領域の研究者とのコラボレーションによる国際的・学際的研究が多数行われていることがあげられる。教員はそれぞれの共同研究者とともに、さまざまな学問領域の学会においてシンポジウムやワークショップを主催しているほか、学内においても、毎年数回にわたり、海外の研究者を招いて社会心理学コロキウムを開催している。

なお、研究室所属の教員及び院生の最近の研究は、掲示板に貼り出されているので、誰でもその概要を知ることができる。より詳しい情報は、社会心理学研究室ホームページ <http://www-socpsy.L.u-tokyo.ac.jp/japanese/> に公開されている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

所属の大学院生は、指導教員主体の研究に参加するだけでなく、自らを主研究者とする研究活動を積極的に行っており、教員はそれをさまざまな形で支援している。大学院生の研究成果は、指導教員ごとのリサーチ・ミーティングのみならず、定期的に開催される社会心理学研究室全体のリサーチ・ミーティングでも議論され、さらに、国内外の学会の年次大会での発表の後、専門学術誌や学術書に掲載されている。大学院生の多くは国際的に活動しており、海外の学会において英語で口頭発表を行ったり、国際学術誌に英語論文を投稿したりしている。

(3) 学会運営、研究誌の発行など、研究室としての活動

当研究室が組織として学会運営や研究誌発行の母体となることはないが、各教員は国内外の学会活動を盛んに行っている。具体的には、国内外の学術雑誌の編集委員として、あるいは投稿論文の審査者として、社会心理学関係の主要な雑誌の編集に参加している。さらに、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミックス学会、アジア社会心理学会、日本世論調査協会、日本選挙学会などの役職者（会長・常任理事・理事等）として、学会運営にも大きな貢献をしている。

(4) 国際交流の状況

各教員が国際共同研究・調査に参加しており、かつ学会レベルでの国際交流も盛んである。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

山口 勲 教授

在職期間 1987年10月～現在

専門分野 社会心理学

池田謙一 教授

在職期間 1992年4月～2013年3月

専門分野 社会心理学

唐沢かおり 教授

在職期間 2006年10月～現在

専門分野 社会心理学

村本由紀子 准教授

在職期間 2011年10月～現在

専門分野 社会心理学

(2) 助教の活動

品田瑞穂

在職期間 2012 年 4 月～2014 年 3 月

専門分野 社会心理学

主要業績

- (論文) Yamagishi, T., Hashimoto, H., Cook, K. S., Kiyonari, T., Shinada, M., Mifune, N., Inukai, K., Takagishi, H., Horita, Y., & Li, Y., 「Modesty in self-presentation: A comparison between the USA and Japan」, 『Asian Journal of Social Psychology』, 15, 60-68 頁、2012.3
- 品田瑞穂・橋本博文・三浦亜利紗, 「他者に求める信頼性の日米比較研究」, 『Center for the Experimental Research in Social Psychology, Working Paper Series』, 136, 2012.5
- Yamagishi, T., Horita, Y., Mifune, N., Hashimoto, H., Li, Y., Shinada, M., Miura, A., Inukai, K., Takagishi, H., & Simunovic, D., 「 Rejection of unfair offers in the ultimatum game is no evidence of strong reciprocity.」, 『Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America』, 109, 20364-20368 頁、2012.11
- Yamagishi, T., Mifune, N., Li, Y., Shinada, M., Hashimoto, H., Horita, Y., Miura, A., Inukai, K., Tanida, S., Kiyonari, T., Takagishi, H., & Simunovic, D., 「 Is behavioral pro-sociality game-specific? Pro-social preference and expectations of pro-sociality」, 『Organizational Behavior and Human Decision Processes』, 120, 260-271 頁、2013.3
- (学会発表) 国内、品田瑞穂・山岸俊男, 「外見的魅力と協力行動の関係における年齢の調整効果の検討」, 日本心理学会第 76 回大会、専修大学、2012.9.11
- 国内、品田瑞穂・山岸俊男, 「社会的ジレンマにおける罰制度の比較：リーダーによる罰と個人罰」, 日本社会心理学会第 53 回大会、つくば国際会議場、2012.11.17
- 国内、品田瑞穂, 「社会科学と実験研究」, 京都大学経済実験室オープニング記念ワークショップ、京都大学、2013.2.2
- 国内、品田瑞穂, 「協調関係の創発に向けた社会心理学的アプローチ」, 電子情報通信学会 2013 年総合大会 通信ソサイエティパネルセッション「ユーザと創りあげるサービス品質「共創品質」の実現に向けて」, 岐阜大、2013.3.21
- 国際、Shinada, M., & Yamagishi, T., 「Centralized punishment vs. peer punishment in social dilemmas」, The 15th International Conference on Social Dilemmas, Zurich, Swiss, 2013.7.11
- 国内、品田瑞穂・谷田林士・伊藤圭子, 「水平的集団主義傾向が他者の視点取得の正確さに及ぼす影響」, 日本グループ・ダイナミックス学会第 60 回大会、北星学園大学、2013.7.14
- 国際、Shinada, M., 「Sensitivity to the social distance: Does collectivism foster the accuracy of perspective taking of others?」, The 10th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology, 2013.8.24
- (受賞) 国際、Toshio Yamagishi, Hirofumi Hashimoto, Karen S. Cook, Toko Kiyonari, Mizuho Shinada, Nobuhiro Mifune, Keigo Inukai, Haruto Takagishi, Yutaka Horita and Yang Li, Toshio Yamagishi, Hirofumi Hashimoto, Karen S. Cook, Toko Kiyonari, Mizuho Shinada, Nobuhiro Mifune, Keigo Inukai, Haruto Takagishi, Yutaka Horita and Yang Li, Misumi Award, Japanese Group Dynamics Association and the Asian Association for Social Psychology, 2013.8

(3) 外国人教員の活動

2012-2013 年度 該当なし

(4) 外国人研究員・内地研究員

- ・Joonha Park (Ph.D., University of Melbourne) 2011 年 9 月～2013 年 8 月
- ・橋本博文 (博士(文学), 北海道大学) 2012 年 4 月～2014 年 3 月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2012 年度

- 「災害発生の頻度が文化に与える影響の研究—マルチエージェント・シミュレーションによる繰り返し囚人のジレンマを通して—」
- 「組織コミットメントが規範に与える影響について」
- 「望ましい自尊心の高さとその表明についての実験的検討」
- 「関係維持動機と許し：被害者の勢力感と謝罪の妥当性の観点から」
- 「確率の認知と意思決定」
- 「社会的ジレンマとしての違法ダウンロード問題の解決」
- 「ソーシャルサポートの動機について—Chen3(2012)の批判的検討」
- 「死の顕現性が自由意志信念に与える影響」
- 「「甘え」における社会的交換に関する研究」
- 「競合目標の非意識的な活性化とその達成が焦点目標の遂行による影響の検討」
- 「他者との親密度が透明性の錯覚に及ぼす影響」
- 「個人の集団主義的特性が、集団構成員の評価に与える影響について」
- 「インターネットによる情報収集が政治意識に及ぼす影響について」
- 「被排斥者の反社会的行動を抑制する方略の検討」
- 「上下関係と親密度が謙遜の効果に与える影響」

2013 年度

- 「死の顕現性および認知負荷の文化的世界観への影響に関する研究」
- 「時間的距離がポジティブ・ネガティブな出来事への受容感に与える影響について—出来事の重要度の区分を踏まえて—」
- 「自由意志信念による性役割ステレオタイプの抑制可能性の検討」
- 「スマートフォン利用の社会的帰結」
- 「組織コミットメントの内在化要素を規定している要因の検討」
- 「「甘え」の仕草についての実験的研究」
- 「日本における多元的無知の検討—対応バイアスと認知的不協和の観点から—」
- 「青年期以降の運動参加動機と心理的欲求について」
- 「制御焦点の活性化が存在脅威管理に及ぼす効果の検討」
- 「社会的アイデンティティと方言使用の関連についての研究」
- 「組織コミットメントおよび組織風土認知が不正告発意思に与える影響」
- 「逸脱者が持つ集団の代表性と集団への影響力の高低が、集団成員による逸脱者の評価へ与える影響」
- 「死の顕現性が女性ステレオタイプに与える影響」
- 「内集団卑下が生じる集団の特性と第三者からの評価」
- 「実体性が両面価値的な集団への態度に及ぼす影響について」
- 「自己と他者に関する自由意志信念が攻撃行動に与える影響」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

- 馬天雪「在日中国人留学生の SNS 利用と精神的健康」〈指導教員〉池田謙一
- 池谷光司「気分と目標の相互作用が動機づけに与える影響」〈指導教員〉唐沢かおり
- 鄭珪熙「The Effect of Recognizing Other People's Schadenfreude and Empathic Concern on Interpersonal Perception」〈指導教員〉唐沢かおり

2013 年度

- 竹本圭佑「政党拒否とソーシャルネットワーク：寛容性の視点から」〈指導教員〉村本由紀子
- 正木郁太郎「集団規範の再生産プロセスについて：集団成員性と組織学習の観点からの検討」〈指導教員〉村本由紀子

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲) (乙)

なし

2013 年度

(甲)

大高瑞郁「子どもの父親に対する態度を規定する要因：成人形成期の子どもに着目して」

〈主査〉唐沢かおり 〈副査〉池田謙一・村本由紀子・浦光博・安藤清志

稲増一憲「一般有権者が政治を捉えるフレームの研究：政治的エリートによる公的なディスコースとの相違に注目して」

〈主査〉池田謙一 〈副査〉唐沢かおり・村本由紀子・前田幸男・柴内康文

今城志保「就職面接の評価内容整理のための概念的枠組みの提案と検討」

〈主査〉山口勸 〈副査〉唐沢かおり・村本由紀子・藤森立男・角山剛

白岩祐子「裁判員裁判における量刑判断プロセスの検討：被害者の発言に対する非対称な認知の観点から」

〈主査〉唐沢かおり 〈副査〉山口勸・村本由紀子・今在慶一朗・宮本聡介

渡辺匠「自己と内集団の連合が自己防衛に果たす機能—類似性および概念連合という観点から—」

〈主査〉唐沢かおり 〈副査〉山口勸・村本由紀子・戸梶亜紀彦・福島治

(乙)

なし

27 文化資源学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

2000 年度に創設された研究室である。正しくは文化資源学研究専攻といい、大学院のみで、学部に対応する専修課程を持たない。文化経営学、形態資料学、文字資料学の 3 コースから成り、文字資料学コースはさらに文書学、文献学の専門分野に分かれる。

この構成はつぎのように発想された。われわれの前には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積がある。文書は書かれた「ことば」、文献は書物になった「ことば」であり、多くの人文社会系の学問は、もっぱらそれらの「ことば」を相手にしてきた。しかし、学問領域はあまりにも細分化され、また情報伝達技術の発達では「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係を希薄なものに変えた。一方、「かたち」を研究対象とする既成の分野は、本研究科においては美術史学と考古学ぐらいだが、おそらくそこから無数の「かたち」が視野の外へと追いやられている。さらに「ことば」にも「かたち」にも残りにくい「おと」の文化をも見落とすべきではないと考える。

そこで「文化」と呼ばれてきたものを、「おと」「かたち」「ことば」という根源に立ち返って見直し、多様な観点から新たな情報を取り出し、社会に還元する方法を研究することが求められるようになった。それが「文化資源学」であり、とくにその後半部が「文化経営学」と呼ばれるものである。具体的には、史料館、文書館、図書館、博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度などの過去と現在と未来を考えようとするものだ。

専任教員 10 人（文化経営学 2 人、形態資料学 3 人、文字資料学 3 人、外国人客員教授 1 人、助教 1 人）と学外連携併任教員 3 人からなる。文化資源学が既成の学問領域を横断するトランス・ディシプリナリーな性格を有することを反映して、美術史学、博物館学、文化政策学、音楽学、演劇学、社会学、民俗学、フランス文学、中国文学、歴史学など多彩な研究者が参加している。さらに学内の史料編纂所や総合研究博物館、学外の国立西洋美術館や国文学研究資料館と機関連携協定を結んで客員教員の派遣を受けている。今後とも、学外の研究機関・文化機関との連携をさらに充実させていく構想である。

(2) 大学院専攻・コースとしての活動

2012 年度の修士課程入学者は 7 人（うち社会人学生が 1 人）、博士課程入学者が 5 人（うち社会人学生が 3 人）、2013 年度の修士課程入学者は 8 人（うち社会人学生が 6 人）、博士課程入学者が 1 人（うち社会人学生が 0 人）であり、社会人に対して門戸を開いている専攻である。それは、大学を社会に対して広く開いていこうとする意思表示であり、本研究科にあつては文化資源学研究専攻がその最先端にある。

社会人学生は、民間の企業に勤めている者や、国公立の文化機関等を職場にしている。社会人が大学に戻って再教育を受けることや、学部から直接にあがってきた学生に対しては在学中から社会の現場に出るようなインターンシップなどの制度を今後とも充実させていきたいと考えている。

また特筆すべき活動として以下のものが挙げられる。

・文化資源学フォーラムの開催

「文化資源学フォーラムの企画と実践」という授業を通じて、学生の企画により、一般に広く文化資源学の課題を問いかけるフォーラムを、毎年開催してきた。2012 年度は、「地図 社会 未来～わたしたちの地図を探しにいこう」と題し、2013 年 2 月 16 日に法文 2 号館 1 大教室でフォーラムを開催した。また、2013 年度は、「酒食饗宴—うたげにつどう人と人」をテーマに、2014 年 2 月 22 日に弥生キャンパス弥生講堂アネックスセイホクギャラリーでフォーラムを開催した。

(3) 学会運営、研究誌の発行など

2002 年に本研究室を中心として学内外の文化資源学に関心を持つ研究者、実務家の集まりとして文化資源学会を設立した。また機関誌『文化資源学』を年一回発行し、2012 年 3 月に第 10 号、2013 年 3 月に第 11 号を刊行した。2014 年度の会員数は 308 人である。

(4) 国際交流の状況

2012 年度修士課程に 2 名（ブラジル人と中国人）、2013 年度博士課程に 1 名（韓国人）、の外国人留学生を受け入れた。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

木下 直之 (文化経営学)
小林 真理 (文化経営学)
古井戸 秀夫 (文字資料学・文献学)
渡辺 裕 (形態資料学)
佐藤 健二 (形態資料学)
月村 辰雄 (文字資料学・文献学)
大西 克也 (文字資料学・文書学)
中村 雄祐 (文字資料学・文書学)

(2) 助教の活動

吉澤 保

在職期間：2011年4月～現在

研究領域：フランス近代思想史

主要業績：

「ドゥルーズの個体化——ライブニッツを中心に——」、2012年、東京大学仏語仏文学研究会、『仏語仏文学』第45号

「ルソーとジュネーブ」、『フランス文化事典』、2012年、丸善出版、324-325頁

「聾啞者教育と盲人教育」、『フランス文化事典』、2012年、丸善出版、326-327頁

(3) 外国人教員の活動

ウィリアム・ハワード・コールドレイク：2011年10月～現在

研究領域：日本美術と建築の歴史

主要業績：

(学会発表)

国内、第68回学習院大学史料館講座「御門(ミカド)と日本の門建築」2012年9月15日

国外、“The Way of the Carpenter: Tools and Japanese Architecture”, Special Japan Forum Lecture for 40th Anniversary of the Reischauer Institute of Japanese Studies, Harvard University, 7 February, 2014, accompanying the exhibition “The Thinking Hand: Tools and Traditions of the Japanese Carpenter.”

(論文) “Architectural Antiquarianism, Japanese Models, and the Construction of a Modern Empire at the 1873 Vienna and 1910 Japan-British Exhibitions,” in Elizabeth Lillehoj (ed.), *Archaism and Antiquarianism in Korean and Japanese Art*, Chicago, Center for the Art of East Asia, University of Chicago, Art Media Resources, Inc., 2013, pp. 210-27.

(担当講義) Photography and Japan's Participation at the International Exhibitions (文化資源学演習) 院のみ

Japan and the Paris Expositions (文化資源学演習) 院のみ

Japan and the American International Expositions (文化資源学演習) 院のみ

Japan and the British International Exhibitions (文化資源学演習) 院のみ

文化資源としての日本建築 (文化資源学特殊講義) 学部共通

文化資源としての日本の住まい (文化資源学特殊講義) 学部共通

豊臣・徳川の霊廟。文化資源としての建築 (文化資源学特殊講義) 学部共通

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆等・題目一覧

2012年度

文化経営学専門分野

和泉聡子「プレイバック・シアター研究 テラー体験を支えるための一考察」(指導教員) 小林真理

長岡智子「戦後日米文化交流の構想と国際文化会館の建設」(指導教員) 木下直之

鯉沼広行「出版社という装置—文化と経済のジレンマ」(指導教員) 木下直之

作田知樹「公的助成と表現への制約をめぐる一考察」〈指導教員〉小林真理
 伊藤淑子「『地域の歴史』の形成と変容—昭和 50-60 年代の千葉縣市川市行徳地区にかかわる複数の主体に着目して—」〈指導教員〉小林真理
 鈴木恵可「日本の植民地統治と台湾における『銅像』建設」〈指導教員〉木下直之
 土本一貴「歴史的環境問題における住民と住民生活—名古屋市緑区有松の町並み保存を事例に—」〈指導教員〉小林真理
 廣瀬鮎美「地域アイデンティティと観光政策に関する考察：『北陸の小京都』福井県大野市を例に」〈指導教員〉小林真理
 三谷八寿子「バレエ・カンパニーの成立環境に関する考察—ニューヨーク・シティ・バレエの設立経緯から—」〈指導教員〉小林真理
 盧ユニア「朝鮮美術展覧会工芸部の研究」〈指導教員〉木下直之

形態資料学専門分野

竹内唯「明治期における＜少女＞のはじまり—雑誌『少女界』にみる編集方針の成立過程から—」〈指導教員〉渡辺裕

文献学専門分野

大内曜「美術新論社洋画講習会と斎藤与里」〈指導教員〉月村辰雄

2013 年度

文化経営学専門分野

澤田るい「戦後日本の環境衛生と教育映画—『百人の陽気な女房たち』が問いかけるもの—」〈指導教員〉木下直之
 希娜「現代中国における少数民族文化の保護—内モンゴル自治区の草原保護を事例に—」〈指導教員〉小林真理

清水雅行「内国勸業博覧会における噴水の研究」〈指導教員〉木下直之

形態資料学専門分野

大西美緒「二世花柳寿輔——日本舞踊家の誕生」〈指導教員〉古井戸秀夫
 春谷美帆「外国人女性記者ゾーイ・キンケイドによる歌舞伎紹介—英文雑誌『ザ・ファー・イースト』における『ザ・スラージ』を中心に—」〈指導教員〉古井戸秀夫

文献学専門分野

柳澤健太郎「玉川大学図書館波多野文庫の来歴と意義」〈指導教員〉中村雄祐

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲) (乙)
 なし

2013 年度

(甲)

形態資料学専門分野

光岡寿郎「変貌するミュージアムコミュニケーション—ミュージアムというメディアの形態資料学に向けて—」
 〈主査〉佐藤健二 〈副査〉古井戸秀夫・小林真理・中村雄祐・伊藤守

(乙)

なし

28 韓国朝鮮文化

1. 研究室活動の概要

本研究室は2002年4月1日、人文社会系研究科附属文化交流研究施設朝鮮文化部門を母体に開設された。大学院のみの独立専攻で、学部専修課程は設けられていない。大学院レベルにおいては、日本では初めて開設された韓国朝鮮文化に関する総合的な教育・研究組織である。

(1) 研究分野の概要

韓国朝鮮を研究対象とする歴史学1名、考古学1名、文化人類学1名、言語学1名、哲学1名の、合計5名の教員で構成される。また、外国人客員教授1名が在籍している。多様な方法論によって韓国朝鮮文化の解明に取り組み、総合的な韓国朝鮮文化研究を目指している。各教員は、文献資料の分析と現地での実地調査や資料収集の双方を重視しながら研究・教育を行っている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2002年度に修士課程（定員12名）が開設され、2004年度から博士課程（定員6名）が増設された。2007年度までは、専攻内は韓国朝鮮歴史社会コース、韓国朝鮮言語思想コース、北東アジア文化交流コースの3コースに分かれていたが、2008年度より韓国朝鮮歴史文化コース、韓国朝鮮言語社会コースの2コースに改組した。ただし、2007年度以前に入・進学した学生は旧3コースのいずれかに所属している。

専攻全体が有機的な関連をもって運営されており、総合的な韓国朝鮮文化の教育が行われている。学生には研究言語としての韓国朝鮮語に関する十分な運用能力が求められ、実力が不十分な学生に対しては支援プログラムを準備している。

各教員は学部教育にも関与し、専攻研究分野と関係の深い、東洋史学、西洋史学、考古学、社会学、言語学、中国思想文化学など、各専修課程の講義・演習を担当している。

(3) 研究室としての活動

1. 東京大学コリア・コロキウム

2003年度より国内外の韓国朝鮮に関する専門家による講演会を主催している。一般市民にも開放し、公開で行なっている。2012年度は5回、2013年度は4回開催した。

2. 講演記録の発行

『東京大学コリア・コロキウム講演記録（2012年度）』（2013年3月）、『同（2013年度）』（2014年3月）を刊行した。

3. 紀要の刊行

研究室の紀要『韓国朝鮮文化研究』12（2012年度）、13（2013年度）を刊行した。

(4) 国際交流の状況

ソウル大学校（韓国）、高麗大学校（韓国）、釜山大学校（韓国）、成均館大学校（韓国）、イリノイ大学校（米国）と交流協定を締結しており、交流協定に基づき、成均館大学校1名、および釜山大学校1名を、外国人研究生として受け入れた。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

韓国朝鮮歴史社会コース

教授	早乙女雅博	東アジア考古学・古代日韓交流史
准教授	六反田豊	韓国朝鮮中世近世史

韓国朝鮮言語思想コース

教授	川原秀城	東アジア思想史・中国朝鮮科学史
教授	福井玲	韓国朝鮮語学・言語学
客員准教授	朴鎮浩	韓国語文法論（2012年度）
客員教授	李賢熙	韓国語文法史（2013年度）

北東アジア文化交流コース

准教授	本田洋	社会人類学・韓国朝鮮文化研究
-----	-----	----------------

韓国朝鮮歴史文化コース

教授	川原秀城	東アジア思想史・中国朝鮮科学史
教授	早乙女雅博	東アジア考古学・古代日韓交流史
准教授	六反田豊	韓国朝鮮中世近世史

韓国朝鮮言語社会コース

教授	福井玲	韓国朝鮮語学・言語学
准教授	本田洋	社会人類学・韓国朝鮮文化研究
客員准教授	朴鎮浩	韓国語文法論（2012年度）
客員教授	李賢熙	韓国語文法史（2013年度）

(2) 助教の活動

木村拓（2009年4月1日から2013年3月31日） 朝鮮近世史

主要業績

（論文） 「朝鮮王朝世宗による事大・交隣両立の企図」、『朝鮮学報』、221、43-82頁、2011.10
「朝鮮王朝世宗代における女真人・倭人への授職の対外政策化」、『韓国朝鮮文化研究』、11、3-25頁、2012.3

金光来（2013年4月1日から現在） 朝鮮思想史

主要業績

（論文） 「星湖心学における「聖賢之七情」の解釈とその意義」、『中国哲学研究』、26、21-39頁、2012.9
「Sin Huidam's Criticism of Treatises on Catholic Doctrine: Points at Issue Reflected in His *Tonwa Sōhak Pyōn*」、『ACTA ASIATICA』、106、95-116頁、2014.2

(3) 外国人教員の活動

朴鎮浩

在任期間：2012年4月～2013年2月

研究領域：韓国語文法論

担当講義：韓国朝鮮語運用法（2）、韓国朝鮮語文法研究（3）、韓国朝鮮文化交流演習

李賢熙

在任期間：2013年4月～2014年2月

研究領域：韓国語文法史

担当講義：韓国朝鮮語運用法（2）、韓国朝鮮語文法研究（3）、韓国朝鮮文化交流演習

(4) 外国人研究員・内地研究員

学術振興会特別研究員

川西裕也

研究期間 2011年4月～2014年3月

研究題目 高麗・朝鮮時代の国家と文書

外国人研究員

李潤相

研究期間 2012年1月～2012年6月

研究題目 19世紀末日本人政治家の韓国認識

趙明濟

研究期間 2013年4月～2014年3月

研究題目 高麗における宋公案譚の受容と展開

韓禎訓

研究期間 2013年9月～2014年8月

研究題目 荷札木簡を利用した高麗時代水陸交通史研究

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

韓国朝鮮言語社会コース

遠藤正承「現代韓国語における外来語使用について—韓国語の漢字語・固有語志向と日本語の外来語志向—」

〈指導教員〉福井玲

曹佑林「植民地期朝鮮における女性雑誌の恋愛言説分析」〈指導教員〉本田洋

方乙晴「日本に暮らす中国朝鮮族の生活と意識—中国朝鮮族のアイデンティティ再考察—」〈指導教員〉本田洋

李仙喜「『捷解新語』原刊本5種の書誌考」〈指導教員〉福井玲

2013 年度

韓国朝鮮言語社会コース

鈴木ひとみ「ソウルにおける高齢者福祉サービス—被介護者及び家族介護者のニーズのズレをめぐって—」

〈指導教員〉本田洋

原田静香「韓国人青年の「エギョ」行為研究—「パフォーマンス」と「遊戯」の視点から—」〈指導教員〉本田洋

韓国朝鮮歴史文化コース

許暁静「衡平運動の展開とその社会的影響」〈指導教員〉六反田豊

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2012 年度

(甲) (乙)

なし

2013 年度

(甲)

なし

(乙)

韓国朝鮮歴史文化コース

森平雅彦「高麗・元関係の基本構造—モンゴル帝国の覇権と高麗王家—」

〈主査〉六反田豊 〈副査〉早乙女雅博・村井章介・佐川英治・吉田光男

吉田光男「近世ソウル都市社会研究—漢城の街と住民—」

〈主査〉六反田豊 〈副査〉早乙女雅博・吉田伸之・糟谷憲一・須川英徳

29 次世代人文学開発センター

1. 研究室活動の概要

昭和41年に文学部各専修課程研究室や講座を超えて新しい研究を展開するために文学部附施設として創設された文化交流研究施設が前身であり、改組により平成17年から現在の名称となった。センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行なう。したがって、センターにはほかの研究室のように学部学生・大学院生定員はない。次の3部門から構成されている。

a. 先端構想部門（〈文化交流〉、〈東アジア海域交流〉）

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、あるいは諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行い、かつ、それを公開發信していくことを目的とする。平成17年よりセンター主任として小佐野重利教授のほか、小島毅教授が兼任教員、平成21年からは佐藤慎一教授が特任教授となっている。平成25年度から、センター主任は小島教授に交代となった。本部門には、小島教授をリーダーとする文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（平成17年度から平成21年度まで）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」の拠点が置かれていた。教育面では、学部の「文化交流演習」「文化交流特殊講義」（非常勤講師によるものを含む）を開講するほか、外国人研究者による講演会やシンポジウムを開催して古代ローマ考古遺跡に関する発掘成果や、造形資料の電子化媒体による公開のための研究プロジェクトなどを発信してきた。センター紀要として、引き続き『文化交流研究』第25号（平成24年）と同第26号（平成25年）を刊行した。また、平成18年度より研究科所属教員の教育内容・方法についての研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）を兼ねて開始した文化交流茶話会を平成24年度、25年度も継続し、第27回から第35回まで実施した。

b. 創成部門（〈死生学〉、〈人文情報学拠点〉）

平成17年に島菌進教授（宗教学宗教史学）を兼任教員として設置された。その前段階は平成14年度に21世紀COE研究拠点プログラムの一つとして採用され、5年間23人の教員が事業推進担当者となって進めてきた「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」のプログラムである。平成19年度に本部門に寄付講座として設置された上廣死生学講座と、また平成19年度から5年間15人の教員が事業推進担当者となって進めてきた21世紀COE研究拠点プログラム「死生学の展開と組織化」と連携して、死生学の将来的な発展に向けて体制を整えていく役割を果たし、死生学・応用倫理センターの発足にともなってその使命を終えた。かわって、平成24年度からは、それまで萌芽部門に置かれていた〈データベース拠点・大蔵経〉が拡大改組して〈人文情報学拠点〉となり、インド哲学・仏教学から下田正弘教授が本センターに配置換えとなったほか、チャールズ・ミュラー特任教授（任期は平成25年9月まで）も創成部門に移った。25年11月にはミュラー教授があらためて着任した。教育面では「人文情報学概論」および「人文情報学特殊講義」を開講するとともに、大学院部局横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」を提供している。学外に対しても、日本における人文情報学（デジタルヒューマニティーズ）の構築、国際学会連合との関係形成を通して、日本の人文学の国際的な地位向上に大きな役割を果たしている。研究面では、大蔵経のデジタルテキストコーパスを基盤としつつ、京都大学人文科学研究所、国立情報学研究所、アメリカ、ドイツ等の諸大学研究所で構築された諸知識基盤と構造的に連携し、文字資料による世界最先端のデジタル知識基盤のモデルを提供している。本部門の兼任教員としては、長島弘明教授（日本文学）、武川正吾教授（社会学）、小林正人准教授（言語学）、高岸明准教授（美術史学）、高橋典之准教授（日本史学）、中村雄祐准教授（文化資源学）の6名がおり、下田教授・ミュラー教授とともにこれらの事業を推進している。

c. 萌芽部門（〈演劇学〉、〈データベース拠点・大蔵経〉、〈イスラーム地域研究〉、〈現代インド研究〉）

〈演劇学〉は、平成18年に演劇学・舞踊学の確立を目的として専任教員の古井戸秀夫教授により開設された。哲学（美学）・文学（国文学）・歴史学（日本史）を中心に展開されてきた研究の成果を基盤に、演劇学・舞踊学という新しい研究分野をどのようにして構想するか、ということ課題としている。教育面では、大学院人文社会系研究科文化資源学専攻において講座を持ち、学生の教育指導を行うほか、学部の授業として「藝能学特殊講義」を開講している。研究面では、日本の演劇・舞踊が形態資料・文字資料としていかなる文化的価値を持つのか、その特色はどこにあるのか、ということの究明を志している。〈データベース拠点・大蔵経〉は、平成19年に設置され、下田正弘教授が兼任してチャールズ・ミュラー特任教授とともに事業を推進していたが、上述のように、平成24年から〈人文情報学拠点〉として創成部門に移った。〈イスラーム地域研究〉は、大学共同利用法人人間文化研究機構と東京大学との研究協力協定により、平成18年6月にイスラーム地域研究を総合的に推進するための共同研究拠点として創設された。当初は小松久男教授、つづいて大稔哲也准教授を兼任教員としている。早稲田大学、上智大学、財団法人東洋文

庫などに設置された研究拠点とともにイスラーム地域研究ネットワークを形成しつつ、平成23年度からは「イスラームの思想と政治：比較と連関」をテーマとする共同研究に取り組んでいる。内外の研究者（センター流動教員として他部局・他大学教授4名、センター客員教員として外国人研究者1名）を受け入れ、共同研究を行うとともに、日本学術振興会特別研究員などの若手研究者を本センター研究員として受け入れている。〈現代インド地域研究〉は水島司教授（東洋史）を兼担教員としている。平成22年4月より、人間文化研究機構「現代インド地域研究」推進事業の一環として、京都大学、東京大学、広島大学、東京外国語大学、国立民族学博物館、龍谷大学の6大学に設置された拠点の一つとして、現代インドに関するネットワーク型の共同研究を推進している。本事業は現代インドの動態を全体的にとらえるとともに、将来を展望できるような学術的な視角と方法論を確立し、国内はもちろん国際的な連携研究も行う組織体制と学術環境を整えることを目的としている。東京大学拠点は、経済発展と環境変動という側面から、現在生じている様々なイシューの解決法を探り出し、将来への知を蓄積することを試みている。そのために、インドの経済と環境に関する基本的な資料や文献を収集・蓄積し、データベースを構築する作業を進め、それらをもとに、インド経済・環境の長期的な動向分析を行っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 教員（専任、兼担および特任教員）

○ 先端構想部門

2012-2013 年度

小佐野重利教授（文化交流）

小島毅教授（東アジア海域交流）

佐藤慎一特任教授

○ 創成部門

2012 年度

島菌進教授

一之瀬正樹教授

2013 年度

下田正弘教授

Albert Charles Muller 教授

長島弘明教授

武川正吾教授

小林正人准教授

高岸明准教授

高橋典之准教授

中村雄祐准教授

○ 萌芽部門

2012 年度

古井戸秀夫教授（演劇学）

松村一登教授

大稔哲也准教授（イスラーム地域研究）

水島司教授（現代インド地域研究）

下田正弘教授

Albert Charles Muller 特任教授

長島弘明教授

塚本昌則教授

中村雄祐准教授

本田洋准教授

2013 年度

古井戸秀夫教授

松村一登教授

大稔哲也准教授

水島司教授

30 死生学・応用倫理センター

1. 研究室活動の概要

「死生学・応用倫理センター」は、グローバルCOE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の後継組織として平成23年4月に設けられた。それに伴い、「上廣死生学・応用倫理講座」（旧称「上廣死生学講座」）を平成24年4月に改名し、死生学・応用倫理センターの下部組織として位置づけられることになった。

センターの運営は運営委員会（会田薫教授、池澤優教授、一ノ瀬教授、小島教授、榊原教授、佐藤教授、下田教授、島嶺教授（平成25年3月まで）、堀江准教授（平成25年4月から））により行われる。所属教員として、それ以外に秋山教授、大塚准教授が加わる。

死生学・応用倫理センターの活動は、以下の4つを柱とする。

①医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育：これらは今までグローバルCOEの活動として行われてきたが、今後もそれを更に継承、拡充していく。それはアカデミズムを市民に開いていく死生学の社会還元モデルケースとなるであろう。

②部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の開設：文学部内現に「応用倫理教育プログラム」として応用倫理教育を展開してきたが、それを学部・大学院双方において全学的に開かれた部局横断型教育プログラムに拡充し、展開していく。

③国際シンポジウム・研究集会：21世紀COE、グローバルCOEを通して、極めて多くの国際シンポジウム、研究集会が開かれたが、それを通して死生学に関する国際的なネットワークができてつつあり、それを維持、発展させていくためにも、年に数回の国際シンポジウムと研究集会を行っていく。

④次世代を担う若手研究者の育成：COEプログラムの場合と同様、特任研究員を雇用し、センターの運営を担当してもらうとともに、将来の死生学・応用倫理を担う若手研究者を育成する。そのためにグローバルCOEの機関誌『死生学研究』を『死生学・応用倫理研究』と改称した上で、継続して発行し、成果を発表する場と位置づける。

以下、この4つについて活動報告を行う。

①医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育

これは「上廣死生学・応用倫理講座」の担当であり、平成24年度には8月と1月には《医療・介護従事者のための死生学》セミナーを東京大学において開催したほか、臨床倫理セミナーを5月（富山県砺波市）、8月（札幌）、8月（名古屋）、9月（盛岡）、2月（大阪）に開催した。また、1ヶ月に1～2回、臨床死生学・倫理学会を開催した。

平成25年度には「医療・介護従事者のための死生学」は4月に春期講座を、8月に夏期セミナーを開講した。「臨床倫理セミナー」は仙台、札幌、長野、愛媛、金沢、神戸、大阪、広島で計12回行った。また、本郷及び地方で「臨床倫理事例検討会」を3回、「臨床死生学・倫理学会」を10回開催したほか、2月9日（日）に科学技術振興機構社会技術研究開発センター主催の公開シンポジウム「人生の最終段階のケアを支える文化の創成に向けて」（伊藤謝恩ホール）の企画と運営を、上廣死生学・応用倫理講座が実質的に担当した。

②部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理」

平成24年4月から「死生学・応用倫理教育プログラム」を新たに開設した。平成24年度の開設科目は28科目（うち死生学・応用倫理センターで直接開講するのは19）である。平成25年度には開設科目数は33に増加した。以下が、平成25年度に開設した「死生学・応用倫理教育プログラム」授業科目である。

死生学概論（死生学の射程） 清水哲郎ほか

応用倫理概論（応用倫理入門） 池澤優ほか

死生学演習Ⅰ（臨床死生学・倫理学の諸問題） 清水哲郎・会田薫子

死生学演習Ⅱ（死生学の理論を求めて） 堀江宗正

死生学演習Ⅲ（死生学の基礎文献を読む） 池澤優

応用倫理演習Ⅰ（生命・領土・情報の「所有」をめぐるエシックス） 一ノ瀬正樹

応用倫理演習Ⅱ（生権力の現在） 小松美彦

応用倫理演習Ⅲ（生命をめぐる科学と倫理） 一ノ瀬正樹・池澤優

応用倫理演習Ⅳ（臨床倫理事例検討） 清水哲郎・会田薫子

応用倫理演習Ⅳ(1)（生命倫理の現在(1)） 会田薫子

応用倫理演習Ⅳ(2)（生命倫理の現在(2)） 会田薫子

死生学特殊講義（死生学の射程（続）） 清水哲郎・会田薫子

死生学特殊講義（質的研究法） 会田薫子
 死生学特殊講義（死生のケアの現象学） 榊原哲也
 死生学特殊講義（臨床死生学原論） 清水哲郎
 死生学特殊講義（心理学的死生学の展開） 堀江宗正
 死生学特殊講義（死生学の基本的諸テーマ） 宇都宮輝夫
 応用倫理特殊講義（臨床倫理学原論） 清水哲郎
 応用倫理特殊講義（社会のなかの環境倫理） 鬼頭秀一
 応用倫理特殊講義（自然の時間、人間の時間） 内山節
 応用倫理特殊講義（グローバルな貧困と暴力の倫理学） 馬淵浩二
 倫理学特殊講義（学びと教育の社会倫理学） 川本隆史
 特別講義医事法 樋口範雄、児玉安司、ロバート・レフラー【法学部】
 医療倫理学 赤林朗・瀧本禎之【医学部】
 家族看護学 上別府圭子【医学部】
 生・権力論と教育 金森修【教育学部】
 西洋教育史概説（学びと教育の社会倫理学） 川本隆史【教育学部】
 生命倫理 正木春彦ほか【農学部】
 技術倫理 正木春彦ほか【農学部】
 応用倫理学概論 石原孝二【教養学部】
 特殊講義 文化の社会科学 市野川容孝【教養学部】
 認知行動科学と現代 佐倉統・武藤香織【教養学部】
 科学技術社会論特論Ⅰ 廣野喜幸【教養学部】

③国際シンポジウム・研究集会

平成24年は、6月16日（土）にドイツから Reimer Gronemeyer 教授（ユストゥス・リービヒ大学）を招聘して講演会「終末期ケアの変遷：緩和技術とスピリチュアル面への配慮の狭間で」（法文二号館教員談話室）を、10月21日（日）に国立長寿医療センターと共催でシンポジウム「長寿時代の死生学」（安田講堂）を、3月8日（金）にフランス国立極東学院と共催で国際シンポジウム「災害が遺したもの—語りつく記憶と備える文化」（法文二号館一番大教室）を開催した。それぞれの内容は以下の通りである。

シンポジウム「長寿時代の死生学」

基調講演 島菌 進「日本人の死生観を読む」
 対談 島菌 進・清水 哲郎「死生観と人工栄養をめぐる」
 シンポジウム「最期まで自分らしく生きるために：終末期および看取りの医療とケアの実際」
 座長：三浦 久幸、甲斐 一郎
 シンポジスト：西川 満則、横江 由理子、桑田 美代子、川越 正平
 指定発言者：樋口 範雄、飯島 節

国際シンポジウム「災害が遺したもの—語りつく記憶と備える文化」

司会 小島 毅・榊原 哲也
 趣旨説明 池澤 優

第1部 災害の記憶

保立 道久「地震の神話とタブーの忘却—九世紀の大地震・「貞観地震」の記憶」
 グレゴリー・ボサール「東南紀の海岸線における津波による死者の記憶を伝える」

第2部 災害に備える文化

ニコラ・エリソン「戦争、台風と商品化—トナク社会の経験における社会・環境的断絶としての災害」
 セシル ブリス「仮説住宅と仮の生」
 石田 葉月「低線量被ばく問題を考える—ひとりの福島県民、そしてエネルギー経済学者として」

コメント 島菌 進、アンヌ・ブッシイ

平成25年度は、11月30日、12月1日の両日、東京大学法文一号館、二号館において日本生命倫理学会第二五回年次大会を死生学・応用倫理センターの主催にて開催した。年次大会の大会テーマは「死生学と生命倫理」であり、参加者は750名にのぼった。センターとしては、大会長講演「生命倫理と伝統的文化」（池澤優）、シンポジウム「日本人の生命観と生命倫理」「死生学と臨床倫理」「低線量被曝と生命倫理」を開催したほか、アメリカから Nancy

Berlinger 氏 (Hastings Center) を招聘し講演会 "Improving care near the end of life: What good can ethics do?" を開催した。シンポジウムの内容は以下の通りである。

シンポジウム「日本人の生命観と生命倫理」(法文一号館 25 番教室)

オーガナイザー：池澤 優、榊原 哲也

発題 竹内 整一「「花びらは散る 花は散らない」論」

下田 正弘「仏教の生命倫理観について」

香川 知晶「文化の違いと生命倫理」

シンポジウム「死生学と臨床倫理」(法文一号館 25 番教室)

オーガナイザー：霜田 求、会田 薫子

発題 三浦 靖彦「臨床現場における「死生学と生命倫理」」

濱口 恵子「患者さんにとって善いこととは？—がん専門病院の看護師の立場から」

樋口 範雄「終末期医療と法—決められない法と倫理、その方向性」

清水 哲郎「臨床倫理をめぐるケア従事者と研究者の協働」

大会企画 25 周年記念シンポジウム「低線量被曝と生命倫理」(法文一号館 25 番教室)

オーガナイザー：堀江 宗正

島菌 進「放射線の健康影響問題の生命倫理的な次元とその討議」

加藤 尚武「臨床と予防—放射線障害の認識論」

④次世代を担う若手研究者の育成

死生学・応用倫理の未来を担う若手研究者を育成するために、平成 24 年度は特任研究員 5 名 (うち 2 人は任期半年) を、平成 25 年度はセンターとして特任研究員 4 名を雇用したほか、上廣死生学・応用倫理講座で 3 名の特任研究員を雇用した。

特任研究員はセンターの諸活動の中核を担うだけでなく、センター機関誌である『死生学・応用倫理研究』に研究成果を積極的に発表することが期待されている。『死生学・応用倫理研究』は、グローバル COE「死生学」の機関誌として発行してきた『死生学研究』を改名して継続刊行しているものであり、平成 25 年度で 19 号になる。

また、上廣死生学・応用倫理講座では高齢患者と家族の意思決定のためのガイドブック『高齢者ケアと人工栄養を考える—本人・家族の選択のために』(清水哲郎・会田薫子著、医学と看護社、2013) を刊行し、死生学の成果を実践の現場に提供することに務めている。

2. 構成員・専門分野

(1) 所属教員

会田 薫子、秋山 聡、池澤 優 (センター長)、大稔 哲也、榊原 哲也、清水 哲郎、堀江 宗正 (平成 25 年 4 月から)

(2) 特任研究員

勝沼 聡、堀田 和義、Erik Schicketanz (以上、グローバル COE から継続)

圓増 文、大島 智靖、早川 正祐、宮村 悠介 (以上、平成 25 年 4 月から)

(3) 事務補佐員

安野 裕美

3 1 北海文化研究常呂実習施設

1. 実習施設活動の概要

当施設は、人文社会系研究科では本郷キャンパスの外にある唯一の施設である。施設が所在する北海道北見市常呂町は、オホーツク海の沿岸、北海道東部で最大の河川の一つである常呂川の河口に位置している。この川と海によってもたらされる豊かな資源に支えられて、この地には旧石器時代から近世アイヌ期に至る約 2 万年もの間、多数の先史文化の遺跡が連綿と遺されてきた。特に国の指定史跡である史跡常呂遺跡は、カシワやナラの林の中に 2,500 を超える堅穴住居跡が埋まりきらずに窪みとして残っているという、大規模かつ特異な遺跡である。

この地域における文学部の調査研究活動は 1955 年に開始された。端緒はアイヌ語方言の研究を目的とした言語学の調査であったが、1957 年からはこの地域の先史文化の解明を目的とした考古学的な調査が開始され、以後半世紀の間、発掘・測量などの考古学調査が毎年行われてきた。また考古学・言語学以外にも、開拓民の宗教への関わりかたを究明しようとする宗教学の調査なども行われている。その後、1967 年からは助手 1 名が文学部考古学研究室から派遣され、1973 年には施設として正式に発足した。現在、施設の建物としては、研究室、資料陳列館、学生宿舎、資料保存センターが存在し、准教授・助教各 1 名、有期雇用職員（管理人等）2 名が現地のスタッフとして活動を行っている。活動の核となるのは考古学実習を兼ねた発掘調査であり、本郷の考古学研究室と協力しながら、毎年夏から秋にかけて施設周辺の遺跡群を対象とした発掘調査を実施している。また、2004 年度からは一般講義として博物館学実習が毎年夏に当施設で開講され、考古学専修以外の学生も展示製作等の実習を受講している。資料陳列館では常設展や企画展等の博物館活動もおこなっており、2013 年度には資料陳列館を含む常呂実習施設全体が、博物館法の規定する博物館相当施設に指定されている。

半世紀に及ぶ当地域での調査成果は 13 冊の報告書として刊行され、北海道の考古学研究の基礎をなす成果として高く評価され、広く利用されている。また近年は、環オホーツク海沿岸地域を中心とした北方地域との比較考古学研究を重要な研究課題とし、2012 年度～2013 年度にかけてもロシア連邦のアムール下流域やサハリンにおいて、現地の研究者や本学の考古学研究室の教員などと協同しながら発掘調査を実施している。それらの成果についても「東京大学常呂実習施設研究報告」と題した 13 冊の報告書によって刊行してきたが、これは今まで調査実績がきわめて少なかった北方地域の実態を明らかにしたものとして、高い評価を受けている。

北海道に位置する当施設は、その活動において地域との連携を重視してきた。当施設に隣接した史跡常呂遺跡は北見市によって史跡公園「ところ遺跡の森」として整備され、屋外の復元堅穴住居・ガイダンス施設・埋蔵文化財センターを備えた公園として一般公開されているが、当施設は教育委員会が管轄するこの史跡公園と一体となって教育普及活動を推進している。さらに 2000 年度からは東京大学文学部公開講座と銘打った出前講座を北見市で開講し、2013 年度までに 17 回を数えている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

熊木 俊朗 研究領域 北東アジア考古学

(2) 助教の活動

國木田 大 KUNIKITA, Dai

在職期間 2010 年 4 月～現在

研究領域 北東アジア考古学

主要業績

(論文)

福田正宏・阿子島香・國木田大・吉田邦夫、「宗仁式土器の再検討—伊東信雄コレクションの型式と年代—」、『Bulletin of the Tohoku University Museum』、11、201-208 頁、2012.3

國木田大、「三内丸山遺跡の盛土の形成過程とその場所性の解明」、『特別史跡三内丸山遺跡年報』、15、64-72 頁、2012.3

國木田大、「遺跡における層序の年代決定」、『考古学ジャーナル』、632、15-19 頁、2012.9

山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・國木田大・松浦秀治・諏訪元・大城逸朗、「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査（2009～2011 年）—沖縄諸島における新たな更新世人類遺跡—」、『Anthropological Science(Japanese Series)』、120(2)、121-134 頁、2012.12

- Dai Kunikita, Igor Shevkomud, Kunio Yoshida, Shizuo Onuki, Toshiro Yamahara, Hiroyuki Matsuzaki, 「Dating charred remains on pottery and analyzing food habits in the Early Neolithic period in Northern Asia」, 『Radiocarbon』, 55, 1334-1340 頁, 2013
- Kunio Yoshida, Dai Kunikita, Yumiko Miyazaki, Yasutami Nishida, Toru Miyao, Hiroyuki Matsuzaki, 「Dating and stable isotope analysis of charred residues on the Incipient Jomon pottery (Japan)」, 『Radiocarbon』, 55, 1322-1333 頁, 2013
- 松本直子・松谷暁子・國木田大・吉田邦夫, 「出崎船越南遺跡出土土器付着炭化物について」, 『古代吉備』, 25, 57-69 頁, 2013.4
- 出穂雅実・國木田大・尾田識好・山原敏朗・北沢実, 「北海道十勝平野の後期旧石器時代遺跡の地質編年: 新たな AMS 放射性炭素年代の追加とその意義」, 『旧石器研究』, 9, 137-148 頁, 2013.5
- 國木田大, 「近年の考古学における 14C 年代研究」, 『月刊地球』, 408, 529-536 頁, 2013.9
- 山崎真治・横尾昌樹・伊藤圭・國木田大・新里尚美, 「沖縄先史土器の起源と南下仮説」, 『九州旧石器』, 17, 283-295 頁, 2013.11
- 大貫静夫・國木田大・吉田邦夫, 「遠東北部新石器時代の演進—从额拉苏 C 遗址采集陶器的新测年代谈起」, 『昂昂溪考古文集』, 245-248 頁, 2014
- 國木田大・吉田邦夫・大貫静夫, 「额拉苏 C 遗址出土陶器附着炭化物的 14C 年代測定」, 『昂昂溪考古文集』, 249-250 頁, 2014
- (学会発表)
- 国内、佐藤宏之・I.Shevkomud・大貫静夫・森先一貴・福田正宏・熊木俊朗・國木田大・S.Koshityna・M.Gorshkov・E.Bochkareva・尾田識好・夏木大吾・大澤正吾・内田和典・Yu.A.Mochanov, 「アムール下流域コンドン 1 遺跡の調査—更新世/完新世移行期の石器群—」, 日本考古学協会 2012 年度大会, 東京, 2012.5.27
- 国内、阿部昭典・國木田大・吉田邦夫, 「縄文時代中期末葉の注口付浅鉢の付着物の自然科学分析」, 日本考古学協会 2012 年度大会, 東京, 2012.5.27
- 国内、國木田大・大貫静夫・Igor Shevkomud・山原敏朗・吉田邦夫・松崎浩之, 「アムール川流域および北海道における初期新石器時代の年代研究と食性分析」, 日本文化財科学会第 29 回大会, 京都, 2012.6.23
- 国内、國木田大・吉田邦夫, 「炭素・窒素同位体分析を用いたクッキー状炭化物の由来解明と年代測定」, 日本文化財科学会第 29 回大会, 京都, 2012.6.23
- 国内、中村耕作・國木田大, 「クッキー状・パン状炭化物の炭素・窒素同位体分析とその出土状況」, 長野県考古学会 50 周年記念プレシンポジウム「縄文時代中期の植物利用を探る」, 長野, 2012.6.23
- 国際、KUNIKITA D, SHEVKOMUD I, YOSHIDA K, ONUKI S, YAMAHARA T, MATSUZAKI H, 「Dating and analyzing food habits in the Early Neolithic period in Northeast Asia」, 21st International Radiocarbon Conference, Paris, France, 2012.7.11
- 国際、YOSHIDA K, KUNIKITA D, MIYAZAKI Y, MATSUZAKI H, 「Dating and stable isotope analysis of charred residues on the Incipient pottery in the Jomon period」, 21st International Radiocarbon Conference, Paris, France, 2012.7.11
- 国内、國木田大, 「縄文時代中・後期の環境変動とトキノキ利用の変遷」, 公開シンポジウム「東北地方における中期/後期変動期 4.3ka イベントに関する考古学現象①」, 山形, 2012.7.15
- 国内、國木田大・阿部昭典・吉田邦夫・松崎浩之, 「三十稲場式土器の年代と食性分析」, 津南シンポジウムⅧ「三十稲場式土器文化の世界—4.3ka イベントに関する考古学現象②」, 新潟, 2012.10.13
- 国内、大澤正吾・I.シェフコムード・福田正宏・大貫静夫・熊木俊朗・國木田大・佐藤宏之・尾田識好・夏木大吾・M.ゴルシュコフ・E.ボチカレバ・内田和典・森先一貴, 「ウディリ湖遺跡群の考古学的調査 (2012 年度)」, 第 14 回北アジア調査研究報告会, 石川, 2013.2.9
- 国内、熊木俊朗・國木田大・山田哲, 「2012 年度北海道北見市大島 2 遺跡発掘調査報告」, 第 14 回北アジア調査研究報告会, 石川, 2013.2.9
- 国内、阿部昭典・國木田大, 「縄文時代後期の蓋付深鉢出現の意義」, 日本考古学協会第 79 回総会, 東京, 2013.5.26
- 国内、山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・國木田大・海部陽介, 「琉球列島における後期更新世/完新世移行期の人類とその文化」, 日本旧石器学会第 11 回講演・研究発表シンポジウム, 神奈川, 2013.6.15
- 国内、國木田大, 「縄文土器料理の中身を探る」, 帯広百年記念館博物館講座, 北海道, 2013.7.13

国際、KUNIKITAD、「Radiocarbon dating on archaeological studies in Northeast Asia」、Study on adaptive strategy and interactive scenarios of the human communities in the island world of the prehistoric Northeast Asia, Yuzhno-Sakhalinsk, Russia, 2013.12.23

国内、山田哲・佐藤宏之・國木田大・役重みゆき・夏木大吾・高鹿哲大・尾田識好、「北海道北見市吉井沢遺跡 2013 年度発掘調査」、第 27 回東北日本の旧石器文化を語る会、北海道、2014.2.1

国内、國木田大、「石刃鏃石器群の年代」、『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明－「石刃鏃文化」に関する新たな調査研究－』研究集会、東京、2014.2.15

国内、夏木大吾・ワシレフスキー,A・大貫静夫・佐藤宏之・グリシェンコ,V・福田正宏・熊木俊朗・國木田大・パシェンツェフ,P・モジャエフ,A・森先一貴・ペレグドフ,A・役重みゆき・高鹿哲大・ルシカ,G、「2013 年度スラブナヤ 5 遺跡発掘調査報告」、第 15 回北アジア調査研究報告会、北海道、2014.3.1

国内、佐藤宏之・夏木大吾・國木田大・役重みゆき・高鹿哲大・山田哲・尾田識好、「北海道北見市吉井沢遺跡の発掘調査」、第 15 回北アジア調査研究報告会、北海道、2014.3.1

国内、福田正宏・佐藤宏之・國木田大・役重みゆき・夏木大吾・垣内彰悟・久我谷溪太・西村広経・高鹿哲大・熊木俊朗・辻誠一郎・森先一貴、「北海道湧別市川遺跡の発掘調査」、第 15 回北アジア調査研究報告会、北海道、2014.3.1

国内、熊木俊朗・國木田大・山田哲、「2013 年度北海道北見市大島 2 遺跡発掘調査報告」、第 15 回北アジア調査研究報告会、北海道、2014.3.1

国内、熊木俊朗・I.シェフコムード・福田正宏・國木田大・M.ゴルシュコフ・大貫静夫・A.シポバロフ・M.ガブリルチュク、「アムール河口域ダリジャ湖遺跡群の考古学的調査 (2013 年度)」、第 15 回北アジア調査研究報告会、北海道、2014.3.1

(研究報告書)

國木田大・大坂拓・吉田邦夫、「江豚沢 I」、193-214 頁、2012.7

國木田大、「高梨学術奨励基金年報 (平成 23 年度研究成果概要報告)」、財団法人高梨学術奨励基金、82-89 頁、2012.11

辻圭子・國木田大、「御所野遺跡IV」、124 頁、2013.3

3 2 多分野交流プロジェクト研究

多分野交流プロジェクト研究は、平成 7 年 4 月に大学院が改組され、いわゆる「大学院重点化」が行なわれた際に、その改革の中核的な位置を占めるものの一つとして発足した。すでに平成 5 年度より部分的に試行されてはきたが、平成 7 年度の正式な発足により、本プロジェクトは人文社会系研究科の専任教員に加え、15 名の客員教員（併任教授 5 名、連携教授・助教授 10 名）の参加を得て、本格的にスタートすることになったのである。

発足に際しては、＜人間と価値＞、＜歴史と地域＞、＜創造と発信＞、＜社会と環境＞という 4 つの大テーマが立てられた。そして、それぞれのグループの主査のもとに、多くの人文社会系研究科所属教員と複数の客員教員（1 プロジェクト平均 3～4 名）が集まって共同研究の態勢を整え、博士課程の大学院生の参加を得て、共同研究が進められてきた。なお 2000 年度からは、より広範な大学院生の参加を認めるべきであるという考え方から、院生は博士課程に限定せず、修士課程院生の参加も認めている。

このプロジェクトは、本研究科がその長い歴史のなかで培ってきた学問諸分野の個々の成果を基礎にしながら、各領域間での交流を行ない、人文・社会系の学問に新たな活力を与えようとするものである。いずれの講座においても、専門もさまざまに異なる、まさに多分野からの学生が参加しており、そういった意味でこのプロジェクトは、教員にとってはもちろんのこと、今後の学界の発展を担っていくべき若い大学院生たちにとっても、よき創造的な刺激の場として機能している。

平成 11 年度からは、発足当初の 4 つの基本的なテーマに限らず、柔軟に様々なテーマに対応することによって、本プロジェクトの持つ潜在的な可能性をさらに追求することになった。この年に設けられた＜情報と文化：文化資源と人文社会学＞は、新設を計画していた「文化資源学」専攻を準備するためのプロジェクトであり、院生のほか、文化資源学ワーキング・グループ全員と、本学以外の諸文化機関の専門家が参加した。また平成 14 年度の「人間の尊厳、生命の倫理を問う」は、同年新設の「応用倫理教育プログラム」の一環をなす演習としても認定された。このように多分野交流プロジェクト研究は、人文社会系における新しい研究領域を開拓していくための重要な役割を担うようになっており、これは本プロジェクトにとって新たな重要な展開といえよう。また、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災とそれに続く原子力発電所の事故についても、下記の「生命をめぐる科学と倫理」において主題的に論じられることとなり、この多分野交流プロジェクトが、新しい研究領域の開拓と同時に、学問が実社会へと還元・発信されていく場としての機能をも果たすようになっていったことは特筆すべき事態であったと言える。3.11 に関する議論は、平成 24 年、25 年と、継続的に行われ、多分野交流の特筆が大いに発揮される内容となった。

なお、多分野交流プロジェクト研究の成果を伝える手段として、年に数回ニューズレターが発行されている。ニューズレターにはプロジェクト案内の他、関連エッセイなども掲載されている。

平成 24 年度（2012 年度）・平成 25 年度（2013 年度）に開講されたプロジェクトは以下の通り。

平成 24 年度（2012 年度）

生命をめぐる科学と倫理（島藺進・一ノ瀬正樹）

人文情報学概論（下田正弘）

近代日本のテキストを読む：文学・歴史・社会の交流（佐藤健二）

平成 25 年度（2013 年度）

生命をめぐる科学と倫理（一ノ瀬正樹・池澤優）

人文情報学概論（下田正弘）

リズムの諸問題 1 リズムの諸相（鈴木泉）

3 3 朝日講座

朝日講座「知の冒険——もっともっと考えたい、世界は謎に満ちている」は、朝日新聞社の寄付によって2011年から始まった。5年度にわたって開講される学部横断型の授業である。文学部教員が授業内容の構成および成績評価を行い、文学部教務係が履修登録などの事務を取り扱う。他方で、東京大学大学総合教育研究センター（以下大総センター）に朝日新聞社寄付研究部門が設置され、講座運営を担当する専任の教員がおかれている（2011.10-2014.3は冨澤かな特任助教）。

このように朝日講座は文学部科目でありながら、全学部後期課程の履修と、大学院生の振替履修を対象とし、文理の枠組みを超えた広い視点を養うことをめざしてきた。

2011年度は、加藤陽子教授が担当し、「震災後、魂と風景の再生へ」をテーマに掲げて出発した。東日本大震災によってもたらされた壮絶な悲惨に向き合う中で、様々な学問はいったい何を語りうるのかということが多様な立場から議論した。

2012年度は、阿部公彦准教授が「知と幸福——研究の現場から考える「しあわせ」概念」というテーマを設けた。「幸福」という概念がさまざまな知のフィールドでいかなる意味を持つのかについて、ときには批判的な視点をまじえながら、考察することに努めた。

2013年度には、木下直之教授が担当し、「境界線をめぐる旅——ヒト・家族・社会から領土・国家・宇宙まで」をテーマとした。人間が引いている様々な境界線がもつ意味について、活発に議論を展開していくことができた。（各年度の講義情報は文末を参照。）

朝日講座では、毎回、多様な学問分野からのスピーカーを招き、学生が主体的に議論に取り組むという新しい形態の授業をめざしてきた。年度によって、少しずつ授業の進め方は変化してきたが、2013年度には、履修者が担当の回にわかれて事前に議論すべき論点を提示する準備をしたうえで、グループワークにおける討論を進めた。専門分野を異にする学生間のアクティブラーニングが実現されていることに加え、このような組織化において、TAが大きな役割を果たすことも、この朝日講座の特長といえる。

このように、全学的な教育改革に資する新たな授業の形を提示することが朝日講座の最大の目的であるが、同時にその教育成果を広く社会に還元、共有することも重視している。ホームページ（<http://www.u-tokyo-asahikouza.jp/>）及びツイッター（東京大学朝日講座 @Asahi_Koza）を活用して講義情報を発信し、また各年4、5回の講義を公開講座として一般からの聴講者を受け入れている他、2012年度からは試行的に希望する高等学校にリアルタイム配信を行うなど、開かれた形態の授業を模索している。高校への配信にあたっては、電子会議システム「WebEx」を利用することで、保存・再利用の危険なく高い保守性のもとに講師映像と講義資料画像を送信することが可能となっている。担当者間で把握している限りでは、単位を認定する通常講義の学外への同時配信は本学初の試みである。正規履修者の学びを阻害することのないよう配慮しつつ、2012年度は6校、2013年度は13校への配信を行った。また、授業の内容については映像記録を残し、著作権処理と編集を加えた講義資料と映像をUTokyo OCW（<http://ocw.u-tokyo.ac.jp/>）上で順次インターネット公開している。撮影・配信業務は、大総センターの特任助教および技術専門職員の監督・補助のもと、TAが行っている。

以上のように、朝日講座は、実験的・試行的な要素を多く含む新しい授業であると言える。学部三年生以上の学生にとって意義のある教養教育として、一定の役割を果たすように努力してきたが、いつその工夫と模索が求められているとも言えるだろう。

各年度の講義

2011年度 テーマ：「震災後、魂と風景の再生へ」

- 第1回 10月7日 加藤陽子（東京大学大学院人文社会系研究科 日本史学）
「天災と国防 寺田寅彦との対話」
- 第2回 10月14日 阿部公彦（東京大学大学院人文社会系研究科 英文学）
「詩はなぜ死を語るのか」
- 第3回 10月21日 鈴木淳（東京大学大学院人文社会系研究科 日本史学）
「災害と歴史学」

- 第4回 10月28日 一ノ瀬正樹（東京大学大学院人文社会系研究科 哲学）
「死者とは誰なのか——震災犠牲者を想いながら」
- 第5回 11月4日 マイク・モラスキー（一橋大学大学院 社会科学）
「居酒屋と喫茶店に見られる昭和ノスタルジー ——〈第三の場〉から再生を考える」
- 第6回 11月11日 目黒公郎（東京大学生産技術研究所都市基盤安全工学国際研究センター長）
「東日本大震災を踏まえた首都圏の地震防災対策のあり方」
- 第7回 11月18日 濱田純一（東京大学総長） ＊公開講義
「リスクと自由——「表現」することの効用と限界」
- 第8回 11月25日 松本三和夫（東京大学大学院人文社会系研究科 社会学）
「「構造災」を越えて—国策の失敗軌道をどう転換するか—」
- 第9回 12月2日 児玉龍彦（東京大学先端科学技術センター システム生物医学）
「原発事故と除染の科学」
- 第10回 12月9日 浅見泰司（東京大学空間情報科学研究センター・センター長）
「大震災・復興計画と空間情報」
- 第11回 12月16日 若宮啓文（朝日新聞社主筆） ＊公開講義
「新聞にできるのは何か—3. 11が問うたもの」
- 第12回 1月13日 神里達博（東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻特任准教授）
「BSEと放射能をめぐる「食」の問題—科学と政治のはざまで」
- 第13回 1月20日 田原（詩人、H氏賞受賞） ＊公開講義
「震災と詩歌」
- 第14回 1月27日 瀬織一起（東京大学地震研究所 地震学）
「東日本大震災と科学の限界」
- 第15回 2月3日 佐伯一麦（作家、三島由紀夫賞、野間文芸賞受賞） ＊公開講義
「震災と言葉」

2012年度 テーマ：「知と幸福 — 研究の現場から考える「しあわせ」概念」

- 第1回 10月1日（初回拡大回） ＊公開講義
玄田有史（東京大学大学院社会科学研究所 労働経済学）
「幸福と希望の曖昧な世界」
加藤陽子（東京大学大学院人文社会系研究科 日本史学）
「対談でつなぐ、去年と今年、あるいは、大災害と幸福の距離」
- 第2回 10月15日 菅野覚明（東京大学大学院人文社会系研究科 倫理学）
「極楽浄土はどこにある？」
- 第3回 10月22日 長谷部恭男（東京大学大学院法学政治学研究科 憲法学）
「憲法学における幸福」
- 第4回 10月29日 唐沢かおり（東京大学大学院人文社会系研究科 社会心理学）
「心の仕組みと感情の機能」
- 第5回 11月5日 塚谷裕一（東京大学大学院理学系研究科 植物学）
「植物の幸福」
- 第6回 11月12日 林良博（東京農業大学農学部バイオセラピー学科 動物学） ＊公開講義
「動物たちの「しあわせ」と人間中心主義の狭間で」
- 第7回 11月19日 武田晴人（東京大学大学院経済学研究科 経済史）
「経済学のふしあわせな生い立ち」
- 第8回 11月26日 大月敏雄（東京大学大学院工学系研究科 建築学）
「幸せに住むということはどういうことか？」
- 第9回 12月3日 トム・ガリー（東京大学大学院総合文化研究科 辞書学／言語教育）
「幸福の言葉、幸福な言葉、幸福という言葉」
- 第10回 12月10日 柴田元幸（東京大学大学院人文社会系研究科 アメリカ文学） ＊公開講義
「幸福とアメリカ文学」

- 第11回 1月7日 笠井清登（東京大学大学院医学系研究科 精神医学）
「精神医学とは何か：「脳と精神と生活の医学」による個人の精神的幸福、そして社会の豊かさへの貢献」
- 第12回 1月21日 大野博人（朝日新聞 論説主幹）
「なぜ「人の不幸」を伝えるのか」
- 第13回 1月28日 原研哉（武蔵野美術大学基礎デザイン学科 デザイナー） ＊公開講義
「HOUSE VISION 産業の未来を可視化する」

2013年度 テーマ：「境界線をめぐる旅——ヒト・家族・社会から領土・国家・宇宙まで」

【序論 なぜ境界線を問題にするのか】

- 第1回 10月7日（拡大回） ＊公開講義
秋山聰（東京大学大学院人文社会系研究科 美術史学）
「聖なるモノと俗なるモノ —西洋中近世における聖性付与の諸相」
木下直之（東京大学大学院人文社会系研究科 文化資源学）
「ゴミと宝物・本物とニセモノ」

【私と他者】

- 第2回 10月21日 沼野充義（東京大学大学院人文社会系研究科 現代文芸論）
「文学と越境——くあいまいな日本に境界はあるのか？」
- 第3回 10月28日 清水哲郎（東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 臨床死生学・倫理学）
「生と死／living と dying」
- 第4回 11月11日（拡大回） ＊公開講義
伏見憲明（作家）＋ 木下直之
「境界線の快楽」
赤川学（東京大学大学院人文社会系研究科 社会学）
「家族とは誰のことか—家族の境界をめぐって」

【国家】

- 第5回 11月18日 陳天璽（早稲田大学 人類学） ＊公開講義
「国家のはざまに生きる—日本の無国籍者」
- 第6回 11月25日 宮代栄一（朝日新聞社 編集委員）
「文化財の居場所～国境を越えた美術品」
- 第7回 12月2日 小島毅（東京大学大学院人文社会系研究科 中国思想文化学）
「島は誰のものか？～中国伝統思想における「海」～」

【生物】

- 第8回 12月9日 大西康夫（東京大学大学院農学生命科学研究科 応用微生物学）
「人類に役立つ微生物たち—いろいろな境界線から微生物を語る—」
- 第9回 12月16日 諏訪元（東京大学総合研究博物館 人類学） ＊公開講義
「ヒトのはじまり（仮題）」
- 第10回 1月20日 鬼頭秀一（東京大学大学院新領域創成科学研究科 環境倫理学） ＊公開講義
「まもるべき自然とは何か、駆除されるべき生物とは何か——その「境界線」からさぐる環境倫理」

【地球】

- 第11回 1月27日 城山英明（東京大学政策ビジョン研究センター、大学院法学政治学研究科 行政学・国際行政論）
「空間の区分と管理—海洋と宇宙の場合」
- 第12回 2月3日 須藤靖（東京大学大学院理学系研究科 宇宙論・太陽系外惑星）
「宇宙の境界、地球の境界」